Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/fudankyzuihitsu008800

齋藤茂吉著

随筆 不斷經

書物展望社版



不斷經　目次

隨筆

不斷經

不斷經

昭和五年八月四日から丸五日の間、紀州高野山の淸淨心院に宿つてゐて、アララギの第六回安居會を開いた。曉天の暗いうちから二更の夜に至るまで歌の事に沒頭して、五日目の八月八日に閉會した時には皆が皆相當に疲勞して居た。

九日の朝、百十數名が銘々に下山したが、土屋文明君を指導者にして若手が八名ばかり、高野山から天の川の山中を過ぎ、大峰越をして吉野へ拔けるコオスを取つて出發した。ルックサックを背負ひ草鞋脚絆のもあり、草鞋で脚絆無しのもあり、靴のもあり、五日間の行事に疲を見せない若者揃で、私等中老組數名は羨しさうにして一行の出發を見おくつた。

皆の立つてしまつたあとは、がらあんとして寂しくなつたが、氣安にもなつて疊のうへに寢たり茶を飲んだりしてゐるうち午になつた。數人は早目に午食を濟ませて、それから宿院を出て行つた。

中村憲吉君と森山汀川君と私と、それから高野山上に住む稻岡卯一郎君と四人で、けふは丁度盆供不斷經といふ行事があるから、その參會の許を得るのに稻岡君が斡旋盡力せられた。この行事は七日七夜連續の行事で高野山に限られたものである。いつもは金堂で行はれるのだが、今日は大會堂で行はれるといふので、四人はその近くの杉の樹のところに休んで、時の來るのを待つた。

僧侶たちは追々集まつて來る。多くは若い大衆だが、中には、天が晴れて暑いので、扇子などで顱頂を蔽ひながら來る老僧もゐる。三三五五集まつて大會堂には大勢の僧侶が入つて來た。

そのうち行事が始まつた。僧侶は百人ばかり居り、小さいのは十四五歳、それ

から六十を越えた老僧もゐる。大部分は若い大衆で、その間に三十代四十代、五十代の僧が少し交つてゐる。即ち、上綱級以下の入寺も新發意も交つてゐるのである。衣は襲も精好も麻である。襲即ち衣は、白の裏付黑で、精好即ち袈裟は白である。それから、後頭部のところ、よく小倉百人一首の僧正遍昭に見るやうな僧綱領といふ、尖つたものの附いてゐるものを著てゐる。これなども私には珍らしい。

參會してゐる在家は、吾々四人、それから、三十歳を幾つか過ぎた美しい孀らしい女と、その子らしい十五歳ぐらゐの少女と、小さい經机のうへに男の寫眞を一つ供へてあるのを見れば、盆會に際し故人の冥福を祈るためだといふことが自づから分かる。二人はつつましく相並んで坐つてゐる。娘が右、その左に母が坐つてゐる。その左に續いて、森山、中村、私、稻岡といふ順序になる。それから若い西洋婦人が一人來てゐた。それが稻岡君の左に窮屈さうに兩足を折つて坐つ

てゐた。

それから、この盆供不斷經といふのは、面倒な古式に據つて行はれるので、歩く方向でも、折れ曲るところでも、踏留まるところでも、法則があるので、これは空海時代からの傳統であつたのであらう。好く調査はせぬけれども、大體さういふ感じがした。毎年一回一七日夜不斷にこれを行ひ、先輩が交つて後輩の大衆に傳へるのであるから、高野山がある限り、何千年でも何萬年でも、存續する道理である。

看經は般若波羅密多理趣品であるが、普通の宗旨では、如是我聞をニョゼガモンと讀むが、此處ではジョシガブンと讀む。一切如來を普通の宗旨ではイッサイニョライと讀むが、此處ではイッセイジョライと讀む。それゆゑ、かういふ音の音樂的要素は一種特有である。

そして列を作つた老若の僧侶が、同じやうな音を繰返へして合誦し、はじめは

遲くてゆつくりだが、それが段々速くなつて來る。それがただ聽いてゐると、早口にジャジャジャジャジャと聞こえるほどである。例へば、純一圓滿、清淨潔白、説一切法清淨句門、所謂、妙適清淨句是菩薩位、慾箭清淨句是菩薩位、觸清淨句是菩薩位、愛縛清淨句是菩薩位、一切自在主清淨句是菩薩位、見清淨句是菩薩位、適悦清淨句是菩薩位、愛清淨句是菩薩位、慢清淨句是菩薩位、莊嚴清淨句是菩薩位、意滋澤清淨句是菩薩位、光明清淨句是菩薩位、身樂清淨句是菩薩位、色清淨句是菩薩位、聲清淨句是菩薩位、香清淨句是菩薩位、味清淨句是菩薩位、といふ具合に、セイセイ・クシホサキといふ音が連續しつつ歩を進める。

そして、經の或る場所に來ると、時薄伽梵、毘盧遮那如來といふ中曲がある。これには音譜が出來てあつて、ただ聽いてゐると、支那人が歌曲を歌ふのを聽いてゐるやうである。支那人に唄一つ歌つて呉れないかといふと、丁度さういふ聲を出して歌ふが、普通佛教の寺院で唱へる喝などの節まはしとは全く違ふのであ

つた。私はその時思つた。なるほど高野山の傳統は古い。この節まはしは空海が唐から將來したその儘の節まはしで、代々傳へて亂れずにゐるのであらう。それだけでも高野は愉快である。

この節まはしは一人で唱へる。その時には全體の僧侶が歩みをとどめる。そしてそれが濟むとまた歩きつつ讀經を續ける。それが前に云つた如く早口にジャジヤジャジャジャジャといふやうに聞こえる。それからまた歩みをとどめて、シフソキヤフワン、ヒロシヤダジヨライといふ節まはしがあつて、それからまたジャジャジャと誦しつつ歩み出すといふ順序である。

はじめのうちは並んでゐる若い僧侶などが、この若い孀婦を一瞥する。さういふ僧侶は一人や二人でない。中には遠く前方を見つめて側目も振らない老僧もゐるが、多くの僧侶はその女の方をじろりと見る。それから時々笑ふ僧侶がゐる。聲こそ出さないが、嚴肅な顔付ではない。それが如何にも目立つて見えるので、

側にゐた中村憲吉君が舌打をした。讀經も何となく不揃で、第三者の吾々自身が既に極まりの惡いといふところがある。私は中村君に示すために、

『末世（まつせ）ダヨ』

と指で疊のうへに書いた。もう是等の僧侶の心には、親禮佛足（シンレイフツソク）、獻自心眞言（ケンシシンシンゲン）などの眞率謙虚なところは決してあるまいなどといふ、第三者として吾々の我儘な要求も批評も交つてゐたのであつた。

併しそんな吾々の批評などにはかまはず行事が進行して行つた。それから、今まで一天晴れてゐたのが、鬱々として雲が出て來たらしく、もうそれに伴ふ雷鳴が聞こえる。はじめは杉樹立を越えて、底ごもりのやうな音であつたが、その雷が段々近くなり、大きくなつて來て、雨が非常な勢ひで降つて來た。堂內が暗澹として、障子の外の土砂に叩きつけるやうに降る雨の音が聞こえる。そのころ、讀經がいつの間にか調子づいて來て、もはや側目をするやうな僧侶は一人もゐな

い。悉皆緊張した顏をして一刻も弛まないといふ具合である。中村君の體を突きながら、

『ナカナカイイヨ』

から私は疊に書いた。友は默つて點頭したが友にももう舌打をするやうな素振が無かつた。さうしてゐるうちに、雷が益々ひどくなつて來て、ゴロゴロなどと形容するわけ合のもので無くなつて來た。英語の thunder でも、獨語の Donner でも、佛語の tonnerre でも、これはゴロゴロから來てゐるのである。然るに此處の雷はそんな處を通り越して、もはや物の炸裂する時のやうな鑛物音性になつてゐた。電光がひらめいて額のところを通過したかとおもふと直ぐさまに鐵板か何かの裂けるやうな音がして、ビリビリッといふ雷が續けざまに通過した。疊も机も障子も堂內の空氣も僧侶の一群も、刹那にこの激烈な雷鳴に包容せられた。後になつて分かつたが、その日に高野山には八ヶ處も落雷があり、大會堂の直

ぐ近くの池邊の木にも一つ落ちたのであつたから、强烈だつたのも無理がない。支那にも、迅雷とか震雷とか、轟雷とか獰雷とか種々あるが、硠雷といふのもある。また王逸賦に、『雷霆兮硠硠』とあるのなどは、辛うじてこの雷の鑛物音性の激烈を傳へて居るのかも知れない。そして讀經は依然として進行した。然かも雷鳴中の讀經は益々調子づいて來て、すでに全體が渾然とした合唱音樂になり切つてゐた。これには小癪な吾々にも批點の打どころが無かつたと謂つていい。

雷鳴がやうやく弱つて、遠ざかり行つたころ、僧侶の群が二手に分かれて、行事が續行して行つた。そして、弘法大師增法樂、大樂金剛不空眞實三摩耶經、如是我聞、時薄伽梵、毘盧遮那如來と云ふあたりになると、音聲がひどく强烈になつて行つた。

それから、善哉、善哉、毘盧遮那佛と云つた時には、この二派の僧侶群が突如として爆發するやうな大聲を立てた。そして突擊・吶喊をするやうな恰好をした。

これには私などもただ呆氣にとられた貌であつた。これは、手言といふのださうである。

この看經行事が同じやうに、三座繰返されたわけである。そして終に近づくに從つて、全體が峻厚莊嚴なものになつてゐた。この不斷經は、前にも云つたとほり、盂蘭盆會の一部で、陰曆七月七日の辰時から同十四日卯時に至る七晝夜の間金堂で行ふのが常で、不斷といふ名は、有緣無緣諸聖靈追福のため、七日七夜不斷聯續の法會だといふのに本づいてゐる。往昔は一七日夜八十四時大衆一千三百餘、中曲三昧二百十座、供養法四百二十座、理趣經四萬五千五百卷を讀誦したものである。

成程かういふ猛烈な讀經の終末もあるのである。普通の宗旨の讀經は靜寂な心持で終るのが多いが、この場合のやうに吶喊式のも珍らしくていい。菩提行願不退轉を示す僧侶の意力としては、これくらゐの恰好も亦大切である筈である。

さうして觀れば、この自恣的大調和の團圓を齎すには、はじめの不熱心なやうな僧侶等の行爲が却つてよかつたのかも知れない。何しろこの行事は決して平凡ではない。やはり何か空海の息のかかつてゐるところがあるやうな氣がする。そんなことを思ひながら私等も堂を出でた。

雨が止んで、杉の大樹の梢からはしきりに雨雫が落ちてゐる。もう空からは強い日光が差して居る。左右に小さい僧を隨へた老僧が扇子をば禿げた頭にかざしたりして寺院の方へ歸つて行くのが見える。今しがた緊張した行事をしたことなどはけろりと忘れたやうにして樂しさうに歩いてゐる。

『彼等はちつとも雷を恐れなかつたねえ。やはり僕等より鍛錬を積んでゐるのかねえ。』

『僧正がたはもうたいへんな御修行をつんで居られます。また高野は夏分になりますとあゝいふ雷はなかなか多うございます。』

『この一山の中では、どうしても在家の人よりも偉いところがありませう。偉いと云つてはをかしいが、無理のないことを、自然にやるやうになつてゐるのでせう。何だか自由に樂にやつてゐるところがありましたね。看經も自然に發展して行きましたね。』

『僕等の給仕してゐる小僧も行つてゐたね。』

『一人行つて居りました。』

『あゝやつて覺えるんだね。彼等もなかなか大變だ。』

『あの雷には僕も實は驚いた。今日立つた連中も、何處かで雨に逢ひはしないかね。』

『だいぶ越えたでせうから、運が善ければ雨に逢はずに濟んだかも知れません。』

『雷がビリビリッと來たとき、あの女が僕の膝につかまりましたよ。何だか變な氣がしました。』

『變な氣は好いな。そりや森山君の德に授かつたんだ。齋藤君なんかには授からないね。』

『さうか。そんなことがあつたか。まあ森山の人德にはかなはない。さうか、女が急に君の膝につかまつたんか。』

『娘さんの方が、その儘坐つてゐましたよ。』

『ははあ。娘の方はまだつかまる經驗を知らないんだな。お母さんの方は度々つかまつた經驗があるんで、そこで樂にやつてのけたわけだな。』

『本能ではなかつたといふわけだらう。』

『さうか。娘の方がお母さんにもつかまらずに居たか。或は娘さんの方がお母さんよりも、強い素質かも知れんね。亡くなつたお父さん式なんかも知れんね。』

『併し、お母さんの方が自然に女らしく出來てゐるとしてもいいな。あゝいふ時に膝につかまるのが女の本態として置く方が氣持が好くはないか。』

つまり、一切無戲論如來（いつさいぶきろんじよらい）に贊成することにして、四人は夕方新別所（しんべつしよ）に行き、其處で沙羅雙樹の花の散るのを見た。

それから、清淨心院で一夜眠つたが、夜半を過ぐると、傾いた月の光が疊のうへまで差込んで來て、何とも云へぬ趣があつた。月光の美論などは陳腐になつてしまつてゐるが、實際に當ると決して捨てられるものではない。かういふ月光を浴びてはじめて明惠（みやうゑ）あたりの歌調に參ずることが出來る。また、病身無レ伴臥ニ空山一の趣をも味ふことが出來る。私等も安居會が果ててからはじめてこの月光を知つたやうなものであつた。

右は昭和五年夏だから、もう丸五年になるわけである。そして中村憲吉君はもう故人になり、今年五月五日が丁度一周忌に當つてゐた。不斷經に列した次の日私等は下山し、大阪の川舟で中村君は森山君と私とに鰻を食はせた。それから三

人は飛鳥に行つて宿つた。その夜も多武の峰から明月が出で、三人は露で濡れたやうな道を踏んでその邊を歩いたのであつた。

翌日、中村君は一人郷里へ向つて立ち、私と森山君と二人は、吉野竹林院に行つて、夕がた大峰越をして來た土屋一行八人に落合つたのであつた。

それから森山君と私と二人が、西行庵を見に行つた。途中で太陽は沒したが、吉野谿谷の流に映る赤い光がまるで血のやうであつた。私は日沒後の殘光に幾度も接したが、こんなに美しい眞赤な光を見たことがない。私の處女歌集の名は、「赤光」といふのであり、また露伴翁の「二日物語」にも赤光云々の文字があつて忘れずにゐたが、吉野の赤光は實に何とも云へぬものであつた。私はその時以來和歌を作らうと思つて時々苦心したけれども未だ物にならずにゐる。散文なら紅血のやうだなどでも我慢が出來るが歌ではさうは行かない。そこで困つてゐるのである。

——文藝春秋　昭和十年八月號——

佛法僧鳥の雛

先ごろ三河鳳來山から、佛法僧鳥の啼聲をラヂオで放送したので、靈鳥（れいてう）のこゑを疊のうへで聽くことが出來た。

佛法僧鳥のこゑは高野山上でも都合が惡いとなかなか聽けない。奥の院で一晩あかしても聽けなかつた人もゐるし、大門（だいもん）のところに潛んでゐてたうとう聽けなかつた人もゐる。

然るに先ごろの鳳來山からの放送は實に立派なものであつた。雨あがりの月明の夜に啼く場合が多いやうだが、あの沈痛（ちんつう）で徹（とほ）るこゑは何とも言へないいいこゑである。

その佛法僧鳥といふのは奈何いふ鳥かといふに、それは德川時代あたりの隨筆をはじめ、大體の說がきまつてゐて、剝製も出來て居り、高野山では繪葉書にして賣つてゐるほどであるのに、どうもあれは疑はしいといふ說が出て、野鳥研究家、動物學者などの間の調査の結果、本物の佛法僧鳥は木葉木菟といふ木菟屬の鳥だといふことになつた。そのことが鳳來山からラヂオ放送のあつた數日後に、東京朝日新聞に載つた。

それから程經て友人の牛田良平氏から來書があり、その木葉木菟の實物を大岡山の竹野家立氏が飼育してゐる。のみならず竹野氏のところの木葉木菟は四羽の雛を伴つてゐる。木葉木菟を東京で飼つてゐる人は竹野氏のほかに二人ゐるけれども、雛を持つてゐるのは竹野氏のだけで、これは誠に珍中の珍である。それを竹野氏にお願して見せてもらつた。そして私にも見せてもらふやうにお願したから行かないか、時間打合はせのうへ案内するといふ書面であつた。

これは忝いことだ。そこで七月十五日午後一時に牛田氏と目黒驛で落合つて、二人で竹野氏方をおとづれた。竹野氏の家は所謂「小鳥の家」で、野鳥が自然のままの生活を其處で營んでゐる。

竹野氏は快く私等二人を引見せられて、それから木葉木莵即ち佛法僧鳥の居る籠を持つて來て示された。木葉木莵は籠の一隅にうづくまつてゐる。眼を半分ほどひらいてゐる。角膜は眞黃色でその中央に瞳孔が黑く細くなつて見えてゐる。頭の上部に木莵一流の角の形した羽毛が立つてゐる。羽毛は黃褐色で一種の艶を持つて居り、黑い斑がところどころにある。

その親鳥の羽の下に雛が一つ潜んで居り、もう一つの雛は親から離れて居る。雛は薄い灰色をし、出かかつた羽翼の處だけ斑點狀に黑くなつて見えてゐる。竹野氏は手を籠に入れて、親鳥の翼の下のもう一つの雛を出され、『この方がもつと大きいのです』などと言はれた。雛は二つとも時々啼く。それが幽かで鈴を振

る音のやうでもあり、蟋蟀のまだ稚い時の聲のやうでもある。何しろ小さくて愛すべき聲である。この雛が大きく育つて、高野山のやうな幽邃な木立にゐると、あゝいふ高い沈痛なこゑを出すやうになるものと見える。

『この親もラヂオのやうにあんなに高くはありませんが、隣室までよく聞こえる程度で、やはりあゝいふ調子に啼きます。』

『佛法僧と三つのやうに啼きますか。』

『あゝはつきりしませんが、やはりあんな調子です。』

『特に月夜の晩に餘計に啼くといふやうなことはありませんか。』

『そこまではまだよく分かりません。何せ初めて飼ふんですから、見當の附かない點が多いんです。』

親鳥は依然として動かない。雛だけが時々動いてゐる。それから籠の中には小さい皿が置いてあり、皿には、まだ小さい蝗蚸(ばつた)が幾つか入つてゐる。蝗蚸(ばつた)の子は

種類によつて靑いのも居るし褐色のも居る。また蟷螂の子の小さいのも入つてゐたし、それから、葡萄の葉などによく來てたかる黃金蟲といふ蟲の頭も入つてゐた。

竹野氏はその蜈蚸の子を指でつまんで雛の嘴の處に持つて行くと、雛はぱくりと口を開いてそれを食ふ。そして幾度も口を動かして如何にも旨さうである。雛は三つも四つもその蜈蚸の子を食べた。それから竹野氏は蜈蚸の子を親鳥の嘴のところに持つて行つた。親鳥はそれを銜へたが、呑込まうとしない。その儘ぢつとして居る。

『あゝやつて自分で呑込まずにゐて、雛の口に持つて行つてやります。しかし自分でお腹のすいてゐる時には自分でも食べます。今はお腹がすいてゐないんでせう。黃金蟲のやうな大きなものになりますと、親がそれを銜へてゐて雛に引つぱつてちぎれさせるらしいのです。今はあんなにして動きませんが、これで母性愛

といひますか何といひますか、相當に強い鳥らしいんです。』

『餌は最初からかういふ種類だといふことがお分かりだつたのですか。』

『いいえ、何しろはじめて雛を育てようといふんですから、全く見當がつきません。併し親が附いてゐますから何とかなるだらうと思ひまして。……いろいろの物を入れて置きますと、次の日に全く手をつけないものもあり、著しく數の減つてゐるのもありますから、それで大體の見當がついたわけです。この螇蚸がたいへん好きなやうです、また、あとでお目にかけますが、大木葉木菟といふのがゐます。それの餌が大體分かつてゐますから、それも參考になりました。擂餌は駄目です。』

『鈴木さんの飼はれてゐる木葉木菟はどんなでせうか。』

『先日一寸見せて貰ひましたが、羽の色がもつと黒く、これとは餘り似てゐません。雄と雌とで違ひますか、こつちが雌であつちが雄ですか。それとも年齡の關

係ですか。ひよつとすると、鈴木さんのはまだ年齢が若いのかも知れませんね。』
『さうおつしやれば、この雛の出かかつた羽が皆黑うございますね。』
『その年齢の考が或は當つてゐるかも知れませんが、何せまだ經驗が淺いんですから、萬事これからといふところです。雛は四つ孵つたのでしたが、二つ落ちましたのです。はじめからこの二つ程にはまゐりませんでした。』

竹野氏は親鳥の羽をひろげてその下に雛を入れてくれた。すると二つの雛は、いかにも安樂だといふ樣子で嘴を下にして眠りかけた。その樣子は何ともいへないいいものである。慈母觀音などといふ功德は鳥獸の世界でも毫もかはるところがない。

『親鳥がゐなくては、お育てになるのは困難でせうか。』
『先づ駄目でせうね。』

親鳥は先程くれた青色の蜈蚣の子を口に銜へた儘ぢつと動かずに居る。『いつ

か、この籠の窓のところにゐたのが、非常ないきほひで後しざりしましたが、その時だけで、あとはいつもこんなに靜かにして居ります』と竹野氏が話された。

『この雛は孵つてから幾日目ですか。』

『十日目ぐらゐです。』

『生長がたいへん早うございますね。』

『さうです。もう目が明きかけて居ります。』竹野氏は、所謂『巣引』といふ飼育法の大家で、卵を生ませ、孵化させ、雛から大きくして、その習性を研究して居られるのである。鵺といふ鳥、卽ち虎鶫などは如何にも樂しさうにして庭に飼はれてあつた。

私等は、この佛法僧鳥とその雛に恙なからむことを心中にいのりながら、深く感謝して竹野氏の家を辭した。天日の光が強く、汗のにじむ午後であつた。

——若草　昭和十年九月號——

佛法僧鳥の思出

牛田良平君から使があつて、佛法僧鳥に就いての經驗を少し話せといふことであるから、少しく話さうとおもふ。

佛法僧鳥を聽いた人の文章などを讀んで、私も一度聽いて見たいと思つてゐたが、なかなかさういふ機會はないので駄目であつた。ところが、大正十四年の初夏に、島木赤彦君等と木曾に行つて山中に一泊したとき佛法僧鳥を聽いた。しかし、こゑは非常に遠く、幽玄なものとして受取つたのであつた。木曾の一夜は佛法僧鳥よりも寧ろ慈悲心鳥が近くで鳴いたので、その方が主であつた。そして佛法僧鳥と稱する鳥の剝製を見せて貰つたり、その鳥の習性に就いて話して貰つた

りした。

その年の八月に、岡先生、土屋君等と一緒に高野山上に一泊して、奥の院で佛法僧鳥を聽いた。これは二羽がこもごも鳴き交して、その聲が漸々近寄つて來る趣が何とも云へなかつた。しまひには私等との距離が一二町ぐらゐの所までになつた。そして木曾で聽いたやうな幽玄な趣といふよりも、もつと明快な、切實で且つ朗かなものであつた。丁度月明の晩で、殊に名山の奥の院で聽いたのであつたから、その幸運が却つて、私等の佛法僧鳥人工説などを導き出す機縁ともなつた程、私等の聽いた佛法僧鳥の聲はいいものであつた。

その翌年八月、私等は武州三峰山上に宿つて、五日間歌會を開いたのであつたが、山上に著いた時にはまだ日が沒せずにゐて、谿谷に夕日の光が一面に差してゐた。その趣が非常に靜寂なものであつたから、私がそのとき、『黄なる光は谷を照らせり』などといふ歌の句を作つたほどである。ところが、その時私等の頭

の上で、もう佛法僧鳥が鳴いてゐた。

その聲をきくと、私には直ぐ佛法僧鳥だといふことが分かつたので、非常に喜んで友人等に宣傳したのであつたが、山上の人々も、それから秩父方面から上つて來る人々も、そこの谷間に住んで居る農民も、それを佛法僧鳥だといふことは知らなかつた。

この山上も、また高野山上も檜林であるから、この鳥は檜林と密接の關係があるだらう。それから、その聲は、パンパンパンといふ具合に、鑛物音性のところがあるかと思へば、チヤチヤともいふべき絞るやうな肉聲をも混じて居り、ブッポウソウウと聽けば聽けるやうな、晝鳴く鳥のこゑには無い切實な要素を持つてゐた。歌の批評などをしてゐると、直ぐ私等の頭の上でしきりに鳴いた。山上では、私は『うつそみの悲しむごとし月あかき山(やま)の上(うへ)にしてひびかふ鳥よ』などといふ歌五首ばかりを作つた。それであるから、佛法僧鳥の聲ならば最早卒業とい

ふやうな氣持で、みんなが下山したのであつた。

三峰山には、そんなに澤山佛法僧鳥が居るけれども、新聞などでもあまりそれを宣傳しない。また土地の人もさほどこの鳥の聲に重きを置いてゐない。しかし、この鳥を聽くつもりならば、高野山まで行つて難儀して聽くよりも、この山で極めて樂に、且つ高野山よりも澤山に聽くことが出來る。

それから一昨年になつたが、九月信越線熊の平驛を通過したとき、谷をへだてて向うの森にこの鳥が鳴いてゐた。一つだけであつたが、しばらく鳴いて、あとは止んだやうであつた。

それから、今年六月、三河鳳來山からのラヂオ放送があつて、私も久振りであんな佛法僧鳥のいい聲を聽いたのであるが、その氣持は三峰山上のときと同樣であつた。この聲は私等ばかりでなく、日本全國の人々が聽いたわけで、ラヂオ放送の有難味を同樣に感じたに相違なかつた。

私はアララギといふ歌の雜誌に關係して、その投稿歌を選んでゐるが、鳳來山のラヂオ放送以來、幾首も幾首も佛法僧鳥のこゑを聽いたといふ歌が私の手許に屆いた。しかし、感心する歌は殆どなかつたやうである。この現象は私自身にも極めて興味あることで、深山の檜原にこもつて鳴く野鳥の切實なこゑも、都會の家の疊の上で聽くといふことは、實際山上で聽くのとは差別がないわけだが、歌などに作る場合には差別があることとなるのであらうか。

それから數日經つて、新聞紙の報導するところに據ると、今までの佛法僧鳥といつて、繪に描いたり、剝製にしてその繪葉書を作つたりしてゐるのは、實はあのいい聲の主ではなく、あのいい聲の主は木菟の一種類『このはづく』だといふことであつた。なるほど野鳥であるから、捕獲するのに困難だらうけれども、推察するに從來佛法僧鳥と稱してゐたものは、古い時代からの言傳へであるから、それを疑つて新しい研究をしようともしなかつたのであらう。それだから、中村

幸雄氏の如き研究家が、折角新しく發見しても、專門家仲間だけの話で一般化してゐなかつたのは殘念である。これが若し醫學上の研究の如く、人間の實際生活に直接關係ある事柄ならばもつと早く分かつた筈だと思ふが、佛法僧鳥などは先づ餘裕のある人の研究對象といふことになるだらうから、從つて發見も稍おくれたといふことになるのであらう。また、野鳥の研究飼育にも、いろいろ面倒な法規などがあつておもふやうには行かぬらしい。

しかし、私等素人側からの希望を露骨にいふならば、從來の佛法僧鳥と言はれてゐる鳥の習性と、『このはづく』の習性とをもつと澤山實驗した上で、殊に『このはづく』を直接山林に飼養して實驗を重ねられんこと、いつぞや新聞に見えてゐた『山鳥』習性の研究の如き程度に、一日も早くなつて貰ひたいやうな氣持がするのである。（昭和十年七月九日談）

——野鳥　昭和十年八月號——

籠居漫筆

歐羅巴にゐたときは文藝に關する書物よりも醫學に關するものの方が心を牽いて、いろいろと古いところも漁り、ベルリンではロータッケル、ライプチヒではフォックあたりの階上に行つては、論文の別刷などをさがし、金の工面をして買込んだのは幾箱にもなつて日本に送られた。そのころ、書物を日本に送るのはなかなか面倒で、稅金がかかるので一たん墺太利に送つて、そこから日本におくるといふやうな順序にしたりして、苦心もすれば、食べ物の儉約までして、算段をしいしい買ひ溜めたのが大正十三年くれの火事で燒けてしまつた。

どうして醫學の書物を買込んだかといふに日本に歸つたらどう怠けるにしても

一年に一つの小さい研究ならば出來るといふやうな見込が立つたからであり、例へば自分の病院の片隅の研究室でも、一年に一つならば出來るとおもつたので、歐羅巴の專門の研究室に居るとさういふ空想が常に湧いた。空想ばかりでなく、何か爲ないと居られないといふやうな一種の策勵が待つてゐるやうな具合であつたから、私のやうなものでもそんなことを爲したものかも知れなかつた。

研究室に來る連中を見るに、晝は臨床の病院に勤めてゐて、夕方病院がひけるとパンを持つて研究室に來て、せいぜい二三時間勉强をして歸る。それが半年も經つうちに一つの論文が出來あがるといふ狀態で、その樣子を見てゐるのに、如何にも樂しさうに爲事をして居り、なかには野心の多いいはゆるシュトレーベルといふ奴も居るが、誰も彼もシュトレーベルといふわけ合のものではなかつた。かういふ種類の研究にも、つまり樂しんでする爲事に對してでも一種の策勵があつたのである。

私のごときは、道樂と云つて何一つ持たない、俗謠一つ旨く歌へないのであるから、かういふ業房でする道樂なら、他人に邪魔せずに出來るだらうなどと空想して、大體の準備といふやうな工夫も交つて文獻を集めたのであつたが、それが火焔の中で燃えてしまつては何の役に立つわけがない。そして病院の復興に勢力を使つて、このことは一切放棄することになつた。

それから、歌に關する書物も可なり集めてゐたし、二三の計畫もあり、議論などをするときの用意として雜誌なども揃へてゐたのであつたが、これも同時に燒けてしまつた。

私は書物が一冊もない家に洋行から歸つて來た。そのとき雜誌から頼まれて、歌五六首作らうとしたが、言海一冊無いので字を忘れて困つたことを今でもおもひ出す。そのころ私は寒い曉などに床の中で眼を開いて、これは私に書物を集めるな、讀書などをするなといふ何か大きな命令があるのかも知れない。私に今後

ただ作歌だけしてゐろといふことなのかも知れない。そんなことを思つたりしたものである。

この考は殊勝なものであつたかとおもふ。然るにこの考は實行されずに、また書物を一册買ひ二册買ひ、忝い寄贈書が身邊に溜まつて來て、たうとう今ぐらゐな書物の量になつてしまつた。そして作歌に專念することも出來ず中途に彷徨して居るが、私は時たま、大槻如電翁の話をおもひ出して自らの辯護にして居る。如電翁は震災ですつかり藏書を燒かれたとき、もう書物は買ふまいと決心せられたが、やはりそれが出來ずに古本市などを歩くと述懷せられるといふ話を聞いたことがあつた。

もつとも私のは稀覯本などは買へないから、普通のありふれた廉價本ばかり買ふのだが、それでも街頭を歩いてゐて氣を牽くのはやはり書店である。それから私はそんなに書を讀むかといふに決してそんなに書を讀まない。併し、枕元に書

物を積んで見て居るのが何よりの樂しみで、それを時があれば一二頁ぐらゐづつ讀むに過ぎない。併しこれも讀書のうちに勘定出來るならありがたいことだと思ふぐらゐなものである。また私は漢學が出來ぬから、漢文の書物は、私のは讀むのでなくて視て行くのである。獨逸書英書もまた同様で、これも讀むのでなくて視て行つてゐる。よく記憶せぬが、視書といふ熟語があつたやうにおもふ、その視書といふのは讀むのに對して視るといふのではあるまいかと思つて興味を牽いたことがあるが、その視る方の視書を私はしてゐるのである。

その漢文の分は、縱ひ視る方が大部分だにしても幾らか讀む分もあるから好いとして、私は時々書店から送つてもらふ圖書の目錄を枕元に置いて、それを見て居るのが書を讀むよりもつと樂しみである。これは無論讀書とは謂はれないのだが、樂しみといふ點からいふと第一等の讀書のやうな氣もして居る、私の讀書の程度はそんなものであるから、中味は推して知るべしである。

併し歌人としての覺悟は、『寫生』にあるので、讀書からは直ぐに目に見えるやうな功德があらはれて來るとは限らぬものであるが、私の場合のやうな貧弱な讀書程度のものでも、私が從來の歌人といはれて居る人々よりも稍複雜性を有つ歌を作つてゐるのは、この一二頁ぐらゐづつの程度の讀書がやはり役立つて居るのかも知れないのである。鷗外の「不思議な鏡」といふ小說の中で、西洋から本を買ふ話を細君としながら、『どうもあれがなくては、己の頭の中の遣繰が旨く附かないからなあ』といふことを主人が云ふ。すると細君が『そんなに西洋から借りてゐて、いつか返せて』といふ。『それは己の代にはむづかしい。子や孫の代にもどうだか。何代も何代も立つうちには、返す時もあるだらう』から主人が答へる。この問答は今まで素通りして讀んでゐたが、立止まつて味ふとなかなか面白い。

疾病に一等症も三等症も無い筈だと愚考するごとく、錢欲と色欲とが下等で典

籍欲が上等だといふ理由が無い筈だと懸考するものであるが、それでも森鷗外のやうな博識が『どうもあれがなくては己の頭の中の遣繰が旨く附かない』といふのが面白いとおもふのである。見様によつては巨萬の富を擁してなほ遣繰が附かぬと叫ぶ貪婪なものと似たやうでもあるし、ひよつとせば禪僧あたりにはこんな批評をしてゐるものが既に無いとも限らぬとおもふが、いづれにしてもこの小説の問答はおもしろいものである。

——東京堂月報　昭和十一年一月號——

寺田博士

寺田博士が藪柑子から吉村冬彦にわたつて書かれた數おほい隨筆に親しんではゐたが、直接お逢ひすることの出來たのは、岩波氏のお蔭であつて、晩餐の席で數名の親しい方々の中に私も交へてもらつて、その席ではじめて博士と相見ることが出來たのであつた。ものしづかな學者で、時々冷徹な諧謔などもいはれるが、根調はしづかな思索者といふ風の印象を受け受けした。それもさう度々でないのだから、私が博士について云々することなどは、實は氣が引けてならぬほどなのである。東京の帝國大學教授で、若くて帝國學士院會員になられたほどの偉い學者であつたが、私などにはどのくらゐ偉かつたか、つひに分からずにしまつ

た。栗山大膳が盛岡に移された後、何とかいつた若い士にむかつて、人間の賢愚邪正は、『實のある話』をして見たうへでなければ分からぬと云つたといふが、いかにもそのとほりで、地球物理學などといふ學問は、その道に入つて、苦勞したもののみがうかがふことの出來るものであらうから、私などが博士を理解し得なかつたのも無理が無いわけである。

また、學者の生涯は政治家などとは餘程ちがふので、先日も、松田文部大臣が死んで、伊藤氏の追悼談の中に、『松田源治君が、歐洲視察旅行から歸つて來た。內務勅參時代のことだ。その歸朝を祝して僕等少數で一杯傾けた時、かれ、僕に、何か藝をやれと强要して聞かない。えゝ面倒なと私、突如、ゆうべ入谷の松源で……とやつたら、かれ、潮吹きの面の如く、口をとんがらかしてそつぽを向いた』といふやうなことがあつた。松田大臣がその歐洲視察のとき恰も私は維也納留學中で少々案內もし、伊太利に立つとき、西停車場まで送つて行つた程なの

で、彼の一角にも觸れたわけであるが、博士の生涯は、たとひ猫の寒月先生でも、松田式の逸話はないだらうとおもふがどうであらうか。

博士が偉い學者であつたことは、實は葬儀のときその輪郭が辛うじて分かつたほどで、私は默つてゐたが、寺田研究所などといふものの存在もそのとき初めて知つたほどである。ただ私は隨筆をとほして、博士はただの學究的學究でないことを感じ、ずつと昔に相撲の力學などについて考へ、また、『そんなものを書いても今の日本では學位も取れず金も儲からない爲かも知れない』といふことが近時の隨筆の中にあつた。かういふことは博士の位置にあつてはじめて云ひ得ることかも知れないが、こんな一寸したことも、勿體ぶる學者は、縱しんば腹の中にあつても、口に出しては云はない。つまり學者が通俗化してしまつて、地金が露出するとでもおもうて、暗默のうちの約束的行爲になつてゐるのかも知れぬが、何しろさういふ點でも博士はひとと違つてゐた。

例へば映畫などについてでもさうである。これは私自身の辯護になるのかともおもふが、博士はいつか、映畫と生理學といふやうな題で氣焔を吐いてゐたやうであつたが、あれなんかも面白い意見で、力強い味方を得たものだとおもひつつ讀んだことをおぼえて居る。

博士の隨筆の中に、「B教授の死」といふ一文があつたのを、私は箱根で養生してゐたときに二度ばかり繰返して讀んだ。これは普通の博士の學問的隨筆とちがつて、別樣の味があり、背景には專門物理學者、東京帝國大學教授といふ肩書が是非なければならぬものだが、それを比較的背後に潛めて、B教授の死を描寫してゐた。專門の物理學者B教授が、異境に渡つて來、妄想のために自殺してしまふ始末を、博士一流のしづかな文章で書いてあつたが、私がこの一文を箱根山中で讀んでゐたころには、博士の病がすでにはじまつてゐたのかも知れない。

昭和十年の初夏だつたらうか。岩波の「文學」で座談會をひらき、幸田先生も

出席せられたのであつたが、これは日本の古典詩が主題のやうであつた。そのとき、博士は、『これは齋藤君の方の學問だが、人間の性格學か何かで、抒情詩型とか敍事詩型とかいふやうに、客看的に診斷が出來るとおもしろいんだがね』などとも云はれたやうであつた。博士の心の向け方が萬事さういふ風であつたかも知れない。葬式の日に門下生の方が、博士がタドンの燃える過程にまで注意せられたことを云はれたが、これも單純なアインファルとして片付けてしまふべきものではない。『人ごとに我が身にうとき事のみぞこのめる』といふ徒然草の語録に對する博士の言そのままを受け納れては間違ふだらう。

昭和七年ごろだつたかとおもふが、柳田國男先生から來書があつて、京都の新村博士の上京を機に、寺田・柳田・新村の三先生と私と四人で一夕食を共にしようといふことであつた。これは改造社の日本文學全集の一冊がこの四人の隨筆集になつてゐるので、この四人が一夕會食懇親しようといふのであり、在京の私と

柳田先生とが幹事になるわけであつたが、新村先生の上京の都合で實行が出來ずにお流れになつてしまつた。私の如きもかういふ偉い學者の方々の中に交へてもらつたことが誠に光榮であるので、會合の幹事は是非したいとおもつたのであつた、それを今度おもひだした。

博士の葬式の日に、門下生の方の追憶の言葉があつたが、博士が部下に對して決して小言をいはれなかつたといふことを話された。私はそのことを聽いて感動してひどく恥入り、私の偉くなれないのはこの憤怒にあるのかも知れないなどと身勝手な空想に耽つたものである。

博士の專門學問の方面になると、教養がなければ近寄れないが、多くの隨筆の中には博士の專門學の實質が反映してゐるだらうから、私等はそれを通じて、多くを學び、不斷に博士を追懷することが出來るわけで、これがせめてもの諦念といふことになるのであらう。

——思想 昭和十一年三月號——

入江子爵

入江子爵が急にお亡くなりになられたことは、悲歎殘念至極のことであつた。子爵は御歌所所長として和歌道のために御骨折になつたことはもはや誰でも知つて居るが、私のごとき民間歌人、特に横好きで和歌を弄んで居る者にとつては、御歌所所長とは緣がとほく、生涯會ふ機もなく、沒交涉で濟んだだらうとおもつてゐたところが、計らずもただ一度面接したことがあつた。

それは、改造社長の山本實彥さんに連れられて華族會館で子爵に會つた。昭和四年であつたか、昭和三年であつたか、もはや夢のやうで、日錄が無いから分からぬが、私は昭和四年であつたらうといふ氣がして居る。

つまり、日本文學全集の一冊が歌と俳句になるので、歌の方に私も關係し、歌の方をいろいろ按配するとすると、明治天皇陛下の御製と昭憲皇太后陛下の御歌とを謹載し奉ることとなる。その謹選を甚だ恐多く僭越なことであつたが私がつかまつることとなつたので、そのことを子爵に申上げ、私の謹選し奉つたものを子爵に書いていただいて、寫眞版にして卷のはじめの方に載せる計畫であつたので、山本さんが私を華族會館に連れて行かれた。

子爵は謹選し奉る方針などについては何もいはれず、私の意見に何でもお任せになるといつたやうな調子で、極くあつさりと話がきまつてしまつた。私の謹選し奉る御製なり御歌なりは、從來教科書などによく載つて居るのと幾らか違ふものになるだらうと推してそのことも申上げたのであつたが、子爵は微笑せられてうなづかれた。冷泉の流をくまれた堂上歌人と野にあつて論戰などばかりしてゐる私とでは、その風格に於て餘程の差別があつた。つまり品に上等下等の差別が

淨玻璃に照らされるよりもはつきりして居た。
　私はそのとき御歌所について種々と質問をして、明治大正短歌史概觀の材料に役立てたが、いま心に銘して忘れぬものは、明治天皇樣が御晚年によく鉛筆を御使用になられて、それで御製を御しるしになり、それを高崎所長の方に御まはしになるといふことであつた。
　明治天皇樣を大歌人として仰ぎまつる私の如き草莽の臣が、鉛筆で御しるし遊ばされた御製稿を心中におもひうかべながら、子爵に御暇申して華族會館を出でたのであつた。
　無限につづく時の流の中にあつて、ただ一度の會合で、もう二たびはどうあつても會ふことの叶はぬことを思つて見て、かういふありがたい言葉にあらはしがたいやうな明治天皇樣の御事を承はつたのである。つまり寶物館で拜觀したてまつる短冊の御製はあれは毛筆で書きたまうてあるが、あれが鉛筆であつたならど

んな御風格だらうかなどといふ想像になるのである。

——短歌研究 昭和十一年五月號——

强羅雜記

○

この夏弱つた體の養生かたがた少し勉强しようと思つて强羅に滯在したことがあつた。あそこの林中に新聞紙を敷いて腰をおろして居ると身心寔に安泰で、時にはうつらうつら眠ることさへある。手厳しい生活にあつては縱ひ三十分でも勿體ないほどな安泰な生(せい)の狀態で、特に七月頃は蚊が尠くていい。

あそこの林中を少し歩いて居ると、急に川の瀨の音が聞こえる。その川が直ぐ眼前を流れてゐるやうに聞こえるから、さうかとおもふとこれは斷崖にのぞんで

ずつと下の方を流れてゐる早川の瀨の音なのである。つまりこの林のずつと下の瀨の音がこんなに上にゐる私の耳には直ぐ傍を流れてゐるやうに聞こえるのである。ほんの少しばかり見える川原などを辛うじて眼界に入れながら聽いてゐると何ともいへぬ音である。これも支那山水畫の氣持で人間を暫らく非人間的にさせるが、畫は眼に愬へるものだから、この聽覺を視覺に移さうとするにはどんな構圖にするか、これも一つの問題だが、恐らく大觀した飛行機からでも見たやうにすれば、氣持があらはれて來るだらうともおもへる。

ある日、その斷崖にのぞんだ林の少し平になつたところに新聞紙を敷いて、人間の戀愛を取扱つた老作家の短篇集を讀んでゐると、歌人などの到底うかがひ知ることの出來ない世界が展開せられて來る。第一その男女の會話が微妙で變化に富み、單純單純と努める歌人の表現法などの相寄ることも許されぬものであつた。私はその會話を繰返して讀むこともあつた。あるとき丁度その斷崖に傾きかかつ

て生えてゐる木の枝に突然山鳩が一羽來てとまつた。これはおもひも寄らぬ光景であつたから、私はおもつた。いまにこの山鳩が啼くかも知れない、或は番ひの山鳩が飛んで來て其處に並ぶかも知れない、さうしたら或は寺の屋根などにゐる家鳩のやうに親嘴などをするかも知れない。人間世界に斯く細かい戀愛があつて見れば、彼等だつてさういふ形式行爲があつてかまはぬなどとおもひながら、勝手に息をころしてゐたのであつたが、彼等にはまた特殊の感覺があるものと見え飛んで行つてしまつた。無論雌の山鳩も來なかつた。早川の谿谷は小田原の方まで續いて海に終るのであるが、このあたりの川の瀨は强羅の山に接近して流れ、四方の山にこだまするらしく、いかにも莊重な長響を持つた瀨の音である。

○

或る日、朝早く飯をすまして明神嶽に登つた。登りつめるところは峠としては

山の一番低い處だが、途中で幾度休んだか知れない。今年は野鼠の大群が熱海方面から移動して來て畑だの竹林だの立木などを荒すので、縣で技師を出張せしめて毒團子を撒いた。その標の赤い布が途中の木の枝にくくりつけてあつたりして氣持も幾らか違つてゐる。

この途中からは對ひがはの早雲山、大涌谿方面が一目に見えるし、早川の谿谷が一目に見えるのでなかなか眺めがいい。特にこの箱根方面は植林がしてその木もそろそろ大きくなるので、實にいろいろの鳥が啼く。中には佛法僧の聲の斷片だか雉子の聲の斷片だか分からぬやうなのもある。かういふことになると、地質の方の專門家、鳥類の方の專門家などの强味を想像することが出來る。

この峠の頂上にのぼりつくと、反對側の方の山は植林がしてないので一面の茅萱で、それが幾つも谿を形成しつつ下の方になだれて行つてゐる。この方が生物の膚を見るやうに原始的に雄大に見える。特に私などに興味あるのは、この方面

の麓の方から押して來る霧が峰の上空で渦まいてゐるが、箱根方面の空まではなかなか來ない。空は連續してゐるのだから來さうなものだが、人間ならば約束でもしてゐるやうに、なかなか來ない。この一つの山にもいろいろな事があつて學者なら無限に興味のあることのやうにおもへる。

其處から二たび上りになつて、今度は尾根づたひに歩く。昭和元年ごろ一度此處を通つて道了山に參拜したことがあつた。そのころに較べれば道の手入が餘程行き屆いてゐる。その尾根に近く豪雨が降つたと見えて、草一面に泥が跳ねあがつてゐる。何といふ草か刺のある葉で薊の葉を大きくしたやうな草が生えてゐるが、その葉などは一面に泥をかぶつていかに雨が强かつたかを想像せしめるに充分である。私はそれに感を催して、

ある時はいかづち鳴りてためらはずこの山の峰に降る雨おもほゆ

といふ歌を作つて見たが、或は、『山の峰』は『山の上』がいいかも知れず、結句も弱くて何とかせねばならぬやうにもおもふ。また、『ためらはず』といふ主觀的ないひ方も、少しば骨折つて見たのだが、表現が出來てゐるかどうか疑問である。私は現實の草の葉に泥のはねあがつてゐるところも咏んだが、この方が平凡でも却つて無難のやうにおもふ。現實に卽して、『おもほゆ』といはねばならぬところに弱點が暴露せられるのかも知れず、字餘りになどしてはいけないのかも知れず、よく自分にも分からない。

○

強羅は、大涌谿、早雲山の方から幾つも谿があつて早川に終つてゐる。その谿は物さびてあるが中には水の無いのも幾つかある。私は時折さういふ谿間に行つて沈默してゐることがあつた。ある時には感傷して次のごときものを作つた。

山なかに心かなしみてわが落す涙を舐むる獅子さへもなし

ひとが讀んだらをかしからうと思つて公表しないが、こんなこともあつた。そしてこの獅子云々といふのは、洞窟内のツァラツストラに從つてゐる獅子が年老いた彼の落す涙を舐めてくれるところが書いてある。それに本づいたのであつたが、こんなことは今の歌人にはちつとも共鳴が無いとおもつて雜誌に出さなかつたものである。併しかういふ靜寂な谿間を私は今でも愛してゐる。そして、今から十年も經つたら、こんなにしてただひとり孤獨に感傷を恣にすることなどは到底出來なくなるだらうと思ふほど、どしどし山林を切りひらいて別莊地になりつつあるのだから、せめて今のうちだけでも愛惜したいとおもふこともあつた。それから八月も末になれば蚊が殖えて來て、ぢつと沈默してゐるやうなことはなかなか出來ないので、さういふ點でも都合のよい期間が短いわけである。

——山と谿谷　昭和十一年十一月號——

歌人の癡語

上

現今歌を作るものは隨分多いが、一般文壇とは餘り交渉が無いと云はれてゐる。また餘り尊敬もされてゐないらしく見えるのは先づ當然といふところであらう。併し僕等の樣に何十年と作歌して、また歌が好きで罷められないものにとつては、勉强すればするほど奥があつて、どの邊が行きつき所かさへ分からないのだから、何事もさう簡單には片づけられない。みそ一文字だつてさう馬鹿にはならぬもののやうである。

その證據には、文壇一流の大家で、その一言一句が文壇を動かし動かししてゐるやうな人が、たまに歌のことなどをいふと、極めて單純素朴でただ一つの愛すべき文章にとどまつてゐる。またさういふ言説に對して、歌の雜誌などでは誰も相手にしない。僕とても專門の歌の雜誌アララギではこんなことは論じないが、この癡語は新聞に載せてもらふのだから一言觸れたわけである。つまりさういふ歌の嫌ひな文壇の大家が歌を尊敬しないのは、尊敬しない方が惡い。歌にも上等下等があつて一樣でないけれども上等の歌は、上等の小說、上等の戲曲、上等の評論同樣に尊敬するのは當然であつて、輕蔑してはならぬものである。

また一つの證據には、いつか新聞に、文壇百人一首が載つたことがある。つまり文士諸氏の歌であつたが、先づ歌として辛うじて及第し得るものはせいぜい十首ぐらゐであつた。あとの人はただ巫山戲て、たかが三十一文字かといつた風で、酒興の座に侍する者などを相手にするやうなつもりで作つてゐるといふ風が

見えた。全力を盡さうと努力した歌は前いつたやうにせいぜい十首ぐらゐで、その他の歌の態度が第一いけないものであつた。そんなわけであらうか、歌壇では誰もあの百人一首について批評したものがなかつたやうである。僕も何かの折にといふので切抜いては置いたが、問題にしてはゐない。あゝいふ態度の文壇人に較べれば、一般歌人は愚でも魯鈍でも、一首について行きつくところまでは行きつかうと努力してゐる點だけでも違ふのである。

さういふ、歌人と文壇人との間柄であつて見れば、歌を強ひて文壇人に尊敬されようなどとおもふのは夢想に過ぎないやうにもおもふし、第一、けるかもを本義とする歌が、てきぱきと接吻する男女が出なければどうしても小説にならないのなどとは、もう第一世界が違つてしまつてゐる。さういふ文壇へ歌壇が進出しようとしたり、文壇に認められようとしたり、やきもきしてゐるのは餘り見よくないと僕などはおもふ。僕の現在はさういふ保守主義、引込思案、退嬰主義であ

る。それだから、青年歌人が何のとやきもきしてゐる點は同情してもよいが、僕にまでさういふ方嚮に勇猛になれなどといふのは困ることがある。近ごろの歌人協會の旗あげなども、時間もあり勢力もあり餘る青年に期待すべきであるから、どうかよろしく骨折つてやつて貰ひたい。何事も輕蔑しない主義からいへば、やはりさういふ結論になるといふものである。

中

山城の筒城の宮に物まうすあが兄の君は涙ぐましも

口日賣

妹と來し敏馬の埼を還るさに獨して見れば涙ぐましも

大伴旅人

妙法院の皇子の大御舟漕ぎいでし吹上を見れば涙ぐましも

平賀元義

ここで、『涙ぐましも』といふ句で止めた短歌三つを出して見た。第一の歌は古事記にあるもので、仁徳天皇と皇后と八田皇女とのあひだにあつて、使に行つた口子といふ者の妹の口日賣（くちひめ）の歌つたものである。第二の歌は萬葉集卷三にあつて、旅人（たびと）が歸京の折に亡妻を偲んで詠んだ歌である。第三は、妙法院皇子卽ち宗良親王の故事を追懷し奉り、備前の兒島の吹上から舟で讃岐へ流されたまうた時をしのび奉る詠歎である。そして三つとも『涙ぐましも』といふ語があるが、これ等の語は、現今新聞雜誌に流行してゐる、『涙ぐましい』云々と、言葉は同じでも、一首全體として、どう違ふか、新聞雜誌にあつて聞くと、厭味たらたらのこの語が、短歌一首にあつて、然かも此等の上等な歌の中に使はれてゐると、厭味でないばかりでなく、非常に强い響を傳へて來るのである。歌の形態と歌言葉との關係はこの實例に於ても大體うかがふことが出來る。

いつぞや三河の蓬萊山から佛法僧鳥のラヂォ放送があつたとき、『潺湲たる谿川』と云つたかと思ふと忽ち、『かそけき佛法僧のこゑ』と云つた。一體『潺湲たる』と、『かそけき』とは調和しない。厭味たらたらである。併し同じ『かそけき』でも、『わがやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも』（大伴家持）となると毫も厭味でないばかりでなく、非常に立派な歌である。それから近頃或る新聞を見ると、映畫の説明か何かのところに、『はろけき海を、或はチャップリンのおどけ姿を』といふのに似た文句があつた。この『はろけき』はどうしても厭味であるが、『このよひのおぼつかなきに霍公鳥鳴くなる聲のおとのはるけさ』（萬葉集卷十）となれば厭味でなくなる。

この、『かそけき』とか、『はろかなる』などといふ古語を、日常茶飯の言語の中に取り入れて使ふやうになつたのは、萬葉調の歌風が歌壇に流行しはじめてからのことである。それを誰も氣づかずに使つて居りながら、その本をなした萬葉

調の歌を輕蔑しようとするのは間違つてゐるし、また、本格的に萬葉調の歌を作らうとする歌人は、『はろけき』と、『チャップリン』とを同一の聲調にして論ずることもなく、また一首の中に用ゐようともしない。

そんなら、歌壇全體を見わたして、その現象は全然無いかといふに、それはなかなかあるのである。併し今差し當つて一々その實例を引くわけには行かぬし、これは僕一人が歌壇を背負つて立つてゐるわけでもないからして、僕が一人で責任を負ふことも出來ない。ただ現在も未來も本格の歌なら、さういふ不徹底な聲調のものは止めた方が好いとおもふのである。僕の歿後のことなどはどうあらうと僕には分からぬが、現實の歌壇ではさうあつて欲しいとおもふのである。

下

歌の言葉はざつと右のやうなもので、極めて特別であるが、僕は出來るだけ、

『言語の直接性』といふことを心掛けて居る。それだから、歌の言葉に特殊な神祕、魔性、メタフィヂックなどをば餘り要求しない。この點につき、改造社の文藝新年號に載つた、萩原朔太郎氏の「虫」といふ散文詩は有益であつたから、少し問題にするなら、この文では『鐵筋コンクリート』といふ言葉がふと心に浮んで、この言葉の、常識で理解されない、或る幽玄な哲理の謎が神祕に隱されてゐるのを解からうとして、偏執狂者のやうになつてしまつて、いろいろの事をする。そして、一友人に對つて『僕の聞くのはね。つまり、その……。その言葉の意味……表象……イメーヂ……。つまりその、言語のメタフィヂックな暗號。寓意。それの祕密。……解るね。つまりその、隱されたパズル。本當なのだ。本當の意味なのだ』などといふ。そして、友の家を跳び出した時、ふいに全く思ひがけなく、憑き物のやうな言葉が飛び出した。それが「虫」といふ言葉であつて、そのために、『私は聲をあげて明るく笑つた。それから兩手を高く上げ、鳥の飛ぶや

うな形をして、嬉しさに叫びながら、町の通りを一散に走り出した』といふのである。

僕等も歌の言葉に就いては、散文家に比して餘計に執著を持つてゐるわけであるが、これ程メタフィヂックな暗號といふやうなものを言葉に强ひない習慣になつてゐる。近代詩人の頭から行けば、萩原氏の感覺のやうに言葉といふものを取扱ふのが本當かも知れず、歌壇にあつても二三の流派では言葉をそのやうに取扱つて作歌してゐるのがあるが、僕等はそこまでは行つてゐない。もつと原始的に素朴に直接的に言葉といふものを考へてゐる。

また、『はるかなる初音はゆめか郭公くものただぢはうつつならねど』といふやうな、聯想をも籠めた面倒な言葉の取扱方をも僕等はしない。

　龍岡に家居る人はほととぎす聞きつといふに我は聞かぬに

これは正岡子規が明治卅四年に作つた歌であるが、一首が萬葉調で統一せられ

てゐるに拘はらず、一つ一つの言葉は素朴で極めて直接である。一つ一つの言葉に、神祕、魔性、メタフィヂック等をば要求してゐない。そこが今の一部の歌人の言葉に對する考と違ふ點であり、またさういふ一部の人から物足りないやうに子規の歌が云はれてゐる點でもある。然るにこの歌の結句は、『聞かぬに』といふのであり、『に』で終つてゐて其處に感動が籠つてゐる。この『に』は、文法的には必ずしも咏歎の助詞ではないが、結句としての效果は、据わりの好い咏歎になる。さういふ點でも、短歌の言葉は特別なものではないかとおもはれる。古語古調をどしどし用ゐる點でもまたさうである。併し僕等はやはり一つ一つの語に魔性のやうなものを餘り詮議しない方の主張で、一首全體としての聲調に重きを置き、次から次と變化して來る新時代の語彙もその全體の中に融け込ませようとする主張である。歌で云ふことはまだまだあるが、今は云ひ得ない。

――讀賣新聞 昭和十二年一月十一、十二、十三日――

三筋町界隈

一

この追憶隨筆は明治二十九年を起點とする四五年に當るから、日清戰役が濟んで遼東還附に關する問題が囂しく、また、東北三陸の大海嘯があり、足尾銅山鑛毒事件があり、文壇では、森鷗外の「めさまし草」、與謝野鐵幹の「東西南北」が出たころ、露伴の「雲の袖」、紅葉の「多情多恨」、柳浪の「今戸心中」あたりが書かれた頃に當る筈である。東京に鐵道馬車がはじめて出來て、淺草觀音の境内には砂がき婆さんの居たころである。この砂がき婆さんは一目眇の小さい媼で

あつたが、五六種の色の粉末を袋に持つてゐて人だかりの前で、祐天和尙だの、信田の森だの、安珍淸姬だの、觀世音靈驗記だのを、物語をしながら上下左右自由自在に繪を描いて行く、白狐などは白い粉で尾のあたりからかいて、赤い舌なども一寸見せ、しまひに黑い粉で眼を點ずる、不動明王の背負ふ火焰などは、眞紅な粉で盛りあげながら描くと云つたやうな具合で、少年の私は觀世音に詣づる每に其處を立去りかねてゐたものである。その媼もいつのまにか見えなくなつた、何時ごろどういふ病氣で亡くなつたか知る由もなく、また媼の藝當の後繼もゐず、類似のわざをする者も出ずにしまつたから、あれはあれで絕えたことになる。その頃助手のやうなものは一人も連れて來ずに、いつも媼ひとりでやつて來てゐた。またその粉末も砂がきとは云へ、砂でなくて饂飩粉か何かであつたのかも知れず、それにも一種の技術があつて萬遍なく色の交るやうに拵へてあつたのかも知れないが、實際どういふものであつたか私にはよく分からぬ。また現在あ

あいふものが復興するにせよ、時代には敵はぬだらうから、あの成行きはあれはあれで好かつたといふものである。

鐵道馬車も丁度そのころ出來た。藏前どほりを鐵道馬車が通るといふので、女中に連れられて見に行つたことがある。目隱しをした二頭の馬が走つてゆくのは、レールの上を動く車臺を引くので車房には客が乘つてゐる。私が鄕里で見た開化繪を目のあたり見るやうな氣持であつたが、そのころまでは東京にもレールの上を走る馬車は無かつたものである。この馬車は電車の出來るまで續いたわけである。電車の出來たてに犬が轢かれたり、つるみかけてゐる猫が轢かれたりした光景をよく見たものであるが、鐵道馬車の場合にはそんな際どい事故は起らぬのであつた。

二

さういふわけで、私は數へどし十五のとき、郷里上ノ山の小學校を卒へ、陰暦の七月十七日、つまり盆の十七日の午前一時ごろ父に連れられて家を出た。父は大正十二年に七十四歳で歿したから、逆算してみるに明治二十九年にはまだ四十七歳のさかりである。併し父は若い時分ひどく働いたためもう腰が屈つてゐた。二人は徒歩で山形あたりはまだ曉の暗いうちに過ぎ、それから關山越えをした。その朝山形を出はづれてから持つてゐた提灯を消したやうに憶えてゐる。

關山峠はもうそのころは立派な街道でちつとも難澁しないけれど、峠の分水嶺を越えるころから私の足は疲れて來て歩行が捗らない。廣瀨川の上流に沿うて下るのだが、幾たびも幾たびも休んだ、父はさういふ時には私に怪談をする。それは多く狐を材料にしたもので父の實驗したものか、または村の誰彼が實驗したもののやうにして話すので、ただの昔話でないやうに受取ることも出來る。併しその怪談の中にはもう話してもらつたのもあるし足の疲勞の方が勝つものだから、

だんだん利目が無くなつて來るといふやうな具合であつた。ところが恰もそのとき騎兵隊の演習戰があつた。卒は黄の肋骨のついた軍服でズボンには黄の筋が入つてあり、士官は胸に黑い肋骨のある軍服でズボンには赤い筋が入つて居る。それを見たとき疲勞も何も忘れてしまつた。私は日淸戰爭の錦繪は見てゐても本物を見るのはその時が初めてであつた。

一隊は廣瀨川の此岸に居り、敵らしい一隊は廣瀨川の對岸の山かげあたりにゐる。戰鬪が近づくと當方隊の一部は馬から下りて廣瀨川の岸に散開して鐵砲を打ちかけた。さうすると向うからも鐵砲の音が聞こえてくる。その音は私には何とも云へぬ緊張した音である。暫らく鐵砲を打つてゐたかとおもふと、當方の一隊は盡く拔劍し橋を渡つて突擊した。父も私もかういふ光景を見るのは生れてからはじめてであつた。私の元氣はこれを見たので囘復して日の暮れに作並溫泉に着いた。その日の行程十五里ほどである。

翌日仙臺に着いて一泊し、東北での城下仙臺に目のあたり來たことを感じ、旅館では最中といふ菓子をはじめて食つた。當時長兄が一年志願兵で第二師團に入營してゐたのに面會に行つたが機動演習で留守であつた。そこで一日置いて朝仙臺を發し、夜になつて東京の上野驛に着いた。そして、世の中にこんな明るい夜が實際にあるものだらうかとおもつた。數年を經て不夜城と言ふ言葉を覺えたが、その時も上野驛にはじめて着いたときの印象を逆におもひ出したのであつた。そのころの燈火は電燈よりも石油の洋燈が多かつた筈だのにそんなに明るく感じたものである。

それから父と二人は二人乘の人力車で淺草區東三筋町五十四番地に行つたが、その間の町は上野驛のやうに明るくはなかつた。やはり上ノ山ぐらゐの暗いところが幾處もあつて、少年の私の腦裡には種々雜多な思ひが流れてゐた筈である。さてその五十四番地には、養父齋藤紀一先生が淺草醫院といふのを開いてゐたの

で、其處にたどりついたのである。醫院はまだ宵の口なので、大きなラムプが部屋に吊りさげられてあつて光は皎皎と輝いてゐた。客間は八疊ぐらゐだが紅い毛氈などが敷いてあつて萬事が別な世界である。また、最中といふ菓子も毎日のやうに食ふことが出來る。

ここに書いた陰曆七月十七日は陽曆にすれば何日になるだらうかと思つて調べたことがある。それに據ると舊の七月十七日は新の八月二十五日になるから、二十八日か二十九日かに東京に著いたことになる。

三

養父紀一先生はそのころ紀一郎と云つたが、紀一といふ文字は非常によいものだと漢學の出來る患家の一人が云つたとかで紀一と改めたのである。父の開業してゐた、その淺草醫院は、大學の先生の見離した病人が本復したなどといふ例も

幾つかあつて、父は淺草區內で流行醫の一人になつてゐた。そして一つの專門に限局せずに、何でもやつた。內科は無論、外科もやれば婦人科もやる、小兒科もやれば耳鼻科もやるといふので、夜半に引きつけた子供の患者などは幾たりも來た。さういふ時には父は寢卷に緼袍の儘で診察をする。私もさういふ時には物珍しさうに起きて來て見てゐると、一寸した手當で今まで人事不省になつてゐた孩兒が泣き出す、もうこれでよいなどといふと、母親が感謝して歸るといふやうなことは幾度となくあつた。硝子を踏みつけた男が夜半に治を乞ひに來て、それがなかなか除かれずに難儀したことなどもあつた。咽に魚の骨を刺して來たのを妙な毛で作つた器械で除いてやつて患者の老人が涙をこぼして喜んだことなどもある。まだ喉頭鏡などの發明が無かつた頃であるから、餘計に感謝されたわけである。

今は醫育機關が完備して、帝國大學の醫學部か單科醫科大學で醫者を養成し、

專門學校でさへもう低級だと論ずる向もあるくらゐであるが、當時は内務省で醫術開業試驗を行つてそれに及第すれば醫者になれたものである。

そこで多くの青年が地方から上京して開業醫のところで雜役をしながら醫學の勉强をする。若し都合がつけば當時唯一の便利な醫學校と云つてもよかつた濟生學舍に通つて修學する。それが出來なければ基礎醫學だけは獨學をしてその前期の試驗に合格すれば、今度は代診といふ格になつて、實際患者の診察に從事しつゝ、その濟生學舍に通ふといふやうなわけで、兎に角勉强次第で早くも醫者になれるし、たうとう醫者になりはぐつたといふのも出來てゐた。

當時の醫學書生は、服裝でも何かじやらじやらしてゐて、口には女のことを斷たず、山田良叔先生の蘭氏生理學生殖篇を暗記などばかりしてゐるといふのだから、硬派の連中からは輕蔑の眼を以て見られた向もあつたとおもふが、濟生學舍の長谷川泰翁の人格がいつ知らず書生にも薫染してゐたものと見え、ここの書生

からおもしろい人物が時々出た。

ある時、陸軍系統と云はれた成城學校の生徒の一隊が濟生學舍を襲ふといふことがあつて、うちの書生などにも檄文のやうなものが廻つて來たことがあつた。すると、うちの書生が二人ばかり棍棒か何かを持つて集まつて行つた。うちの書生の一人に堀といふのが居て顔面神經の痲痺してゐた男であつたが、その男に私も附いて行つたことがある。すると切通一帶の路地路地には濟生學舍の書生で一ぱいになつてゐた。彼等は成城學校の生徒を逆擊しようとして待ちかまへてゐるところであつた。これは元富士署あたりの警戒のために未遂に終つたが、當時の醫學書生といふものの中には本質までじやらじやらでない者の居たことを證明してゐるのである。

醫學書生のやる學問は常に肉體に關することだから、どうしても全體の風貌が覺官的になつて來るとおもふが、長谷川翁の晩年は佛學卽ち佛教經典の方に凝つ

たなどはなかなか面白いことでもあり、西洋學の東漸中、醫學がその先驅をなした點からでも、醫學書生の何處かに西洋的なところがあつたのかも知れない。著流しのじやらじやらと、吉原遊里の出入などといふことも、看方によつては西洋的な分子の變型であるかも知れないから、文化史家が若し細かく本質に立入つて調べるやうな場合に、當時の醫學書生の生活といふものは興味ある對象ではなからうかとおもふのである。

また、醫學の書生の中には毫も醫學の勉强をせず、當時雜書を背負つて廻つてゐた貸本屋の手から浪六もの、涙香もの等を借りて朝夕それぱかり讀んでゐるといふのもゐた。私が少年にして露伴翁の靄護精舍雜筆などに取りつき得たのは、さういふ醫院書生の變り種の感化であつた。

さういふ入りかはり立ちかはり來る書生を父は大概大目に見て、伸びるものは伸ばしても行つた。その書生名簿錄も今は燒けて知るよしもないが、既に病歿し

たものが幾人かゐて、私の上京當時撮つた寫眞にそのころの名殘を辛うじてとどめるに過ぎない。

四

その頃、藏前に煙突の太く高いのが一本立つてゐて、私は何處を歩いてゐても、大體その煙突を目當にして歸つて來た。この煙突は間もなく二本になつたが、一本の時にも煙を吐きながら突立つてゐるさまは如何にも雄大で私はそれまで斯く雄大なものを見たことがなかつた。神田を歩いてゐても下谷を歩いてゐても、家のかげになつて見えない煙突が、少し場處をかへると見えて來る。それを目當に歩いて來て、餘程大きくなつた煙突を見ると心がほつとしたものである。上京したての少年にとつてはこの煙突はただ突立つてゐる無生物ではなかつたやうである。

私が東京に來て、三筋町のほかにはやく覺えたのは本所綠町であつた。その四丁目かに黑川重平といふ質屋があつて、其處の二階に私の村の寺の住職佐原窿應和尚が間借をして本山即ち近江番場の蓮華寺のために奮鬪してゐたものである。私は地圖を書いて貰つて徒歩で其處に訪ねて行つた。二階の六疊一間で其處に中林梧竹翁の額が掛かつてゐて、そこから富士山が見える。私は富士山をそのときはじめて見た。夏の富士で雲なども一しよであつたが、現實に富士山を見たときの少年の眼は一期を劃したといふことになつた。この劃期といふことは何も美麗な女體を見た時ばかりではない。山水といへども同じことである。

鄕里上ノ山の小學校には時々郡長が參觀に來た。江嘉氏であつたとおもふが鹿兒島出身の老翁で、英吉利軍艦に談判に行つた一行の一人であつた。校長に案內されて郡長は紙卷の煙草をふかしながら通る。ホールで遊んでゐる兒童が立つて敬禮をする。そのあとに煙草の煙の香(かをり)が殘る。煙は何ともいへぬ好い香(かをり)で香ばし

いやうな酸つぱいやうな甘いやうな一種のかをりである。少年の私はいつもその香に淡い執著を持つやうになつてゐた。然るに東京に來て見ると、うちの代診も書生どもも嘗て郡長の行過ぎたあとに殘つたやうな香のする煙草を不斷吸つてゐる。ひそかに其れを見ると皆舶來の煙草である。そしてパイレートといふのの中には美人だの萬國の兵士だのの附録繪がついてゐるので私もそれを集めるために祕かに煙草を買ふことがある。煙草ははじめは書生に吳れてゐたが、時には火をつけてその煙を嗅ぐことがある。もともと煙の香に一種の係戀を持つてゐたのだから中學の三年ごろから、祕かに煙草喫むことをおぼえて、一年ぐらゐ偶々に喫んでゐたが、ある動機で禁煙して、第一高等學校の三年のときまた喫みはじめた。その明治三十七年から大正九年に至るまでずつと喫煙をして隨分の分量喫つた。巣鴨病院に勤務してゐた時、吳院長は、患者に煙草を喫ませないのだから職員も喫つてはならぬと命令したもので、私などは隱れて便所の中で喫んだ。それ

くらゐ好きな煙草を長崎にゐたとき罷めて、佳い煙草も安く喫める歐羅巴にゐたときにも決して口に銜へることすらしなかつた。一旦銜へたら離れた戀人を二たび抱くやうなものだと悟つて決してそれをせずにしまつた。併しその煙を嗅ぐことは今でも好きで、少年のころパイレートの煙に係戀をおぼえたのとちつとも變りはないやうである。

嘗て巣鴨病院の患者の具合を見てゐると、紙を巻いて煙草のやうなつもりになつて喫んでゐるのもあり、煙管を持つてゐるものは、車前草などを乾してそれをつめて喫むものも居る。その態は何か哀れで爲方がなかつたものである。また徳川時代に一時禁煙令の出たことがあつた。或日商人某が柳原の通をゆくと一人の乞丐が薦の中に隱れて煙草を喫んでゐるのを瞥見して、この禁煙令はいまに破れると見越をつけて煙管を買占めたといふ實話がある。晝食のとき私はこの實例を持出して笑談まじりに呉院長を說得したことがあつた。

開業試驗が近くなると、父は氣を利かして代診や書生に業を休ませ勉强の時間を與へる。併し父のゐない時などには部屋に皆共が集つて喧囂を極めてゐる。中途からの話で前半がよく分からぬけれども何か吉原を材料にして話をしてゐる。遊女から振られた腹癒せに簞笥の中に糞を入れて來たことなどを實驗談のやうにして話してゐるが、まだ、少年の私がゐても毫も邪魔にはならぬらしい。その夜更けわたつたころ書生の二三は戸を開けて外に出て行く。併し父はさういふことを大目に見てゐた。

明治三十年ごろ中學新誌といふ雜誌が出た。これはやはり開成中學にも敎鞭をとつた天野といふ先生が編輯してゐたが、その中に、幸田露伴先生の文章が載つたことがある。數項あつたがその一つに、『鷄の若さが鬪ひては勝ち鬪ひては勝つときには、勝つといふことを知りて負くるといふことを知らざるまま、堪へがたきほどの痛きめにあひても猶よく忍びて、終に强敵にも勝つものなり。また若

きより屢々鬪ひてしばしば負けたるものは、負けぐせつきて、痛を忍び勇みをなすといふことを知らず、まことはおのが力より劣れるほどの敵にあひても勝つことを得ざるものなり。鷄にても負けぐせつきたるをば、下鳥（したどり）といひて世は甚だ疎む。人の負けぐせつきたるをば如何で愛で悦ばむ』といふのがあつて、私はこれをノオトに取つて置いたことがある。この文は普通道德家例へば益軒十訓などの文と違ひ實世間的な教訓を織りまぜたものであつて、いつしか少年の私の心に沁み込んで行つた。

　吉原遊里の話も、ピンヘッド、ゴールデンバット、パイレートの煙草の香も、負ぐせついた若鷄の話も、陸奧から出京した少年の心には同様の力を以て働きかけたものに相違ない。今はもはや追憶だから當にならぬやうで存外當つてゐる點がある。

五

私が東京に來て、連れて來た父がまだ家郷に歸らぬうちから、私は東京語の幾つかを敎はつた。醬油のことをムラサキといふ。餠のことをオカチンといふ。雪隱のことをハバカリといふ。さういふことを私は素直に受納れて今後東京辯を心掛けようと努めたのであつた。

私が開成中學校に入學して、その時の漢文は日本外史であつたから、當てられると私は苦もなく讀んで除ける。日本外史などは既に郷里で一とほり讀んで來てゐるから、ほかの生徒が難澁してゐるのを見ると寧ろをかしいくらゐであつた。然るに私が日本外史を讀むと皆で一度に笑ふ。先生は磯部武者五郎といふ先生であつたがお腹をかかへて笑ふ。私は何のために笑はれるかちつとも分からぬが、これは私の素讀は抑揚頓挫ないモノトーンなものに加ふるに餘り早過ぎて分から

ぬといふためであつた。爾來四十年いくら東京辯にならうとしても東京辯になり得ず、鼻にかかるずうずう辯で私の生は終はることになる。

私は東京に來て蕎麥の種物をはじめて食つた。ある日母は私を蕎麥屋に連れて行つて、玉子とぢといふ蕎麥を食べさせた。私は仙臺の旅舍で最中といふ菓子を食べて感動したごとく、世の中にこんな旨いものがあるだらうかと思つたが、程經て、てんぷら、おやこ、ごもく、おかめなどといふ種蕎麥のあることを知つて、誠に驚かざることを得なかつた。

それから佐竹の通りには馬肉屋が數軒あつたが、私はさういふ處に入ることを知らなかつた。ただ市村座の向側に小さい馬肉の煮込を食はせるところがあり、その煮方には一種の骨があつて餘所では味へない味を出してゐた。うちの書生の說に椿油か何かを入れるのではなからうかといふのであつたが、よくは分からない。

夜十時過ぎになると書生も代診も交つて籤を引いて當つた者が東三筋町から和泉町のその馬肉屋まで買ひに來る。今どきの少年は馬肉は輕蔑して食はぬし、ビフテキなども上等のを食ひたがるけれども、馬肉を食はぬからといつて皆賢くなるといふわけではない。また、大正十年の夏、私は信州富士見に轉地してゐたとき、あの近在に或る神社の祭禮があつて、そこでやはり馬肉の煮込を食べたことがある。その味は市村座の向側の馬肉屋の煮込そつくりであつたから、煮込む骨に共通の點があつたのかも知れない。

郷里を立つとき祖母は私に僅かばかりの小遣錢を吳れていふに、東京には燒芋といふものがある、腹が減つたらそれを食へ。そこで私は學校の歸りには、左衞門橋の袂の燒芋屋によつて五厘づつ買つた。そのころ五厘で燒芋三個吳れたものである。

母は私を可哀がつて學校から歸るとかけ蕎麥を取つてくれた。もりかけが一錢

二厘から一錢六厘になつた頃で大概三つぐらゐは食つた。

また、夜おそくなると書生と牛飯といふのを食ひに行き行きした。一碗一錢五厘ぐらゐで赤い唐辛子粉などをかけて食べさせた。今でも淺草の觀世音近くに屋臺店が幾つもあるけれども、汁が甘くて駄目になつた。その頃はあんなに甘くなかつた。

私と同樣出京して正則英語學校に通つてゐた從弟が、ある日日本橋を歩いてゐて握鮓の屋臺に入り、三つばかり食つてから、蝦蟇口に二錢しか無くて苦しんだ話をしたことがある。その話を聞いて私は一切すしといふものを食ふ氣がしなかつた。鰻丼なども上等なもてなしの一つで、半分殘すのが禮儀のやうな時代であつたところを思ふと、養殖が盛になつたために吾々は難有い世に生きてゐるわけである。

六

そのころ奠都祭といふものがあつて式場は多分日比谷だつたやうにおもふ。紅い袴を穿いた少女の一群を見て非常に美しく思つたことがある。それから間もなく女學生が紅い袴を穿き、ついで蝦茶の袴がある期間流行して、どのくらゐ青年の心を牽つけたか知れぬが、そのころは未だそれが、無かつた。

東三筋町に近い、鳥越町に渡邊省亭畫伯が住んで居られて、令孃は人力車でお茶の水の女學校に通つた。その時は髪を桃割に結つて蝦茶の袴は未だ穿いてゐなかつたから私はよくおぼえてゐる。俳人渡邊水巴氏は省亭畫伯の令息で、正月のカルタ遊びなどにはよく來られたものである。もう夢のやうな追憶であるからおぼつかない點もあるが、水巴は俳人、茂吉は歌人となつたわけである。

黑川眞賴翁も具合の惡いときには父の治療を受けた。晩年の眞賴翁はもう頭の

毛をつるつるに剃つて居られた。體が癢くて困るといはれてうちの代診の工夫で硫黄の風呂を立てたこともあり、最上高湯の湯花を用ゐたことなどもあつた。いまだ少年であつた私が縱ひ翁と直接話を交すことが出來なくとも、一代の碩學の風貌を覗き見するだけでも大きい感化であつた。そのころの開業醫と患家とのあひだには、そのやうな親しみもあり德分もあつたものである。併し父も精神科專門になつてからはさういふ患家との親しみは失せた。このことは實に微妙なる關係があつて、父は、『感謝せらるる醫者』から『感謝せられざる醫者』に轉じたわけである。精神病醫者といふものは、患者は無論患者の家族からも感謝せられざる醫者である。

私は東京に來て、淺草三筋町に於て春機發動期に入つた。當時は映畫などは無論なく、寄席にも芝居にも行かず、勸學の文にある、『書中女あり顏玉のごとし』などといふことが沁み込んでゐるのだから、今どきの少年の心理などよりはまだ

まだ刺戟も少く萬事が單純素朴であつたのである。それでも目ざめかかつたリビドウのゆらぎは生涯ついて廻るものと見えて、老境に入つた今でも引きつけられる對象としての異性はそのころのリビドウの連鎖のやうな氣がしてならないのである。そのころ新堀を隔てた榮久町の小學校に通ふ一人の少女があつた。間もなく卒業したと見えて姿を見せなくなつたが、私は後年年不惑を過ぎミュンヘンの客舍でふとその少女の面影を偲んだことがある。或は目前に私に對してゐる少女にその再來なるものがゐるかも知れない。

新堀といへば、新堀にはそのころ舟が幾艘も來て舫つてゐることがあつた。幸田露伴翁の「水の東京」に、『淺草文庫の舊跡の下にはまた西に入るの小渠あり、須賀町地先を經、一屈折して藏前通りを過ぎ、二岐となる。其の北に入るものは所謂、新堀にして、榮久町三筋町等に沿ひ、菊屋橋・合羽橋等の下に至る。此一條の水路は甚だ狹隘にして且つ甚だ不潔なれども、不潔物其他の運搬には重要な

る位置を占むること、其の不快を極むるところの一路なるをも忌み厭ふに暇あらずして渠身不相應なる大船の數々出入するに徵して知るべし。且つ淺草區一帶の地の卑濕にして燥き難きも、此の一水路によりて間接に乾燥せしめらるること幾許なるを知らざれば、淺草區に取りては感謝すべき水路なりといふべし』とあるところである。まだ少年の私はパイレートといふ煙草を買つて、その中の美人の繪だけをとつて中味をこの堀の水に棄てたことがあつた。新堀の名は三味線堀と共に私の記憶から逸し得ざるのも亦道理である。

七

その頃の淺草觀世音境內には、日清役平壤戰のパノラマがあつて、これは實にいいものであつた。東北の山間などにゐてはかういふものは決して見ることが出來ないと私は子供心にも沁々とおもつたものであつた。十錢の入場料といへばそ



のころ惜しいとおもはなければならぬが、パノラマの場内では望遠鏡などを貸してそれで見せたのだから如何にも念入であつた。師團司令部の將校等の立つてゐる向うの方に、火災の煙が上つて天を焦がすところで、その煙がむくむく動くやうに見えてゐたものである。

　このパノラマは上野公園には上野戰爭がかいてあつたが、此は淺草公園のものほど度々は見ずにしまつた。そのころ仲見世に勸工場があつて、ナポレオン一世、ビスマルク、ワシントン、モルトケ、ナポレオン三世といふやうな寫眞を賣つてゐた。此等の寫眞は、私が未だ郷里にゐたとき、小學校の校長が東京土産に買つて來て兒童に見せ見せしたものであるから、私は小遣錢が溜まると此處に來てその英雄の寫眞を買ひあつめた。

　さういふ英雄豪傑の寫眞に交つて、ぽん太の寫眞が三四種類あり、洗ひ髮で指を頰のところに當てたものもあれば、桃割に結つたのもあり、口紅の濃く影つて

ゐるのもあつた。私は世には實に美しい女もゐれば居るものだと思ひ、それが折にふれて意識のうへに浮きあがつて來るのであつた。ぽん太はそのころ天下の名妓として名が高く、それから鹿島屋清兵衛さんに引かれるといふことで噂に上つた頃の話である。

そのうち私は中學を卒業し、高等學校から大學に進んだころ、鹿島氏は本郷三丁目の交叉點に近く住んでゐるといふことを聞き、また寫眞屋を開業してゐて藥が爆發して火傷をしたといふやうな記事が新聞に載り、その記事のうちに從屬的に織交ぜられて初代ぽん太鹿島ゑ津子の名が見えてゐたことがあつた。また、父の經營した青山腦病院では毎月患者の慰安會といふものを催し、次ぎから次と變つた藝人が出入したが、ある時鹿島ゑ津子さんがほかの藝人のあひまに踊を舞つたことがある。父がそのとき『なるほどまだいい女だねえ』などといつて、私は父の袖を引張つたことがある。私のつもりではそんなに大きい聲を出しなさるな

といふつもりであつた。遠くで細部はよく見えなかつたが人生を閲して來た味ひが美貌のうちに沈んでしまつて實に何ともいへぬ顔のやうであつた。私が少年にして淺草で見た寫眞よりもまだまだ美しい、もつと切實な、奥ふかいものであつた。私は後にも前にもただ一度ぽん太を見たといふことになるのであるが、この注意も上京當時寫眞で見たぽん太の面影が視野の外に全くは脱逸してゐなかつたためである。私はその時のことを『かなしかる初代ぽん太も古妻(ふりづま)の舞ふ行く春のよるのともしび』といふ一首に咏んだ。私のごとき山水歌人には手馴れぬ材料であつたが、苦吟のすゑに辛うじてこの一首にしたのであつた。散文の達者ならもつと餘韻嫋々とあらはし得ると思ふが、短歌では私の力量の、せいいつぱいであつた。また或る友人は、山水歌人の私が柄にも似ずにぽん太の歌などを作つたと云つたが、作歌動機の由縁を追究して行けば、遠く明治二十九年まで溯ることが出來るのである。歌は歌集あらたまの大正三年のところに收めてある。

それからずつと歳月が經つて、私の歐羅巴から歸つて來た大正十四年になるが、火難の後の苦痛のいまだ疼づいてゐるころであつたかとおもふが、友の一人から手紙を貰つた中に、『ぽん太もたうとう亡くなりました』といふ文句があつた。そしてこの報道は恐らく新聞の報道に本づいたものであつたらうとおもふが、都下の新聞では先づ問題にするやうな問題にはしなかつたやうである。それで私も知らずに居たし、その報道の切抜なども持つてゐない。恐らく極く小さく記事が載つたのではなかつたらうか。

昭和十年になつて、ふとぽん太のことを思ひだし、それからそれと手を廻して友人の骨折によつてぽん太の墓のあるところをつきとめた。墓は現在多摩墓地にある。

昭和十一年の秋の彼岸に私は多摩墓地に行つた。雨のしきりに降る日で事務所で調べるのに手間どつたがつひにたづね當てることが出來た。墓は多摩墓地第二

區八側五〇番甲種で、墓石の裏には大正十四年八月一日二代清三郎建之と刻してある。この二代鹿島清三郎氏は目下小田原下河原四四番地に住まれてゐる筈である。此處に合葬せられてゐる佛は、鹿島清兵衛。慶應二年生。死亡大正十二年十月十日。病名慢性腸加答兒。ゑ津。明治十三年十一月二十日生。死亡大正十四年四月二十二日。病名肝臟腫瘍。大一郎。明治三十四年八月八日生。死亡大正十四年二月九日。病名慢性氣管支加答兒。靜江。明治四十年二月九日生。死亡昭和三年一月二十九日。病名腎臟炎。京子。明治四十年生。死亡大正十三年九月二十七日。病名脊髓カリエス。云々である。

鹿島ゑ津さんは卽ち初代ぽん太で、明治十三年生だから昭和十一年には五十七歲になる筈で、大正十四年四十六歲で歿したのである。ぽん太については、森鷗外の「百物語」に出てゐるが、あれはまだ二十前の初々しい時のことであつただらう。誰か小說の大家が、晩年に於けるゑ津さんの生活のデタイルスを敍寫して

くれるなら、必ず光りかがやくところのある女性になるだらうと私は今でもおもつてゐる。

八

そのころ東京には火事が屢々あつて、今のやうに蒸氣ポンプの音を聞いて火事を想像するのとは違ひ、三つ番でも鳴るときなどは、家のまへを走つてゆく群衆の數だけでもたいしたものであつた。

私は東京に來たては、毎晩のやうに屋根のうへに上つて鎮火の鐘の鳴るまで火事を見てゐたものである。寢てしまつた後でも起き起きして物干臺から瓦を傳はり其處の屋根瓦にかじりついて、冬の夜などにはぶるぶる震ひながら見てゐたものである。東京の火事は毎晩のやうに目前に異樣の世界を現出せしめて呉れるからであつた。

さういふ具合にして私は吉原の大火も、本郷の大火も見た。吉原には大きい火事が數回あつたので、その時から殆ど四十年を過ぎようとしてゐる今日でも、紅い火焰と、天を焦がして一方へ靡いて行く煙とを目前におもひ浮べることが出來る程である。時には書生や代診や女中なども交つて見てゐる。『あ、今度はあつちへ移つた』などといふと、物のくづれる時のやうな音響が傳はつてくる。同時に人の叫びごゑが何か重苦しいもののやうに聞こえてくる。そのうち火勢が段々衰へて來て、たちのぼる煙の範圍も狹くなるころ、『もうおしまひだ』などといつて書生等は屋根から降りて行つても私はしまひ迄降りずにゐたものである。かういふ光景は、私の子ども等はもう知ることが出來ない。

このごろは、ナフタリンだの何のと、種々樣々な驅蟲劑が便利に手に入ることが出來るので、蚤なども殆ど居なくなつたけれども、そのころは蚤が多くて每夜苦しめられた。そのかはり、動物學で學んだ蚤の幼蟲などは、疊の隅、絨毯の下

などには幾つも幾つもゐたものである。私はある時その幼蟲と蛹と成蟲とを丁寧に飼つて居たことがある。特に雌雄の蚤の生きてゐる有樣とか、その交尾の有樣とかいふものは普通の中等教科書には書いてないので、私は苦心して隨分長く飼つて置いたことがある。飼ふには重曹とか舍利鹽などのやうな廣口の瓶の空いたのを利用して、口は紙で蔽うてそれに針で澤山の穴をあけて置く。また時々血を吸はせるには、太股のところに瓶の口を當てて置くと蚤が來て血を吸ふ。さういふときに交尾狀態をも觀察し得るので、あの小さい雄の奴がまるで電光の如くに雌に飛びつく。もはや清潔法は完備し、驅蟲劑の普及のために蚤族も追々減少して見れば、さういふ實驗をしようとしても今は困難であるから、私の子どもなどはもうかういふことは知らないでゐる。

さうだ、火事のところで云ひ忘れたが、火事が近くて火の粉の降りかかつて來たのが鳥越(とりごえ)町に一つあつた。また凄かつたのは神田和泉町の第二醫院の火事で、

あまりの驚愕に看護婦に氣のふれたのがあつて、げらげら笑ふのを朋輩が三四人して連れて來るのを見たことがある。私がそんなに近く見たのはこの一例だけだけれども、そのころの東京の火事にはそんな例がざらにあつたものとおもふ。

東京は大震災であのやうな試煉を經たが、私も後年に火難の試煉を經た。少年のとき屋根瓦にかじりついて、紅く燃えあがる吉原の火事を傍看したのとは違つて、これはまたひどいともひどくないとも全く言語に絶した世界であつた。私は香港と上海との間の船上で私の家の全燒した電報を受取り、苦惱のうちに上海の歌會に出席して人々の樂しさうな歌を閲して批評などを加へつつ、不思議な氣持で船房に歸つたことを今おもひ出す。

九

私等が淺草を去つて神田和泉町それから青山に轉住するやうになつてから、私

は一度東三筋町の舊宅地を見に行つたことがある。その時には、門から玄關に至るまで石疊になつてゐたところに、もう一棟家が建つて糸の類を商賣にする人が住んでゐたやうであつた。併し塀に沿うて路地を入つて行くと井戸もその儘で、塀の節穴から覗けば庭も元の儘で、その隣の庭もその儘のやうで松樹などが塀の上からのぞいてゐた。その隣の庭といふのは幕府時代の某の屋敷でなかなか立派であつた。

それから、昭和元年ごろ、歲晚にも一度見て通つたことがある。その時には市區改正の最中で道路が掘りかへされ、震災後のバラック建であるし、殆ど元のおもかげが無くなつてゐた。私は泥濘の中を拾ひ歩きして辛うじて佐竹の通に出たのであつた。

それから序があつて昭和十一年の一月と十月とに其處をたづねた。藏前通を行くと、桃太郎團子はさびれて未だ殘つてゐた。そして市區がすつかり改正され

て、道路も鋪裝道になつてゐるし、一月の時には三筋町の通りで羽子などを突いてゐるのが幾組もあつた。まがり角が簡易食店で西洋料理などを食べさせるところ。その隣は茶舗、蝦蟇口製造業、ボール筥製造業といふ家並で、そのあたりが私の居た醫院のあとであつた。その隣はカバン製造業、洋品店、玩具問屋、煙草店、菓子店といふやうな順序に並んで居り、路地に入つてみると、元庭であつたところにもぎつしり家が建つて居り、そのあたりの住人も大體替つてしまつてゐた。その頃の煙草屋も藥種商も、綿屋も床屋も肉屋も炭屋も皆別な人で元のおもかげがなかつた。私の氣持からいへば先づリップ・ワン・ウィンクルといふところであつた。

一月の時には私は鳥越神社にも參拜した。神殿も寶庫も震災後新に建てられたもので、そのころ縁日のあつたあたりとは何となく様子がかはつてゐた。それから北三筋町の方へも歩いて行つて見た。今は小さい通りも多くなつて、電車通に

向いて救世軍の病院が立派に建つてゐる。新堀は見えなくなつて其上を電車の通つたのは前々からであるが、震災後街衢が段々立派になり、電車線路を隔てた榮久町の側には近代茶房ミナトなどといふ看板も見えて居るし、淨土宗淨念寺も立派に建立せられて居るし、また東京市精華尋常小學校は鐵筋宏壯な建築物として空に聳えつつあつた。嘗て少年私の眼にとまつた少女の通つてゐた學校である。

私の追憶的隨筆は、かくの如くに平凡な私事に終始してあとは何も云ふことが無い。ただ一事加へたいのは、父が此處に開業してゐる間に、診療の謝禮に賀茂眞淵書入の古今集を貰つた。多分田安家に奉つたものであつただらうとおもふが、佳品の朱で極めて丁寧に書いてあつた。出處も好し、黑川眞賴翁の鑑定を經たもので、私が作歌を學ぶやうになつて以來、私は眞淵崇拜であるところから、それを天からの授かり物のやうに大切にして長崎に行つた時にもやはり一しよに持つて步いてゐたほどであつたが、大正十三年暮の火災のとき灰燼になつてしま

つた。私の書架は貧しくて何も目ぼしいものは無く、辛うじてその眞淵書入の古今集ぐらゐが最上等のものであつたのに、それも失せた。私は東三筋町時代を回顧する毎に、この古今集のことを思出して殘念がるのであるが、何事も思ふとほりに行くものでないと今では諦めてゐる。そして古來書物などの無くなつてしまふ徑路に、かういふふとした事に本づくものがあると知つて、それで諦めてゐるやうなわけである。

まへにも一寸觸れたが、上京した時私の春機は目ざめかかつてゐて未だ目ざめてはゐなかつた。今は既に七十の齡を幾つか越したが、やをといふ女中がゐる。私の上京當時は未だ三十幾つかであつただらう。『東京ではお餅のことをオカチンといひます』と私に敎へた女中である。その女中が私を、ある夜錢湯に連れて行つた。さうすると浴場には皆女ばかりゐる。年寄りもゐるけれども、綺麗な娘が澤山にゐる。私は故知らず胸の躍るやうな氣持になつたやうにもおぼえてゐる

が、實際はまださうではなかつたかも知れない。女ばかりだとおもつたのはこれは女湯であつた。後でそのことが分かり、女中は母に叱られて私は二たび女湯に入ることが出來ずにしまつた。私はただ一度の女湯入りを追憶して愛惜したこともある。今度もこの隨筆から棄てようか棄てまいかと迷つたが、棄てるには惜しい甘味がいまだ殘つてゐる。

——文藝春秋　昭和十二年一月號——

歌壇

一

短歌は極めて短い形式のものであるから、千年も經過すれば大概同じやうな歌が重複して、新しい歌は出來なくなつてしまふだらうといふやうな危懼の念は、昔から歌人等の心裏を往來してゐたものである。萬葉集の最後の歌は、天平寶字三年正月一日に大伴家持の作つた、『あらたしき年の始の初春の今日降る雪のいやしけ吉事』といふので、この最後の歌から計算しても今年まで一千百七十八年目に當つてゐる。それゆゑ若し、萬葉集の歌が仁德天皇の御代まで溯ることとす

ると、一千六百年以上となるわけである。

さういふ長い間であるから、歌は無くなつてしまふやうな氣がしないこともないのである。もつとも數學上の計算に據ると、今まで作られた歌の數は、作り得べき歌の數に較べてまだまだ少いので、吾々の歿後幾代かまでは安心して作歌して居られることになる。併しさういふ數學上の勘定に本づかずに、もうそろそろ歌が無くなつても好ささうなものだといふやうな考へが、人々の心のうちに起つて、そこで歌の滅亡論などといふ議論も出現するのである。

ところが、事實は歌が繼ぎ繼ぎに作られて先づ當分のあひだは滅び相もない形勢を示してゐる。この歌の存在理由は、只今云つた數學上の計算の結果も無論あるけれど、自分は次の如き理由が必ずあることとおもつてゐる。

即ち、既に作られた歌は何萬か何十萬かあるが、その歌の中味を調べて見ると、存外單調なものではあるまいか。萬葉集の歌は一番複雜してゐるのであらう

が、それでもそれを幾つかの内容に分類することが出來るのではあるまいか。古今集とか新古今集とか各特色があるにしても、その内容からいへば萬葉集よりももつと簡單である。

櫻ちる木のしたかぜは寒からで**空に知られぬ雪**ぞ降りける（拾遺集）

木の葉のみ**空に知られぬ時雨**かと思へば又もふる涙かな（續古今集）

降る雪は今年も分かずひさかたの**空に知られぬ春**や來ぬらむ（續後撰集）

おもひきや**空に知られぬ雪**も猶雲のうへまで散らむものとは（玉葉集）

なにゆゑに詠むる月の曇るらむ**空に知られぬ袖のしぐれ**

を（新續古今集）

かういふ具合であるから、廿一代集などの相互關係を大體想像することが出來る。德川和歌復興時代でもこれを幾つかに分類することが出來ると思ふし、明治の新派和歌でもまたさうだらうと思ふ。

與謝野氏等の歌風は語彙の豐富な點で特色があつたが、それでも分類すればさう多様なものでなく、またその末流の模倣歌が大部分であるから、今から回顧すれば矢張り狹い範圍の活動といふことになつてしまふ。

さういふ看方を認容するなら、今までの歌といふものは、同じ事の繰返しが私等の想像するよりももつと多いのではなからうか。そして同じやうな歌の中の上等のものは顧みられるがつまらぬものは滅びることとなれば、殘るところは極めて僅のものになつてしまふのではあるまいか。今後歌を作る餘地が十分殘つてゐるのに、さういふわけ合に本づく點が必ずあるといふのが私見の一端である。

二

右に云つたことは歌の歴史を全體見渡しての說であるが、またこれを個人發生的にも觀察することが出來る。一人の歌人が生涯かかつてどんなに變化を試みるにしてもさう著るしい變化の出來るものではない。正岡子規の歌風は、短期間の著るしい變化を示した例であるが、それでも始から終まで子規風のものが取附いてゐはつてゐる。それであるから、若し數十年のあひだ、變化ばかりしてゐる歌人であつたら、それは非凡に自分といふものを持つてゐるか、或は自分といふものが全く無いものかであるに相違ない。

柿本人麿などはあれほどの大歌人でも、初期の二十代に作つたらしい歌と、晩年の四十代に作つた歌とさうたいした變化はない。一樣に人麿的な表現法を用ゐてゐる。

さうして見れば、個人發生的に看て、生涯の作歌活動は同じことを繰返してゐてもかまはぬのではなからうか、また幾らじたばたしてもさういふ具合になるのは自然の行き方なのでなからうか。如是看方もまた可能のやうに思へる。

　霜おほひの藁とりすつる芍藥(しやくやく)の芽のくれなゐに春の雨ふる

　くれなゐの二尺(にしやく)伸びたる薔薇(ばら)の芽の針やはらかに春雨のふる

　これは二つとも子規の歌で時を隔てて作つたものであるが、なかなか類似して居り、所詮は子規的傾向の歌といふことになる。そして、同じ傾向の歌のうちにも出來不出來があり、出來の惡いものは滅びるといふことになるのであらうし、または、年齡により、生活によつて同じやうな傾向の歌でも、各その趣が棄て難いといふ場合もあるのに相違ない。伊藤左千夫は、九十九里の濱を歌つてゐるが、各その特色がある。

○

九十九里の磯のたひらは天地の四方の寄合に雲たむろせり
秋立てや空の眞洞はみどり澄み沖べ原のべ雲とほく曳く
ひむがしの沖つ薄雲いり日うけ下邊の朱に海暮れかへる

○

天地の四方の寄合を垣にせる九十九里の濱に玉拾ひ居り
白波やいや遠白に天雲に末邊こもれり日もかすみつつ
高山も低山もなき地の果は見る目の前に天し垂れたり

前のは明治四十年の作、後のは明治四十二年の作であるが、各その特色があつてもやはり左千夫的なものの繰返しがあると謂つていい。さうして見れば、歌風の生涯的變化といふものもじりじりとなさるべきものであり、或は自己といふものを餘計に持つてゐるものほどその變化は少いといふこともまた可能のやうに思へる。あとはさういふ歌人の模倣者を以て充滿してゐるのが、その時その時の歌

壇全體の風景といふことになれば、その歌風內容の種類は決して多いものではないとして大きい誤はあるまい。

そこで前から云つてゐるやうに、今後も作歌活動が滅びないだらうと豫想するのは、まだまだ活動する餘地があるからで、幾ら氣の早い日本の歌人だからといつて、慌てて歌壇に見切をつける必要はあるまいと私にはおもへるのである。

三

歌の變化が周圍の狀況によつて左右せられるのは常に豫想せられることであつて、この現象は萬葉集時代から行はれて、漢詩佛典などからの影響もその後の勅撰集の歌には追々著るしくなつて來てゐる。そしてさういふ影響のあるものの方が何か新鮮な感じがしたものだつたやうに見える。

明治の新派の歌は一面は復古であるが、一面はやはり西洋文學の影響があつ

て、その影響の最も著るしかつた新詩社の歌風が一番新しいと感ぜられたのと同様である。

同じ寂しさを歌ひ、『寂しさ』を名詞に使つた歌でも、風雅集の『山松は見る見る雲に消え果てて寂しさのみの夕ぐれの雨』といふのと、若山牧水の『幾山河越えさり行かば寂しさの果てなむ國ぞけふも旅ゆく』とは何處か違ふ。これは一方は支那文學のにほひがあり、一方は西洋の詩の影響があるからである。

カール・ブッセの山越えの詩に、『ユベル・デン・ベルゲン・ソイト・ツ・ワンデルン・ザーゲン・デイ・ロイテ・ヲーント・ダス・ダリユック』といふ句のあるのを、故上田敏博士は、『山のあなたの空遠く、「幸」住むと人のいふ』と譯した。譯は巧妙で自在であるから、一讀しては西洋詩脈を感ぜない程であるが、『幸』を名詞とし何か擬人らしく取扱つてゐる微妙なところに、風雅集の『寂しさ』の取扱方との相違があるやうに思ふのである。

かういふ種類の感化影響は當時の歌壇に隨時に行はれ、相當の效果をあげて居る。スバルを中心とした歌が近代フランス象徴派の影響を受けたなどもその著るしい例の一つである。

ずつと後になつて、歌にプロレタリア・イデオロギーを盛らうとしたり、超現實主義が舶載すればそれに據らうとしたり、新即物主義、新現實主義が唱へられればそれに據らうとしたり、近來ヒユマニズムが雜誌に行はれればさういふ歌を作らうとしたりする傾向が見え、出來のいいものはこれも相當の效果をあげてゐると謂つていい。

そして、兎も角もさういふことに眼敏く注意して、從來の歌風に一轉化を來らしめようとする最初の歌人は、その努力だけでもさう僅かでは無いのであるから、注意して觀察して居れば、やはりその作物のうへに正當に酬いられてゐるところが見える。本來は西洋の眞似でも、歌といふ形式に移すまでは多くの努力を

要し、人知れず犧牲を拂ふことにもなつて獨創力はおのづと其處に籠ることとなるのかも知れない。

以上は、他から影響を受けること、受身の態度、攝取の方面について言つたのであるが、歌壇が平板一樣になり、ホモゲーンになり、陳々相寄る狀態にあるときには、被影響力、攝取力の偉大な歌人が出現するといふことも亦必要な場合がある。かういふ攝取力の偉大な歌人となれば、もはや單純な模倣者として輕蔑してしまふことが出來なくなつて來る。正岡子規が嘗て

『歌よみの如く馬鹿な、のんきなものは、またと無之候。歌よみのいふ事を聞き候へば和歌程善き者は他に無き由いつでも誇り申候へども歌よみは歌より外の者は何も知らぬ故に歌が一番善きやうに自惚候次第に有之候』

と云つたのは、甚だ奇矯の言のやうであるが、その當時の歌壇を背景としてこの言を味はふ必要があるのである。

四

現在の歌壇は、或る人々の眼からは平板一様に見えても、歌壇の中に棲息してゐる者の眼には相當に多樣のやうである。

あはれなる心のなかにうかぶとき三保の神話も墨の羽ごろも（與謝野晶子）

穗にいづる去年のふる根のすすき生にありしながらの蟋蟀の啼く（太田水穗）

閑けかるかくのごときを我が云ひて黃の橡のゆふぎりのいろ（北原白秋）

與謝野夫人も、太田氏も象徵といふことを唱へてゐるが、銘々幾らか違ふ。北原氏は幽玄といふことを唱へてゐるだけあつて、新古今流のところがある。

奥州松島瑞巖寺に來てうららなり上り框に待たされにけり（川田順）

網あげてしたたる黑き芥よりいろくづ二つ三つひろふらし（土屋文明）

日の入りし茜の空に黑く立つ富士の山影思ひ出せば見つ（尾山篤二郎）

荒澤に畑を拓きて花ともし三椏はときの過ぎにけるらし（松村英一）

此等は、前のよりも現實的に素朴に行かうといふ傾向の見えるもので、もはや相當の時日を經過し、類似の歌もなかなか多くなつて來てゐる。

はじめより憂鬱なる時代に生きたりしかば然かも感ぜずといふ人のわれよりも若き（土岐善麿）

雪のない八ヶ嶽の暗い體重が草にゐる私にのしかかつてくる（前田夕暮）

階級層の異色をながめながらあはれ宗教者よ人々の涙には鹹味があるといふではないか（石原純）

金網から吸口出して一口づつ煙草吸はせるのだそれが情だといふのだ（渡邊順三）

これらは、三十一音律に隨順せずに自由律で行つて居り、言語も自由であり、思想的、感覺的にも新しいところを行かうとしてゐるものである。從つて三十一音律の形式の約束を無視してしまつてゐる。それゆゑ嚴密にいへば寧ろ詩壇の中に入れて論ずる方が至當だといふ説もある。

以上の作例標本は歌壇の一部に過ぎぬけれども、大體歌壇のおもかげが分かる。私も歌壇の一員であつて見れば、寧ろ歌壇最屓で兄弟內に鬩げども外その侮

を防ぐの部類であるが、一方現歌壇に滿足してゐるかといふに毫も滿足してはゐない。ただ自分の力量の點を顧慮するから口幅つたい事は云へぬのである。さもなくて第三者の位置に立つならもつと手嚴しいことも云つて見たくなるのであるが今は云ひ得ない。併し、固有名詞は云はずに、これくらゐのことはいひ得るらしい。現歌壇では舊派の老人は除くとして、中ぶるのところでも何か大家然として取りすまし納まりかへつてゐるから、歌は自然うつとり趣味に墮してしまつてゐるし、さもなければ感覺もマンネリズムになつて安住してしまつてゐる。然るに歌壇の一部には既に鬱勃たる動きが見え、そこに活躍しようとするのは皆屈强の若者のやうであるから、今に何かの形であらはれて來るだらうとおもはれるが、まだ潛流の狀態で結果は何ともいふことが出來ない。

——東京朝日新聞　昭和十二年二月十七—二十日——

ショルツ博士

ショルツ博士が亞米利加から招聘されて行く途中、北平に寄り日本にも寄つた。そして六月二十二日には東大醫學部で、「神經精神病學に於ける形態學的諸問題」を講演し、二十三日には獨逸東亞細亞協會で、「身體的並に精神的缺陷の原因としての癲癇性痙攣發作」を講演した。

博士は、現在はミュンヘンの獨逸精神病學研究所（カイゼル・ウィルヘルム研究所）腦病理組織學部部長で、既に世界的の學者である。

彼は僕よりも十歳若く、本年四十六歳だといふことである。僕は西暦一九二三年即ち大正十二年に、墺太利維也納を引上げ、ミュンヘンのシュピールマイエル

教授を慕つて其處の研究所に入つた時、ショルツ博士も亦三十歳を一つ二つ出たばかりの青年で、當時テュビンゲン大學のガウプ教授のもとに腦病理學の方を受持ち、標本を持つてミュンヘンまで出掛けて來て、シュピールマイエルに見て貰つて居た。その時僕は彼を識つた。

翌年の春、僕は西部獨逸を旅し、黑林地方を行つて、テュビンゲン大學を訪ひ、ショルツの研究室で彼を寫眞に撮つたりし、ガウプの臨床講義をも聽き、性格學で日本の學界に知られてゐるクレッチメルにも逢つた。その時から算へると今年まで十三年經過して居る。

僕は大正十四年一月、火難に逢つた家に歸つて來て、全く研究室、顯微鏡から絕緣されてしまつた。歐羅巴にゐた頃は、若し歸朝したなら、一年に一つの小論文ならばどう小さく見積つても出來るつもりでゐたのも、全く果敢ない夢想になつてしまつてゐた。そこで今度ショルツの講演を聽いて居ると昔知つた女のやう

なつかしさがあつても、既に餘所餘所しいものになつて居た。その日の朝、十三年前僕の撮つた寫眞を苦心して見付け出し、彼に示さうとして持つて行つた。そして講演が終ると、しどろもどろな獨逸語で彼に挨拶すると、不思議にも彼は僕のことも寫眞のことも知つてゐた。ただ僕が餘り老いたのを驚いてゐた。

僕がテュビンゲンに行つた時、途で一人の法科の學生に逢ひ、その學生が僕をガウプの教室に案内して呉れたのであつたが、そのとき學生はガウプに二人のお孃さんのあることを話した。『二人とも別嬪ですよ』と云つたのを僕は記憶してゐる。そこで、今度も食卓でガウプのお孃さんのことを話した。ショルツいふに、もう二人とも結婚した。『けれども僕とではないよ』と云つて諧謔した。ショルツはそれほど未だ若々しい。

彼は、あの後いい研究をどしどし發表し、ライプチヒ大學の講師から、シュピールマイエルの歿後、その後繼者になつたもので、同じ學統によつて受繼がれた

ものである。本邦では內村祐之敎授が同じ學統でショルツとは兄弟弟子の關係になるわけである。三宅鑛一名譽敎授の主宰する腦硏究所にも彼は立寄り、なかなか立去らなかつたといふことである。東京驛を立つ時、一人の美しい日本婦人が送りに來てゐた。僕は某醫學博士夫人だと思つてゐると、さうでなくて有名な新橋の「英語藝者」であつた。ショルツはひどく喜んで幾度も手を握つてゐた。メンヅールの痕を左頰に持つてゐたりして、彼はまだまだ若いのである。

——讀賣新聞　昭和十二年七月十四日——

上等兵

昭和十二年五月二十三日、淡路の洲本町を、午前六時五十五分に立つバスに乘つて、一時は山地のやうなところを通つてゐたが、暫くすると海の見える處に出て、淡路の東海岸を走つた。野田あたりを過ぎた頃、向うから自轉車に乘つた在鄕軍人が七八人かたまつてやつて來て擦れ違つた。

自轉車に乘つた軍人等は、點呼で召集されたか、何處かに集會でもあつて出席するのか、皆穢れてゐない軍服を着てゐた。バスに乘つてゐた客のAは擦れ違つた彼等に一瞥を與へたが、『みんな上等兵やな』と云つた。Aは、志筑あたりから乘つた一人の客Bに後ろを向いていろいろの事を話し出した。

何も上等兵で無いからと云つて人前で恥ぢたり、引目を感じたりすることは無い。上等兵で無いからと云つて、態々軍服の上に合羽を引掛けたり、軍服を著ずに背廣を着たりなんかして、をかしなものだ。かういふことを淡路辯で云ふのだが、僕にはそれが旨く書けない。兎に角その客は氣焔をあげて居る。それから、看護兵が大概上等兵になる。『ヨウチン上等兵つてな』と、Aは云ふ。ヨウチンは沃度丁幾のことである。

云ふことが邪氣が無くてむき出しで無遠慮である。これも軍人生活をして來たものと思つて聞いてゐると、『僕などは一等兵でも威張つたものだつせ』と云つた。すると、Bは、『僕は二等兵でおしまひだつせ』と云つて、二人は意氣投合して戰爭哲學みたやうなことを話し出した。

すると向うからまた自轉車に乘つた軍人が來た。今度はただ一人でやはり軍服で合羽も何も著てゐない。その時Aは、屹度彼奴も上等兵だから見ろといふやう

なことを云つたところが、案に違つてさうでなかつた。そのときAは、『なんだ一等兵か』といふやうなことを云つたが、彼はその時何とも云へぬ表情をした。一體戰爭は士官も上等兵もゐなければならぬが、一等兵二等兵が必要で、突貫といふ奴をするのが一等兵二等兵の役目だといふことを力說してゐた。僕は大阪に著いてから友人にその話をして大阪辯に直して貰つた。『なんぼえらい人が居たかて、一等兵がなかつたらあきまへんやないか』といふのがその一つで、かうなると談話が活躍して來る。

雷談義

一

雷のことをイカヅチと云つて、古事記にも大雷（おほいかづち）、黒雷（くろいかづち）等とあるが私は嘗てイカヅチは嚴槌（いかづち）で、巨大な槌といふ語原だらうと思ひ、上代人が、彼の響きを巨大な槌を以て續けさまに物を打つと考へたその心理を想像したのであつたが、それは素人的な理窟で、實は間違つて居た。『名の意は嚴なり。豆は例の之に通ふ助辭、知は美稱なり』（古事記傳）とあるごとく、嚴之神、嚴之靈といふ意に落付く語原であつた。

もつとも、東雅引用の文を見ると、私の考へたやうに嚴槌とした素人考證家もゐたことは居た。雷のことを神鳴、鳴神といふのは、畏怖すべき神として上代人は體驗してゐた。これは恐らく支那でも同じことであらう。

雷はあゝいふ鋭い音をたてるから人は本能的に雷を恐れる。雷撃を直接受けたことが無くとも雷を畏怖するのは、恐らく古い世界からの遺傳で不意識に畏怖するのであらう。それがひどくなると、武道傳來記に出て來る乙見瀧之進のやうな、雷の畏怖から悲劇に迄發展することがあり、

『瀧之進日來雷公にこはがる事人にすぐれたれば、此ひびきに動顚して閾内まづ待つてくれよと、半分頭剃りかけしを周章て立さはぎ天井の板の厚き所はないかと逃廻り脫捨し單羽織の有程引かぶり、桑原々々と身を縮めかた隅に倒臥たるをかしさ』

には、滑稽があるけれども、西鶴ものには無限の哀韻があり、雷鳴を機緣とした

人生の悲劇を描寫してゐるのも、西鶴の地金の一面であつただらう。

けれども現代は、さういふ愚直な悲痛な跡を絶つて、ほんのりとした人情を好むやうになつてゐる。菊池寛の「新道」にも雷雨を縁として男女の交會するところを寫してゐるが、これには武道傳來記にあるやうな滑稽が無くて、從つて甘美で、悲劇に導くやうなことがない。そして當今の青年男女は、あの場面を幻影として一つのアヴァンチュールを形成することになつてゐるが、これもまた菊池氏の手腕であつた。

併し、西鶴とてもいつもあゝいふ手厳しいものをのみ取扱つてはゐない。好色一代男に、『雷の鳴る時は、近寄りて頭まで隱せしこと』云々といふところがあるから、一方當時の讀者と雖も、西鶴のこの一句から様々の冒險の心を湧かしたかも知れないのである。

この句に續いて、『今思へば獨身はと悲しく』といふ文句があるから、與之助

も、三千七百四十二人の女の一人としての經驗をばこの一句に託して、別離ののちの感慨に蜘蛛の絲のごとくに續けさせてゐるのである。

雷電の畏怖も、『近寄りて頭まで隱せしこと』の程度が好かるべく、武道傳來記の悲劇でなくて、近ごろ流行する『夫婦和合の祕訣』の一端ともなるであらう。私如き者と雖それに異存は無い。

二

雷はその響が猛烈で、直接行動に出るときには襲擊的、爆破的であるのは、たまたま山越えなどをして大樹が無殘になつて裂かれ居るのを見てもわかる。ところがその爆擊も稚兒どもの臍をねらふといふことになると、おなじく恐ろしくとも可憐な氣持が出て來て好いものである。やはり西鶴の文であつたとおもふが、『神鳴臍を心懸け』といふのがあつた。これは雷鳴があつて強く夕立する

ときの形容で、美文まがひの西鶴流ユーモアをは漂せてゐるのである。

一體この神鳴が臍を狙ふといふことは、私は目下その起原を知らぬし、又調べる便利も持たないが、柳田先生あたりの論文には既に其事に關する豐富な内容が盛られてゐるに相違ない。

正岡子規の明治三十一年の歌に『神鳴のわづかに鳴れば唐茄子の臍とられじと葉隱れて居り』といふのがあつた。頑童等の臍から聯想したものだが、これも俳諧的に可憐で恐ろしくないところがおもしろい。

たとへばワーテルローの陣に雷が落ちて將軍級のもの、ネーあたりが撃たれて死んだと云つても、雷をば角の生えた虎の皮の犢鼻褌をした生物とはいかにしても聯想が向かない。

これに反して、頑童らの臍を狙ふといふことになれば、その狙ふものに太鼓を輪貫きに光背のやうに負うてゐる生物を聯想する方が自然である。そして宗達が

風神雷神を畫いたとき、風神の體軀の色を暗綠に塗つたかとおもふと、雷神の方を白い胡粉で塗つて居る。これも先蹤があつて宗達の工夫がそんなに働いてゐないのかも知れないが、雷神の方を白くする方が、配合のいろいろな關係でやはり動かないところであらうか。そしてあれならば大名などが靜謐な部屋に置いて落著いて鑑賞することも出來るし、光琳、抱一の二家が臨模して後の世まで傳はつてゐるのもさういふわけ合で、肉體的に恐ろしくないからである。

そこで、レヴューーといふものが次から次へと變化發達して行つてゐるが、西暦一九二四年ごろの巴里の本場でも、あんな風に美女が皎い齒を見せつつ、長い脚を一齊に上げたり下げたり、米搗の杵が一齊に臼の中に落ちたり上つたりするやうな具合にまでは行つてゐなかつたやうであるが、當今ではあんな風にまで發達した。

若し長い脚の美女たちが、白い雷神の面をば丁度越後獅子のするやうに額のと

ころに冠つて、巴里のムーランルージュあたりの舞臺で一齊にレヴューをやつたら喝采を博すだらう。長い脚が一齊に動く時に、背負つてゐる小さい太鼓の列も一つの集團的な運動の役目を補助するだらう。

三

舊約詩篇に、『なんぢの雷鳴（いかづち）のこゑ』、『ヱホバは天に雷鳴（いかづち）をとどろかせたまへり』とあつたり、ファウストに、『日は合唱の音を立ててゐる。そして霹靂の歩みをして、極まつた軌道を行く處まで行く』などとあるのは、ただの天然顯象として取扱つてゐないが、宗達畫風のあゝいふ形態ではない。

雷電は夏季のものとされてゐるが、春雷冬雷の語はまた特殊の氣味を持つてゐる。昭和五年十一月であつた。滿洲里では連日細かい雪が降つたが、南下すると雪が少く四平街では雪が無かつた。

四平街に一泊し翌日鄭家屯に行つた。私を導いた八木沼氏が、鴻雁の南下する壯大な光景を私に見せようと思つたのであつた。鄭家屯は遼源ともいひ今ではその方が通りが好いが、其處の近くにオボ山といふ小山がある。

その山に登れば雁の飛ぶのを見ることが出來るだらうといふので、鄭家屯の滿鐵支社長宅に一泊し、水害で荒された道を馬車で難行して、オボ山に登り、荒涼といはうか、混沌といはうか、渺漠といはうか、一目茫々たる國土を見おろしたが、その時にも到頭雁が飛ばなかつた。

翌日、方向を間違へて四平街の方へ乘るところを通遼の方へ乘つた。停車場を三つばかり通過してからやつと氣がついて、四平街の方向に乘換へた。程經て車房の中に八木沼氏と車中の客と支那語で問答しつつ分りにくくて幾たびも繰返してゐると、其處に一人の白い手術著を着た支那人が入つて來て日本語で通辯して呉れた。

その人は、名古屋の醫科大學を出た醫學士で、そのへんにペストが流行してゐるので、車中の客の健康診斷をもしてゐるのであつた。氏はドイツ語をも解し、『只今流行してゐますのはドリュゼンペストです』などと話して呉れた。

氏は四平街まで來ずに途中で下車し、助手を一人連れてゐた。なかなか威張つてゐたので私等も肩身が廣かつた。

その醫學士とわかれて、窓外を見ると、半天に雲がひろがりつつあつた。一方の天が晴れて澄みきつて居るのに、一方には綿のやうなむくむくとした雲がひろがつて來るその動きが見える。その動きが相當の速さであることは汽車の速力と比較すれば分かる。そのうち雲のなかで雷鳴がした。

日本本土では天の範圍が狹いから那須野のやうなところにゐても、雲が天を蔽ふといふやうなことも稀でないが、滿洲の天は前後左右が唯渺漠としてゐて雷雲が天に充滿するなどといふことは、實に容易ならぬことである。

雷鳴も追々遠くなり、豪雨の降らざる冬雷として私の記憶に殘つた。またそのとき始めて雁の一群を見ることの出來たのも、私の記念として歌一首に殘つた。私は斯くのごとき渺漠とした滿洲の風光を愛して措かないが、そのうち滿洲帝國が興つたので、二たび滿洲の雷鳴を聞きたいとおもつてゐる。

——東京朝日新聞、昭和十二年八月二十五・六・七日——

自歌自釋五首

○

ひと時もためらはざらむ馬虻が疊のうへをひくく飛ぶ見ゆ
罪をもつ人も潛みて居りしとふ現身のことはなべて悲しき

この二首は、昭和六年の夏、信濃の大澤禪寺でアララギの安居會を開いた時の歌で、古い禪寺の廣間に、諸國から集つた會員が、作歌の修業をしてゐると、馬にたかる馬虻といふのが幾つも飛んで來る。その飛び方が迅猛で一刻も躊躇しない。そこで『ひと時もためらはざらむ』といふ句になつた。つまり、ただの主觀

句のやうでゐて、實際の寫生句なのである。もしかういふ種類の評釋で、自讃するのだとせば、かういふ「寫生」といふことを自讃することとなるであらうか。結句の『ひくく飛ぶ見ゆ』もまた同樣である。彼等は高く天井の邊を飛ばずに、部屋に入つて來て人の集つてゐる低いところを飛ぶ。何のためにさういふ飛び方をするかといふやうなことはいはずに『飛ぶ見ゆ』と据ゑるにとどめたのである。かういふ種類の歌は、面白いと思ふ人は面白いと思ふし、面白くないと思ふ人はてんで面白くないものである。

次の歌も同じとき大澤寺で出來たものであるが、封建時代に、ここに罪人の潛んでゐたことなどもあり、その部屋なども未だ殘つてゐた。寺では人々を精神的に濟ふのみならず、現實的に肉體的にも人々を濟ふことがある。その濟度は未來淨土にかかはるのみではない。目下の現實にかかはつてゐる。さういふことが私を動かしてこの一首を作らしめた。下の句の主觀句は、骨折れる割には、繰返さ

れることによつて早く陳腐になり勝ちである。

大澤寺の安居會は、平福百穂畫伯が未だ存命中で、私と二人で新宿から出發したところが、甲府驛で私が脫いで置いた上著の財布を盗まれたりして、思ひ出の深い會であつた。

○

しげ山のなかにこもりて黒谷のみ寺の見ゆるとはのしづかさ

あかつきの光さし來る山の上にやうやく老ゆるこころ寂けし

昭和八年八月比叡山でアララギ安居會を開いた時に作つたものである。これは法然上人のゐた黒谷が尾根の高いところから、黒い木立の中にこもるやうにして見えてゐる。この深さが、人間の心に沁みこんで何ともいへぬ靜寂な氣持にさせる。そこで『とはのしづかさ』といつた。際どい句だといへばさうもいはれる

が、一度はかういふ句を用ゐても差支へないやうに思へる。『黒谷』は無論固有名詞だが、さういふ事實の光景から來た名であらうから、かたがた象徴的な效果をも持つてゐるのである。

次の歌もさうである。私は柴生田君と曉光の未だ至らず、殘月の光がまだかがやくころに、横手の山から四明嶽の方にのぼつて行つた。そして、山上にのぼりつめたころには、近江の湖面から夜が明けわたつて來て、杜鵑が啼き、鶯が啼いて、山上にゐる現身をつくづくと意識したのであつた。昭和八年は私の五十二歳の時であるから『やうやく老ゆる』といつた。『心寂けし』の句は、作者自身だけに分かつて、ひとにはあまり通ぜぬ語かも知れない。併し、抒情詩では主觀句を除去してしまふこともまた不可能であるから、實作者にとつては試みられるだけは試みねばならない。そして試みてゐるうちに、駄目なものは滅び、駄目でないものは活きるといふ順序になるのであらう。

○

石龜の生める卵をくちなはが待ちわびながら呑むところこそ聞け

これは、近江番場蓮華寺で作つた數首の中の一つで、佐原窿應師が未だ存命中のときである。あの寺の境内で、泉の湧くところを通つて、その奥に一つの年を經た池がある。菱なども茂り、一方に太い樹立などもあつた。そこに石龜が住んでゐる。信者が持つて來て放つたのが何時のまにか住みつくやうになつたのであらう。

石龜は産卵期になると、池を出て、近くの畑の中とか、墓石のほとりの砂などをいい加減掘つて、卵を産みつけて歸つて行く。それを蛇が待ち構へてゐては呑む。さういふ實話を、和尙の門弟の若い僧が話して聞かせた。私はそれをひどく面白く思つた。老和尙は中風してすでに偏癱になつてから五六年を經過して居ら

れた。そこでかういふ話を枕頭でしても、別に感動せられるでもなかつた。私の感動はさういふところにも關はつて、一首にしようとしたのであるが『待ちわびながら』といふ句は、やや苦心したので、自分自身でも棄てがたいやうに思つてゐる。蛇は體を土の中に突入れるやうにして、相當深く埋めて行つた卵を呑むさうである。萬有界における生物界、無生物界の悲劇的な生活を、悟りくさくなく表はし得ることはなかなかむづかしい。結句の『どこそ聞け』は、古歌にもあり、梁塵祕抄あたりにも見えてゐるが、新しく生かせば生かすことが出來さうに思へる。この歌は昭和五年の作である。

――サンデー毎日　昭和十二年八月八日號――

草鞋

草鞋の需要がだんだん少くなつて、地方の店などでも殆ど賣らなくなつてしまつた。それだから或る地方に出掛けて行つたりした時に、いつでも草鞋を穿いて歩けると思ふと大きな間違ひである。私は東京の中學校を卒業したが、修學旅行には皆が草鞋を穿いたものである。また、第一高等學校では年に一回發火演習を行つたが、學生はそのころ皆草鞋を穿いた。ところが、このごろ見てゐると、中學校の演習でも、代々木原に來てゐる學生團體でも草鞋を穿いたものは一人もゐない。さういふ時勢になつた。

私はさういふ時勢になつても、身にこびり附いた習慣が拔け切れぬと見えて、

ある時には草鞋を要求することがある。西洋に留學中は、否應なしに靴を穿いたが、少し餘計に歩くと足が痛み痛みした。西洋人は朝から晩まで靴の穿き通しであるから、彼等は好く足を洗ふけれども、それでも魚目を持つことが多く、西洋の藥店には魚目を治療する藥を必ず賣つてゐるが、わが國では漸くその方の國産が出來かかつたに過ぎない。また、ドイツあたりの製品の方が國産よりも利くところを見ると、本邦人の足にはまだまだ魚目が少いといふことがわかる。

風俗には常に動とその反動とがあつて、日本風になつたり西洋風になつたり、種々樣々であるけれども、その起伏のうちに、大勢があるので、やはり男でも女でも靴穿きが多くなつて來てゐるから、足に魚目の出來る率ももつと多くなることとおもふし、魚目治療の藥なども舶來品を遙かに凌ぐやうな佳いものが出來るやうになるに相違ない。

昭和十年十一月、藤森氏と一しよに大和の萬葉地理を探つたとき、大輕、五條

野を見、それから飛鳥村の岡寺に參拜し、島庄の古墳を見、橘寺に來たころには足が熱つて來、肉刺が出はじめて苦痛で溜まらない。そしてこの先き、まだまだ見ねばならぬ處があるとおもふともはや元氣が無いが、努めて川原弘福寺に參拜し、また岡に戻つて來てうどん屋に寄つて晝食をしながら、針を借りて肉刺の液を出して見たが、靴では痛くてこの先き歩けさうも無い。其處で草鞋を賣る店をさがしたところがただ一軒あつた。そこで、下駄などを賣る家で足袋を買ひ草鞋支度になつた。草鞋支度になつて歩いて見ると、一體その時の氣持を忘れることが出來ないほど樂なものであつた。

それからと云ふものは、調査もはかどるし、細かい觀察も出來るし、飛鳥村の御座神社、八釣山、飛鳥小學校、雷、豐浦を經て、飛鳥川に沿うて下り、鴨公村の藤原宮舊趾を訪うて、小學校に吉田宇太郎氏に會ひ、八木町から奈良に行つたのであつたが、私はその時に實に久しぶりで草鞋の效力を感じ、數日經て畝傍山

に登らうとした時にも、神武御陵前で下車してそのあたりに草鞋賣る家をさがしたがなかなか見つからず、非常に難儀して辛うじて一軒見つけた。それを穿いて畝傍に登り、その夜は八木町に一泊し、翌日またその草鞋を穿いて、高殿から天の香久山、南浦、小山、木之下からまた別所に來、二たび高殿に來て、其處を委しく調べ、八木西口でその草鞋をぬぎ棄てて靴に穿き替へ、それから電車で大阪に著いた。そのやうに私は草鞋の效力を感じそれを利用したのであるが、同行の藤森氏は別にその必要も感ぜず、常に靴穿きのままであつた。藤森氏は私より餘ほど若いから、靴の時代に慣れてゐるのであらうか。

昭和十二年にも、大和のその邊を調査しようと思つたが、その前に西國を巡り、松山から道後溫泉に著いて、夕方散歩してゐると、とある店に草鞋を賣つてゐるのを見たので直ぐそれを買つた。道後で草鞋を買つてそれを大和の調査の時に役立てようとしたのであるが、道後の友人はあまり先廻りをする私を見て笑つ

た。これは笑ふのが普通で、その後淡路を通過した時にも草鞋を賣つてゐる店を一軒見つけたから、草鞋を賣る店も有ることはある。けれども急の間に合せようとしても決して間に合はない。そこで私は大和の天の香久山邊で役立てる草鞋を伊豫の道後で買つたのであつた。

道後では草鞋一足三錢であつた。三錢は奈何しても安い。草鞋は他の土地では安くて五錢は取る。ところによつては十錢取るところがある。箱根の千石原でも草鞋を賣つてゐる店があつたが一足十錢取つた。これが目下の通り相場だらうとおもふから三錢は安い。もつとも、今年飛鳥川のほとりの村で一軒草鞋を賣る店を見つけたが四錢であつた。しかしこれは幾年か前に仕入れたものらしく、煤びて黑くなつてゐる草鞋であつたが、道後の草鞋はさうでは無い。それに溫泉場でものが總てさう安い筈はないと思つたが、四國には遍路が多く、遍路の多くはもうゴム足袋を穿くけれども、草鞋を穿く者もなかなか見かけるので、道後では草

鞋を昔どほりの相場で賣るらしかつた。大體さう解釋して私は興ふかく思つた。

東北地方の農家では、冬期は外で働けないので屋內にゐて藁爲事をする。その藁爲事の中の草鞋つくりは主要部の一つを占めてゐたのであるが、今ではつくるその草鞋の數が減つたさうである。

しかし、草鞋はどう考へても便利なものであり、ほかの物で調和さへ取れば、二等汽車に乘つてゐても、そんなに體裁の惡いものではない。もはや時勢がかはつて靴で何でも通す時代だから、今どきの青年等は草鞋のことなどは忘却してしまつてゐるだらうともおもふが、日本的日本的といふ呼び聲が高いなら、デパートの運動部などでも盛んに草鞋を賣るやうになるかも知れない。そして、頭の好い人が居て何とか新工夫をすれば、足部を衞生的に保つことが出來るやうになるかも知れない。

何にしても、二等汽車に草鞋穿いて乘つても、じろじろ見たりしないやうに、

日本的に訓練することが必要で輕井澤あたりに往反する少年少女にも父母がさう教育すべきである。

——ホームライフ　昭和十二年八月號——

職業隨緣

上

腦病院の院長に私のなつたのは昭和二年だけれども、父が洋行から歸つて、靑山腦病院を創立したのは明治三十六年だから、それから算へるともう足掛三十五年になるわけである。さうして見れば既に三十五年間私は精神病者に親しんだことになる。

明治四十四年の一月に、東京府巣鴨病院に入れて貰ひ、七月から醫員になつて患者を受持つことになつて以來、今度は專門家としての修業をすることになつ

た。

　今の松澤病院の前身である巣鴨病院もその頃もなかなか廣く、廻診するにも時間がかかつた。今年になつて歿した自稱將軍蘆原金次郎などもまだ元氣な頃で、夜間廻診の時に、長い廊下の曲り角のところに、彼は月琴などを持つて待ち構へてゐて、赤酒の處方を書くことを要求する。要求と云はうよりも威壓を以て强要するといつた方がよい。私なども入りたてには何となく恐ろしく感ずる患者が蘆原のほかに幾人もゐたものである。併し永く勤務してゐる看護長が隨行するので、萬事呑込んでゐて旨く處理して吳れ吳れした。そのうち自然とその雰圍氣に馴れて、勤務の疲勞をも感ぜぬやうになつて行つた。

　當時の院長は亡くなられた吳秀三先生であつたが、先生は精神病者を好きに見えたほど廻診なども丁寧であつた。或る女の年寄であつたが、その患者の娘に吳先生が手を附けて、幾人も子を生ませてゐると信じてゐた。何處其處の何番地に

圍つて置くの、生ませた私生子の名が何と何と何といふ具合に、話が細かく具體的なので、大概の人なら釣られて半分とまでは行かずとも三分一ぐらゐは信ぜねばならぬといふ具合であつた。患者は、吳先生が患者の娘を手なづけた時の聲色まで使つて話することなどもあつた。三宅鑛一先生が院長になられてからも、その患者は丈夫でゐた筈である。

さういふ雰圍氣の中に勤めて來、病人ばかりでなく、病人の家人との折衝にもなかなか面倒なことがあつて、段々練られて來たとも謂へるし、圖太くされたとも謂へるし、世間の都雅な人々からは變人に見えるやうになるまでになつてゐる。そんならそれで大丈夫になつたかといふに、奥には奥があつてまだまだ初年兵あつかひにされることがある。

つい昨年の暮に、朝食をすませてはばかりに入つてゐると近くの部屋から『ひと殺し！』といふ鋭いこゑが聞こえる。僕はぎくりとした。また、『ひと殺し！』

といふ。『なんでこんなにひどいことをするのよう！』といふ。そこで、僕は慌てて看護長を呼んで病人の狀態を問うた。すると看護長のいふに、看護婦が親切に申上げればあげるほどあゝいふお聲をお出しになりますといふので、よく氣をつけるやうに命じて置いて、用を濟ませてから私自身部屋に行つて見た。するとなるほど若い看護婦は病人から數步離れたところに寧ろおどおどしたやうな面持で坐つてゐる。病人は部屋の隅で聲をしぼつて、

ヒトゴロシ！　畜生！

と叫ぶ。いぢめもしなければ手荒なこともしない。そこで私は安堵して其處を去つた。大體このヒトゴロシ！といふ語調が私には感心出來ない。幾ら三十五年間馴れて、神經が鈍くなつたと云つても、ヒトゴロシ！といふ日本語が氣に喰はない。氣に喰はぬといふよりも恐ろしい感じである。かういふ日本語が一體何時ごろから發達してどういふ機會に樂々と人の口から出るやうになつたのであら

うか。或時、一人の醉客が小さい妓に接吻しようとしたところが、その少女の妓は突如として、

あら、いけないわ、ヒトゴロシ！

と云つた。けれども醉客は毫も驚かなかつたのみでなく、居合せたほかの客達もあへてこの言葉に驚かなかつた。また却つて淫欲をそそられるやうな一種の快感をさへ獲てゐるのであつた。さうして見れば、この、實に容易ならぬ意味を有つてゐながら、比較的樂々と發音せられるこの言葉は、男女戲技のうちに發達して來たのかも知れない。舞臺でも俠客ものなどを演ずる時にも、この言葉を發表せられて觀客は寧ろ樂しんでゐるらしいところがあつた。

下

私は和歌が好きで罷められないでゐるうちに、歌の選者にもなるやうになつ

た。先師伊藤左千夫先生の在世中、明治四十二三年ごろ始めて歌の選者になつたことがあつたが、それは選歌の稽古のやうなものに過ぎなかつた。先師歿後は雜誌アララギの經營をしたので、否でも應でも選歌をせねばならぬことになつて、自然その方の修練を積み、選をすることも速くなつて來た。外國に行つてゐる時には中絶したが、歸朝後また歌の選に携はり、一時は新聞や普通雜誌の選歌をも受持つたことがある。多忙な時には隨分手速くやつて除けて後で不安を感じたこともあるが、或時、こんなに手速くやつていい歌を見のがしはしないだらうかとおもつて再檢したことがあるが、やはり大體を見のがしてはゐなかつた。これが一つの自信を私に得しめたので、この自信を得て以來、汽車に乘つて居てでも選歌が出來るやうになつた。却つて三等汽車の車房にゐる方が心が集注して能率のあがるやうな場合もあるやうになつた。

私は毎月アララギの選歌をして居るが、忙しい時などには、つくづくいやにな

るやうなこともある。併しこれも先師に對する報恩の行爲だとおもふと氣を立直すことが出來て、兎に角選歌をつづけてゐるが、それがやがて强ひられたる勉强で、選歌の力量を自然的に蓄積してゐたことになる。

故内藤鳴雪翁は、隨分澤山俳句の選をしてをられたので、寸陰を惜んで選句に從はれたらしかつた。もうだいぶ前になるが、平福百穗畫伯に連れられて、ホトトギス發行所の子規句集輪講の會に行つたことがある。その時鳴雪翁が一山ほどの應募句を風呂敷に持つて來て輪講をしながら選をしてゐる。それから晩餐になつたが、膳の側に應募句を置いて選をしてゐる。翁は酒を飮むし、時に大きな聲で諧謔をさへいふ人であつたが、やはりさういふことをしながら選をつづけて居た。私はそのころはまだ若かつたし、幾ら鳴雪は選句の名人でもあんなことをしてゐて選句の出來る筈はあるまいなどと思つたのであつたが、翁のやうに澤山選句を受持つて居れば、あゝでもしなければ選句の出來ないことが、後になつてわ

かつた。そして選句は大體あれで間違のないものだといふことも後になつて分かつた。

今度、改造社で企てた新萬葉集の選者になつたのなども、大體前に云つた選歌に對する自信とか自惚とかいふやうなものが働掛けたためで、さもなければ第一引受けられるものではない。

さて引受けて改造社から廻つて來るタイプライターで打つた歌稿に對つて、選に當つて見ると想像したよりもむづかしい。心も責任感のために緊張するし、從つて疲勞することも大きい。それに第一歌の數が多い。

これが夏の中に私に出來るだらうか否かといふ一種不安の念に襲はれたこともあつてぐづぐづしてゐるが、このタイプライターに打つて歌稿を廻すまでの改造社員の手數がまたたいしたもので、タイピストも既に二十五名臨時に雇入れて居るといふことを聞いた。ある日私は自分に元氣をつけるつもりで改造社に出

掛けて行つて見た。第一和文タイプライターに打つことが歐文に比較して非常に面倒である。それから歌は古典的なものだから打つ活字が不足してゐたりして其等のことを顧慮するのでさへ一通りでない。また歌の訓といふものがいろいろで、傍訓を必要とする文字が幾つもある。其等は別に受持が居て專門的に書込まねばならない。それが同じもの十一通は必要なので並大抵でない。

若いタイピスト等は一齊に働いてゐた。中には子供子供した少女さへゐる。社長いふに、明日から六名增員するから差向三十一名になる云々。かういふ光景を見て私も少しく努力せねばならぬと思つて其處を辭したのであつたが、かういふ爲事は、私の生涯に二度とあるまいし、また引受けようともしまいが、今回だけはやつて出來ないこともないやうな氣がしてゐる。

この和文タイプライターを打つところを見てゐて、ぽつりぽつりと思ひ出したやうに打つのと、歐文タイピストがまるで出鱈目に手指を動かしてゐるやうに見

えるのと比較するなら、大概の人はローマ字論者になつてしまふだらうと思はれるやうな差別がある。併し、それがまた實際の一面だけで、和文で二度手指を動かして濟むところを歐文なら十度手指を動かさねばならぬといふやうな點もあつて一概にはいへないところもある。

さういふ態度で、社側でも選者側でも努力するのであるが、應募者の方でも今度は息込んだことはその歌の數で證明することが出來る。かうなれば選歌も私の業餘の手爲事でなくもはや職業になつた感じである。

――サンデー毎日　昭和十二年九月五日號――

伊藤左千夫の歌

伊藤左千夫は正岡子規の門人で大正二年に五十歳で歿した。左千夫のものを見るに便利な書物は、岩波文庫左千夫歌集、岩波文庫左千夫歌論抄、第一書房短歌文學全集伊藤左千夫篇、改造社現代短歌全集第六卷伊藤左千夫岡麓篇等ある。

今日は、左千夫の作つた、「鎌倉懷古」五首について少しく解釋を加へることとする。この「鎌倉懷古」は、明治三十三年五月、根岸の子規庵で十二人の出詠者が互に寄つて選をしたものだが、そのうち左千夫の蒙古襲來の歌が三つ選ばれてゐる。併し今日は家集に據つて、五首を解釋するのである。明治三十三年一月に左千夫は始めて子規庵を訪うたのだから、ほんの初學のやうにおもふが、實際

はさうでなく、左千夫は子規庵を訪ふ以前に既に一かどの作歌稽古が濟んでゐたものである。

○

あたつ國蒙古の使時もおかずはや打ち斬れとたけびけむかも

アタは淸んで訓み、アダと區別すべく、敵といふことだから、アタックニは敵國といふ意味である。『時もおかず』は、時間を立たせずに、猶豫せず、直ちにといふ意。タケブは猛く叫ぶ意である。神代紀に『稜威之雄誥』萬葉卷十一に、『丈夫のおもひたけびて』等の用例がある。

これも、次の四首も連作體の歌だが、建治元年に蒙古の使者、杜世忠等五人を鎌倉龍口で斬つてしまつた時のことを念中に持つて作つてゐる。タケビケムカモは、北條時宗が雄叫んだ趣で、時宗は未だ十八歳であつたから、この斷行は北條

政村の精神的助力があつたと說く人もあるが、時宗は若い青年であつたからこの決斷が出來たとも云へるので、若し時宗が其時老翁であつたならこの決斷が出來なかつたのかも知れない。この歌の調べは强く、花鳥風月式に柔弱でない。この會のとき、子規は、『面白けれど次にしるせる歌にしかざるやうに覺えて取らざりき』と評してゐる。

○

元の使者すでに斬られて鎌倉の山のくさ木も鳴りふるひけむ

これは、杜世忠、何文著等五人の首が龍口(たつのくち)で斬りおとされた、その時の氣持で、鎌倉の山川草木も震動したであらうといふことは、やがて日本全國がとどろき鳴つたといふことになる。そして山神地祇も、朝廷も幕府も國民も一團となつて敵愾心に燃えたときの心持をこの歌はあらはしてゐる。そして、ゲンとかシシ

ヤとかいつて字音を使つてゐるのも、從來の大和言葉ばかり使ふ歌と違つて歌調を强くしてゐる。子規が評して、『吾は之を天位に置けり。悲壯の感に打たれたるなり。「旣に」の語に就きて諸氏の說あり』と云つてゐる如く、當時にあつては誠に强くきびしい歌の第一に位してゐるものであつた。後年、明治四十一二年ごろ談偶この歌に及んだとき作者は『今作ればもつとゆらぎを以て重厚に作れるかも知れん』と云はれた。なほ左千夫は日露開戰のとき、『燒太刀の銳刃の明けき名に負へる日の本つ國民こぞり立つ』、『國こぞり心ひとつとふるひ立つ軍の前に火も水もなし』といふ如き歌を作つてゐる。

○

ほととぎす鳴くや五月の鎌倉に蒙古の使者を斬りし時はも

元の使者を斬つたのは丁度建治元年五月であつた。彼等は二月に出發して四月

に長門の室津浦に著き、五月に鎌倉で首をおとされたのである。『ほととぎす鳴くや五月の』は、季節の實際を云つてゐるのだが、この句は古今集戀歌一の『ほととぎす鳴くや五月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな』に基づいてゐる。結句の『時はも』は懷舊的な感慨をあらはすときによくこの『はも』といふ助詞を用ゐる。古事記にある弟橘比賣命の御歌『さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちてとひし君はも』の結句が同樣の追懷の御氣持である。

○

鎌倉に蒙古の使者を斬り居り東猛夫如何にきほひけむ

『東猛夫』は關東の丈夫、關東の猛夫即ち北條時宗の事をいふのであるが、猛夫を複數にして、時宗を中心とした關東武士等としてもかまはない。キホフは競ふことであるが、すべて、さかんに勇む心持に使つてゐる。處斷してしまつて、ど

んなに勇猛に心が動いて居つただらうかといふので、この、『如何にきほひけむ』の句は輕々に看過してならぬ句である。『けむ』は推量であるから、ややともすれば空虛な感慨になつてしまひがちであるのに、この結句は不思議にも實質的である。それを吾々は輕々に看過してはならぬといふのである。

○

たぐひなきいさを立ててし時宗の奥津城(おくつき)どころ知る人もなし

無類の勳功を立てたあの時宗の墓處を、鎌倉に來て見ても人が知らずにゐるといふ感慨の歌である。この歌は五首の終りにあるから、幾らか締括りのやうな意圖が働いてゐたかも知れない。萬葉卷十二に、『淡海の海邊(へた)は人知る沖つ浪君をおきては知る人も無し』があり、子規の初期の歌に『よき人を埋めし跡の墓の石に山茶花散りて掃く人もなし』『ふたたびは出でじとぞ思ふ山の奥に狼啼きて來

る人もなし』『雲の峰殺生石の上に立ちて那須野を越ゆる旅人もなし』などといふ歌がある。歌は古典的なところがあり、形式に約束があるために、幾らかづつ古歌からの稽古が必要であつて、さうでないと短歌の形式から來る聲調の妙味があらはれぬといふことがある。子規がこの歌を評して、『善き歌なり。ここも歌の中に「時宗」の名をあらはさずあらまほし』と云つた。(昭和十二年十月十五日)

――婦人の友　昭和十二年十二號――

雪中の木

セガンチニに、一面に降つた雪の中に、冬枯れて、鋭く細い枝を露出した、木の立つてゐる繪がある。雪のむかうに直ぐアルプスが見え、向つて左手の山には未だ陽光が差さぬところで、薄藍に描いてゐる。その右手の山には既に陽光が當つてゐるところで、薄紅に描いてゐる。雪にある凹處も陰であるからやはり薄藍である。このアルプス連峰が直ぐ眼前に迫つてゐるので、低い丘か何ぞのやうに見えるけれども、そのただならぬ嚴しい風貌は、必定アルプス峻峰の頂でなければならぬのであるから、平凡に降つたやうに見える雪でもその中に立つてゐる木でも、アルプス高原のものとして鑑賞者が受納れるやうに出來てゐる。この繪は

自分の留學地維也納にあつたので、心の寂しい時には度々見に行つた。
然るに、荒涼たるこの雪中の木にセガンチニは母と子とをからませてゐる。これは松蘿などからの觀察に本づくかも知れない。乳房を吸ふ子と物惱みでもしてゐるやうな表情の母とを、木の枝と合體した如くに象徴的に描いてゐる。そして『惡しき母』と題してあるので、よく畫面を凝視すれば、左手の山嶽に近い木の處にも幾組かさういふ母子を描いてゐる。セガンチニは、かかる深祕的夢幻的象徴的な内心の要求によつて、斯く描かねばならなかつたものと見える。
併し自分は、さういふ母子などが全く無いことにしてこの繪を鑑賞することを好んだ。この氣持は今でも大方變らないやうである。

——「三十日」昭和十三年二月號——

赤いトマト

赤トマト

私が七八歳の頃ですから、今から五十年程以前になりませう。山形縣の私の家で遙々東京からトマトの種を取寄せ、それを蒔いて育てました。その頃トマトの事を西洋赤茄子などと稱へてゐました。トマトが成育して赤い大きな實が幾つも生りました。さて美麗なトマトを食べようとしますと變な味でちつともおいしくありません。また料理の方法も分かりませんので、これは見掛け倒しといふものだ、紅毛人のものは口に合はんなどと云つて、折角のトマトを皆棄ててしまひま

した。

然るに只今では田舎の兒童等は柹か林檎かのやうにしてトマトを食べながら遊んで居ります。只今のトマトはやはり五十年前のトマトとは味が違ふので、日本人の口に合ふやうに品種を次第に改良して行つたものと見えます。

ウインの女學校

世界大戰が濟んで數年經つたころ、私は墺太利今は獨逸と合併しました——のウインに留學してゐました。その時東京の府立第五中學校長伊藤長七さんが視察に來られたので、私は公使館の紹介狀を持つてウインで一番都雅でハイカラな女學校に案内しました。伊藤さんは日本女學生の書いた短文だの繪だのを澤山持つて行かれ、一通り參觀が濟んだ後、お孃さんがたにそれをさし上げると云ひました。するとお孃さんがたは吾も吾もと、丁度鯉が麩にでも飛びつくやうに伊藤さ

んに飛びつくのです。それがいかにも無遠慮で明朗で無邪氣なのです。伊藤さんはたいへん喜ばれて『今日は爲めになつた、爲めになつた』と云はれました。さて二人はその女學校を辭して街頭を歩いて居りますと、もう女學校の引け時と見え、お嬢さん方がぞろぞろ歩いてまゐります。中には先程伊藤さんに飛びついたお嬢さんも幾人かゐます。伊藤さんは喜ばれてそのお嬢さんに御挨拶をされました。するとお嬢さんは一寸伊藤さんに會釋されただけでにこりともしません。そして正面を向いて濟まして歩いて行くのです。先程伊藤さんに飛びついた時とは打つて變つた態度なのです。伊藤さんは當が外れたやうな面持をして居られましたが、『ははあ、あゝいふ教育をして居るのぢやな、成程いろんな場合を見んけりやならんな』と云はれました。伊藤さんは極めて明朗な先生で、アメリカを通過して歐羅巴に來られたのでしたが、アメリカでは斯ういふ場面には遭遇せられなかつたと見えます。

豪傑の臆病

佐藤繼信は義經四天王の一人で壇浦の合戰で、戰死した豪傑でありますが、鼬を非常に恐がりました。また佐賀和田喜六といふ文武兩道に秀でた豪傑がゐましたが、この人は蟇を見ると恐ろしくて體がぶるぶる震へたさうです。また越前忠直といふ大將は、これも亂暴過ぎる程の豪傑でありましたが雷が恐くて、雷が鳴りはじめると、家來共を多勢自分のゐるところの屋根の上に登せてゐたさうでありました。只今でも隨分偉い人でゐて、毛蟲を見ると身震などをする人がありますす。これは一體なぜでせう。

餅

ヨハネ傳第六章に、『我は生命のパンなり』とあるのが、古い聖書には、『われ

いのちのもちなり』とある。パンの事を餅といふのはどういふわけかといふに、此は漢譯聖書に據つたもので、漢譯には『我卽生之餅』、或は、『我乃生命之餅』とある。一體我々は餅といへば糯米を蒸して搗いたものとばかり思ひ込んでゐるが、餅といふ語の本來の意味は、小麥粉卽ち麪を以て作つたものだからパン（麪包）に相當するのである。貝原益軒の大和本草に餅をコムギモチと訓じ『以レ麪作るもちなり、國俗、古來餅を誤つてもちと訓ず』と云つて居るのを見ても分かる。併し我々は現在もパンとモチとを別なものと考へてゐるから、その混同を避けるために、古い聖書のモチをパンと改譯したものである。

女宛の手紙

昔の人も女に手紙を書く場合には用意周到であつた例がある。そのころの手紙は皆候文であるが、男の書く手紙の文句の中に、『御うれしく』とか、『そもじ殿』

とか書かぬ方が好いと警めてゐるし、頓首とか、敬具とか書くべきところに、『候かしく』等と書くのは惡いと云つてゐる。またその要心の極端な例は星野角左衛門といふ老人の武士が居つたが、女の許に手紙書く場合にはなるべく漢字のむつかしいのを使つて女一人では讀めないぐらゐが、好いなどと云つてゐる。これなどは少しく變則だがなかなかおもしろい。かういふ話はお孃さんがたには差當つて必要のないことであるが、昔の武士生活の中にはいろいろと窮屈で面倒な形式があつて、武士階級の人々はそれを守らなければならない點もあつた。さういふ時代を背景としてかういふ話を讀むとおもしろい點がある。

物の名

草でも木でも鳥でも獸でも、その名に愛すべきものとさうでないものとがある。總じて古い時代に附けた名の方に愛すべきものが多いやうで、秋鳴くコホロ

ギなどは、蟲の鳴く聲がコホロコホロと聞こえるのでさういふ名を附けたのであるが、單純で厭味が無くて好い。カヘル（蛙）といふ名もその鳴聲から來て居るので、カエカエと鳴くから、それにラ又はル又はロをつけたものである。そこで古い時代にはカヘラとも云つたし、又カヘロなどともいふのである。さてそのカヘルに種類があるので、青蛙、雨蛙、金線蛙（殿樣蛙）などといふ名も出來て來たのだが、大體好い名である。ところが近頃西洋から一種の蛙が輸入され、食用に供するので、『食用蛙』として一般に通ずるやうになつた。けれどもこの『食用蛙』といふ名はどうしても感じが惡い。これは近頃日本人の附けた名であるが、あんまり實用的で雅味といふものが無い。野菜でも魚類でも食べるものが大部分であるが、『食用』などとことわつた名が殆ど無いのに、蛙にかぎつて『食用』といふ形容詞を附けたのはまことに下手である。なぜ下手かといふに、あんまり實用的功利的な氣持が露骨に出てゐるからであつて、この名などは近ごろの

人々の惡いところが自然にあらはれたものの一つであらう。もつとも、この『食用蛙』には英語の直譯に本づく、『牛蛙』といふ名もある。これはその鳴聲が牛の鳴聲に似てゐるからであるが、寧ろこの命名の方が愛すべきところがある。

柔和

T女學校の校門を入ると、もはや平和と慈愛の心が雲の棚引くといつたやうに感ぜられる。去年春の入學試驗に子どもについて行つたときに、このことが直ぐに氣づかれたが、柔和なるものは福なりといふ境界が、その儘此處に顯現せられてゐるのであつた。柔和の一事、口外することは容易であるけれども、實行しようとするとなかなか容易なわざではない。やはり長い歴史のうちに薰染せられた大きなものの一つであらうか。

昭憲皇太后の御歌に、『いたづきも忘れてここにつどふらむ大御心の杖にすがりて』といふのがあります。この御歌には、『日比谷練兵場行幸のをり癈兵を見て』といふ前書が附いて居りまして、明治十一年の御作であります。この御歌を拝誦いたしますと、中にある癈兵といふのは、明治十年の役、つまり西郷隆盛の戰爭の時に傷を負うた軍人のことだといふことが分かります。また東洋英和のお孃さんがたは、まだお生れにならない頃のことですから御存じないのですけれども、只今の日比谷公園は陸軍の練兵場でありました。そのことは昭憲皇太后樣の御歌にちやんと出てをります。それから只今の明治神宮外苑、青山三丁目の入口のところから繪畫館の方までかけて、ずうつと練兵場でありました。その日比谷でも青山でも練兵場を廢めて平和な公園にしたのでありました。そこで只今殘つ

てゐるのは代々木の練兵場だけになりました。日本が平和を目ざす國だといふことは此一事でも分かり、またそれが明治天皇の大御心でありました。

——東洋英和ニュース　昭和十三年六月號——

小文三章

嘉納先生

嘉納治五郎先生が氷川丸の上で歿せられたにつき國を擧つて先生を哀悼した。自分は柔道は出來ず、高等學校の柔道部に入つて寒稽古までしたが、頸ががくりとして、投げられるとき後頭を打つので罷めてしまつた。さういふ關係で親しく先生に相見えたことは一度も無いのであるが、一度先生の講演を聽いたことがある。寒い風が吹いてゐた頃だから、十二月ごろから二月ごろの間でもあつたか、やはり高等學校の柔道部で先生に講演してもらつたことがある。時の高等學

校の校長は狩野享吉先生で、先生は嘉納先生を案内して來られ、柔道部道場の一隅に端坐して嘉納先生の話を聽いて居られたが、窓が明放しなので寒風が間斷なく吹いてゐた。自分なども、狩野先生の頭のところの窓を締めれば好いと思つてゐても、柔道部の若者などといふものは皮膚を錬へてゐるので、寒くなんか感じないと見える、從つてそんなことには氣附くものがない。到頭講演の終るまで狩野先生はその儘端坐して居られた。その時の印象が深かつたと見えて未だに自分は忘れずにゐる。

その時の嘉納先生のお話といふのは、つまり柔道のお話で、柔道の歷史からはじまつて、講道館の本義、元は柔術とか、やはらとか云つてゐたのを『道』の文字をつけて『柔道』としたこと、元は眞劍勝負のためのやはらであつたが、文明開化の代には適しないので、講道館柔道の本義は體育にあるといふやうなお話であつた。

そのお話の中で、三四の實技をして見せたが、恐らく只今の杉村フランス大使であつたやうにおぼえてゐる。その杉村氏を床上に不動の姿勢に、兩足揃へて直立させて置いて、それを先生は指一本で押すと杉村氏の巨體が動搖する。前から押せば後ろに動搖し、後ろから押せば前に動搖する。左から押せば右に動き、右から押せば左に動く。先生云ふに、これが卽ち柔道の原理である。柔道の『手』といふものはこの原理を千變萬化して編み出したものである。かういふお話であるから、理論理論と理論に興味持つころの書生にはおもしろい。

またかういふデモンストラチオンをもされた。先生が和服で來られたのであつたが、腹を出された。そのころ先生は肥つて便々たる腹をして居られた。お若いころ、腹に力を入れて每朝手の指でその腹を突く練習をする。指で應へなくなると、木の棒で突く、しまひには金火箸のやうなもので突く、すると腹が充滿堅固になつて、太鼓の如くにばんばんとして來る。何事も練習で柔道と謂つても稽古

が大切である。わしのこの腹を見なさいといつて便々たる腹を手の掌でたたかれた。その時のことを自分もよくおぼえてゐるので此處に書いた。

自分は先生死去の報を載せた新聞を信濃で讀んだ。新聞には先生が晩年まで寒巖枯木でなかつたことを書いてゐたし、信濃の友人も先生の逸話などを二三知つてゐて自分に話してくれた。

モナ・リザ

巴里ルゥヴルにあるモナ・リザの事を小宮豐隆氏が書いてゐて面白かつたし、それについて正宗白鳥氏も書いて居られた。正宗氏の文章の中には、今のルゥヴルのモナ・リザは贋物だといふ説もあるくらゐだといふやうな個處があつた。これは一時モナ・リザが盗難に會つたから、その後ルゥヴルに戻つても、或期間そんな噂が立つてゐたものと見える。

その盜難から、二たびルゥヴルに戻るまでの經緯は、鷗外先生のスバルに載つた「椋鳥通信」と我等に載つた「水のあなたより」とに出てゐるから、左にそれを抄記して見よう。

○ Louvre の Salle Carré に懸けてあつた Lionardo da Vinci 作 Gioconda (Mona Lisa, 大さ 77×35cm) が八月二十一日午後（掃除日）から見えなくなつた。一説には二十二日午前七時二十分に小使 Poupardin と左官 Picquet とが空壁に心附いたとも云ふ。又一説には十九日から無かつたとも云ふ。二十二日午後一時に枠が場内で發見せられた。二十三日正午に Palais Royal の美術部へ屆出でられた。三時頃警視總監 Lepine が出張つて取調をした。旅行中の Dujardin-Beaumetz は同日中に歸る筈である。

De la Roche-Vernet は議會へ質問書を出す筈である。ルウヴルは差當り三日間閉鎖される。(Figaro, Presse)

○ Gioconda の賊は逃げる時、扉の内側のつまみをはづして、持つて出て、それを溝に投げたと云ふこと丈分かつた。

新聞 Illustration と Paris-Journal とは、發見者に賞金を與へることを廣告した。

○ Gioconda の賊がつかまつたらどんな罰を受けるかと云ふことを調べた人がある。一八一〇年にナポレオンの作つた Code pénal の三七九及四〇一條が盗の事を書いてゐる。さて枠から畫を盗んだのは、押込の中に入るだらうと思はれる。其刑は二年乃至二十年間の travaux forcés である。

○ Louvre が又公衆に開かれた。所謂 Vieux Louvre を鎖して、番人を集中してある。ジョコンダの跡は空壁に釘が四本突出してゐる。

○ Gioconda の發見者に與へるやうにと云つて、無名氏が二萬五千フランを政府へ獻じた。又新聞 Matin はジョコンダの賊の人相を示すことの出來た魔

眠術者に五千フランを與へると廣告した。

○ Gioconda が盗まれたので、博物館長 Homolle が待命になつて、監視長が更迭せられる。

○ロシアの Baron de S. が sadiste でジョコンダを盗んで、胸を小刀で刺したと訴へた garçon (Armand Gueneschan) がある。

尤此ガルソンは狂人だと云ふ説もある。

○ジョコンダの賊だと疑はれた Baron de Schlichting はミユンヘンからフランス政府へ電報を打つて寃を鳴らした。

○ジョコンダの外に同じミユゼエにあつた statuettes を盗んだものがあつて、その品丈は買ひ取つた人から返して來た。

その賊だと云ふ嫌疑でロシア人 Hostrowiski が捕へられた。ジョコンダ事件に關係してゐるかも知れぬと云ふことである。

○ Apollinaire の書記 Pierret は Vivien と云ふ苗字をも名告つてゐる男で、パリイの警察では此男がジョコンダの賊らしいと睨んでゐる。スタチユエツトを盜んだことをアポリネエルに對して白狀して、暇を出されたのが八月二十日で、ジョコンダの紛失したのが二十一日である。アポリネエルはピエレエにマルセイユまでの切符と百六十フランの小使とを遣つたので、警視廳はアポリネエルを疑つてゐる。併しこれは憐愍の情から出た所爲かも知れない。

○ Gioconda 紛失事件の爲めに Louvre の番人が七人法廷に呼出されて、二人有罪になつた。繪を盜まれた日に、坐睡をしてゐたとか、外出したとか云ふ科である。 此頃又 Quimper で Boucher の畫を盜まれたが、すぐ見附けられた。（十月二十二日パリイ）

○ Louvre でモンナ・リイザの懸けてあつた跡の空壁に、十二月七日から Raffaello の Balthasar Castiglione を懸けて、そのラフアエロのあつた跡へ

Lionardo の Johannes を懸けた。ラファエロの畫は髯男で、リオナルドオのは美少年（裸體）である。

○Gioconda' を盗まれて Louvre の館長を罷めた Homolle が Athen のフランス學校長として赴任する。（一九一二年三月）

○"Mona Lisa" 一九一一年八月二十二日に Louvre で亡くなつてゐた Leonardo da Vinci の Mona Lisa が一九一三年十二月十二日に Firenze で發見せられた。パリイにゐる Leonardi と云ふ男が古物商に賣らうとしたのである。古物商は名を Alfredo Geri と云ふ。Leonardi は僞名である。Dumenza (Como) 産の Vincenco Perugia と云ふペンキ職で、三十二歳になる。六年前からパリイにゐて、ルウヴルでワニス引をしてゐた。盗んだ理由はナポレオンがイタリアの藝術を掠奪した返報だと云つてゐる。ペルジアは Rue de l'hôpital de St. Louis に部屋借をしてゐた。ジエリイはペルジアが畫を持つ

て來たのを Hôtel Tripolis へ Uffizia の館長 Poggi と一しよに見に往つて、畫をウフイチアへ持つて來させた。ポッジイは電報でロオマの Corrado Ricci を呼び寄せた。そこで畫は眞蹟と鑑定せられた。ペルジアは一八八一年十月十八日に生れた。イタリアを離れたのは十年前である。パリイで二度盜をして罰せられてゐる。Louvre ではモナ・リザが亡くなつてから、Salon carré には錆びた釘が四本空壁から頭を出してゐた。それが九箇月間である。さて評議の末 San Raffaello の Balthasar Castiglione が跡へ代りに懸けられた。そこへモナ・リザが歸つて來るわけである。

○イタリア文相 Gredaro の手から、モナ・リザの圖がフランス大使 Barrère の手に渡された。外相 San Giuliano, 文部次官 Vicini, 美術長官 Ricci が立ち會つた。

○一九一三年十二月二十八日の晩に、Modigliani がモナ・リザを持つてロ

オマを立つ。二十九日には Milano で展覽する。其場所は Carabinieri 三百人で警衛する。三十日には畫がミラノを立つ。三十一日にはパリに着く。一九一四年一月一日から、美術學校で無代で見せる。四日には Louvre に懸けられる。
○モナ・リザを盜んだ同類の嫌疑で、Lancelotti 兄弟と、イタリア人數人の姿をしたことのある女が一人とパリで逮捕せられた。
○パリイ人は存外寂しかつた。Leprieux が汽車から持つて降りて、自動車に乘つた。
○一月一日（一九一四年）にはパリイで一フランづつで見せたが、千人ばかりしか來ない。二日は六フランで六十人ばかりであつた。
○モナ・リザを發見したヱネチアの Geri は、ルウヴルの懸賞を貰ひ、勳章を貰つたのに滿足せず、彼畫の見積價格の十分の一を要求する訴訟を起した。

○此畫を盜んだ首謀者だと、法廷で名告つたロシア人がある。名は Bilikow と云ふ。

以上は、モナ・リザの圖が西暦一九一一年（明治四十四年）八月二十二日にルウヴルで盜難に逢ひ、西暦一九一三年（大正二年）十二月十二日伊太利フィレンツェで發見せられ、西暦一九一四年（大正三年）一月四日ふたたびルゥヴルに戻るまでの經過で、「椋鳥通信」と、「水のあなたより」から私が拾つて手抄したものである。かういふ精細な記錄は、巴里の官憲の記錄にはあるかも知れないが、普通のモナ・リザに關する書物には無いやうであつて、少くも私の見聞した狹い範圍では見つからなかつた。然るに鷗外先生は東京に居つて、坐ながらにしてかういふ精細な記錄を作つてゐるのは實に驚くべきことである。

このモナ・リザ盜難の經緯は、「椋鳥通信」には、他の學問界・文藝界の西洋の出來事の通信のあひだに挾まつてゐるものだが、それを拾つて斯う並べて見る

と、甚だ興味ある經過になるやうに思へる。

今ルウヴルに懸つてゐるモナ・リザは贋物かどうかといふやうなことはもはや問題にはならない。これは數回彼の繪の前に佇立して見れば、その力量の點に於てもはや疑ふ餘地が無い。西洋の專門家ならば凝視數分間にしてそれが分かるのだが、そこを入念して、ウフィチア美術館長のポッジイ氏が鑑定し、なほ念のために羅馬からコッラドウ・リチを呼寄せて鑑定せしめて居る。もつとも、歐羅巴にはモナ・リザの模寫が幾つか存在してゐるから、若しかするとそれだかも知れないので入念に取扱つたのであつただらう。併しモナ・リザの模寫で出來の好いものは、その存在が大體記錄に殘つてゐるし、時にはその模寫の寫眞が書物の中に載つて居り、專門家等は飽きるほどそれを知つて居るのである。私もミュンヘン滯在中モナ・リザ模寫の寫眞を蒐め、獨逸で見られるものは足を運んで見たが、これは本物との距離が大きいので餘り有益ではなかつた。寫眞版で見ると他

の國々に殘つてゐる模寫もその程度のものらしい。さういふものなのに拘はらず、專門家の鑑定を入念にしてゐるところが面白い。

それから、モナ・リザが盜まれた時は、巴里人は實に大騷ぎをして居る。館長も監視長も罷めさせられる。議會に質問書が出る。新聞に懸賞が載る。嫌疑者が出る。ルゥヴルの番人も七人法廷に呼出されて二人有罪になる。そんな鹽梅であつた。

それが足掛三年目にフィレンツェで發見され、大使館の交渉も經て、ミラノを通過して展覽した時には三百人の警衞が居つた程である。ところがモナ・リザがいよいよ巴里入をして、一月一日巴里で入場料一フランで見せたところが一千人しか入場者が無かつた。合計入場料千フラン。二日に六フランの入場料にしたところが入場者六十人。合計入場料三百六十フランであつた。モナ・リザのやうな大物でも、確かに戻つたとなると安心でもするのか見向きもしない。この心理の

類例が現實には甚だ多いが、モナ・リザのやうな場合にもあらはれたのが面白いのである。

これは「椋鳥通信」の廣告のやうになつても惡いが、近時、明治四十一年十月十五日發行の文章世界を見る機會があつたところが、其中に青海波といふ記者が鷗外先生を陸軍省醫務局に訪問した記事が載つてゐる。その中に、

「然うです」とこれで話が切れる。其間外字新聞を拾讀して赤い線を引いて居られる。

といふところがある。これは恐らく「椋鳥通信」のやうな材料を訪問記者と應對しながら捜して居られるところであらう。それ程時間を惜しんで材料を求め原稿を作られたもののやうである。また、外國新聞も一つや二つでは無かつたやうに想像せられる。スバルに載つたのは明治四十二年三月であるが、それ以前からかういふ具合にして材料を取つて居られたのであらう。そこで私は備忘のため一言

書添へ置くのである。（昭和十三・五・十一）

御柱

諏訪神社上社の御柱神事を拜觀することが出來て爲合せであつたが、同道の岩波・矢島・藤森の三氏は諏訪が郷里であつても、七年に一度の行事であるから岩波氏は六歲ぐらゐの時一度拜觀したのみだといふことであつた。

中洲村神宮寺といふ處に、丁度御騎馬の行列があつて、數萬の群衆がその行列を取卷いて見て居り、行列の進行も旨く行かない程詰めかけて居た。また、左へ向つて行くもの右へ向つて行くもの、左へ向つて歸るもの右へ向つて歸るものといふ具合に、新聞には七萬の人出と注してあつたが、雜然としてごちやごちやに歩いてゐる群衆でもよく見ると、大體神事といふ一つ目的にむかつて行動してゐるのであつた。その群衆は皆晴著を纏つて居る。

それから御柱の里引といふ神事が行はれたが、木遣音頭の美聲に連れて大樹の御柱が引かれる有様は古へその儘の傳統で、土地の人から種々の事を聽くことが出來た。それからこの神事は勇猛强烈なもので、見てゐてもはらはらさせられる事が多い。大きなのぼりには日本第一大軍神と書いてあるだけ、戰鬪の一齣を見てゐるやうな氣持にもなるのだが、倔强な若者揃なので何も彼も當然の行爲として進行してゐるやうに見えた。それから前社で御柱建の神事を拜觀した時には日が暮かかつてゐた。上社の御柱は八ヶ嶽中腹の御小屋御料林の神樹で、山出し神事は四月四日・五日。宮川の川渡りが六日。五月四日・五日が里引神事といふことになつてゐる。下社の御柱は東俣御料林の神樹で里引は五月十日・十一日といふことになつて居る。

この行事の時には特に警官の應援があり縣からも補助金が出るといふことである。一々細かく描寫したなら好いとおもふが、それは專門文人に期待して私は一

筆、『勇猛なる行事』と云つて記して置くにとどめる。（昭和十三・五・十二）

——新日本　昭和十三年六月號——

秋草道人の歌一首

『あせたるをひとはよしとふ頻婆果のほとけのくちはもゆべきものを』といふ一首は、秋草道人の歌で、新萬葉集第四卷に載つてゐる。秋草道人は早稻田大學敎授文學博士會津八一氏のことである。

道人の歌は、萬葉調なるを以て特色とするが、ただ古調のこつこつしたもの、乾燥し果てたものとは趣を異にして、その聲調流動し、新鮮な果實の汁のごときものを感ぜしめる。

現代の歌壇に於て、甘きものは甘滑に失し、然らざるものは乾燥無味に墮し、何か一樣に固まりかけてゐる時に當つて、道人の歌の如きは、誠に珍らしいものの

と謂はねばならない。ただ道人の專業は東洋美術の研鑽にあるために、作る歌の數の極めて尠いのを憾とする。

華嚴經入法界品に、『眼目は修廣にして青蓮華の如く脣口は丹潔にして頻婆果の如し』。慧苑音義卷下に、『頻婆果は其果此方の林檎に似極めて鮮明赤也』。榮華物語玉臺に、『御脣は頻婆果の如し』。さういふ用例により、頻婆果は極めて美麗な赤色の果實だといふことが分かる。

世人は、佛は色あせて古色に沈んだのが好ましいといふが、本來佛の脣は頻婆果の如くに紅いものだといふのである。第五句、『燃ゆべきものを』と止めたのは、極めて切であつて且つ强いものである。ここに於て、佛身も空虛でなくして極めて現實的なおもかげとして現顯するに至つてゐる。そしてこの現實的な親しさの何處から來るかといふに、作者は古代美術の研究者であつて、常に佛身佛體とその『生』を共にしてゐるがためである。そして作歌方法の妙諦もおのづから

にしてここに存してゐるがためである。（昭和十三・五・四）

——日本文學 昭和十三年六月號——

最上川

最上川は私の郷里の川だから、世の人のいふ「お國自慢」の一つとして記述することが山ほどあるやうに思ふのであるが、私は少年の頃東京に來てしまつて、物おぼえのついた以後特に文筆を弄しはじめた以後の經驗が誠に尠いので、その僅の經驗を綴り合せれば、ただ懷しい川として心中に殘るのみである。

十三歲の時に上山(かみのやま)小學校の訓導が私等五人ばかりの生徒を引率して旅に出た。第一日目は上山の裏山越をして最上川畔のドメキ(百目鬼)といふところに一泊した。ここに來ると川幅はもう餘ほど廣く、こんな廣い川を見るのは生れて初てである。また向うの斷崖に沿うた僅ばかりの平地をば舟を曳いてのぼるのが見え

る。人が二、三人前こごみにのめるやうにして綱を引いてのぼつてゐる。かういふ光景もまた生れて初てである。暮方になる。川の規模の大きいのを見てゐると、今度は小さい帆を張つた舟が、反對の方に矢のやうにくだるのが見えた。これは曳舟とは違つてまた特別な印象である。その時『みんな知つてんべ、最上川は日本三急流の一だぞ』と先生がいつた。その日の夕食には鮎の焼いたのが三つもついたし、翌朝はまた鮠の焼いたのが五つもついた。何も彼も少年等にとつては珍しい。十二錢づつばかりの宿料を拂つて其處を立つた。

『鮎旨かつたなえ』『旨かつたなえ、おれ頭も皆食たくた』『おまへ腹わたも食たくたか』

『うん腹わたも食たくたす、骨も食たくた』

第二日は湯殿山の近くの志津に一泊、翌日は案内者を雇つて六十里越をして莊内に入つた。六十里峠はまだ一面の雪であつたが、山國の少年等はそんなことには毫しも屈しない。『先生は福島中佐見たいだなえ』『ほだ、先生は福島中佐だ』

こんなことを云ひ云ひ少年は峠を越えた。荘内の鶴岡に一泊し、湯濱に一泊し、はじめて海を見た。

それから最上川の支流を舟でくだつて酒田に行つた。酒田は最上川が海に入るところである。ドメキで見た威勢のよい最上川の水が、ここに來るともうのぺりとしてしまつて、それが日本海と續いてゐる具合は、漫々といはうか、縹茫といはうか、少年はそんな形容詞は知らなかつたけれども、何か正體の知れぬものを目前に見たのであつた。また、上山では太陽が山から出て山に入るのに、ここではその渺々漫々たる變な天然のうちに雲が紅く染まつてその中に太陽が入る。少年等は驚いてしまつた。

芭蕉が奥の細道で『あつき日を海に入れたり最上川』と詠んだのはこの酒田の日和山といふところであつた。少年であつた私等は無論芭蕉の句などは知らず、訓導もそのころは芭蕉の句を云々する者などはゐなかつたと同様に、かういふ句

のあることなどは知らなかつた。そしてその夜は少年を皆寝かして置いて、先生は別な部屋で女中と酒を飲んだ。女中といつても、北陸道の越後、この莊內、酒田から羽後の海岸一帶にかけて、女の顏容とその膚とが特に美しい。先生は少年を引率し、全部徒步で山の難路を越えて來たのだから、ここで祕かに酒を飲んだといふことは、まことに無量の味はひがあるが、少年にはそんなことが分から う筈がない。ただ翌朝『先生は昨夜（よんべ）は酒のんだ。けんど、日記さ付けんな』といつて甚だ上機嫌だつたのでおぼえてゐる。（昭和十三・六・二十二）

——東京日日新聞　昭和十三年六月二十八日——

蛭

櫟楢の山が一齊に芽ぶいて、萌黄立つたものが漸く靑く、併し日光が差せば、その光を透す程の全山の靑葉に圍まれて、幾段歩かの平地がある。平地には木立(こだち)は無くて野と水田とがある。野には草が秀で、白頭翁(おきなぐさ)が口紅(くちあか)く咲き、やがてそれが過ぎて白線(はくせん)の房なり、老聖人などが持つ拂子(はつす)といふやうな形となりつつある。水田(すゐでん)は田植がいまだ濟まず代(しろ)も掻かぬので、刈株(かりくひ)の殘つた儘の田に水を入れた狀態になつてゐる。水が溫(ぬる)んでから程經つたと見えて田螺(たにし)をはじめ、小さい魚類の棲んでゐるのが見える。その水田に手を浸して動かしてゐると、いつともなく扁平な體の蛭がひらめくやうにして近づいて來る。

私なども未だ幼童のころ、田螺を拾ひながらこの蛭に食はれて氣附かずに居ることがあつた。氣附くころには蛭の體は丸々と膨れて居り居りした。「蛭の口處をかきて氣味よき」といふ芭蕉の俳句はこのへんの消息を暗指するものである。またその頃祖母などの肩の處に吸ふくべといふのをつけ其處に蛭幾匹も集めて血を吸はせる、瀉血の代用をさせて肩凝りによい、中風を除けるなどと云つたものである。けれども蛭は、溫んだ水の面を泳いで來る狀態を見るのが一番柔かい感じのやうである。

山中の水田も、青葉した林に圍繞せられてゐるので氣が落著く。支那の詩にはこの感じがあるが萬葉の歌には先づ無いと云つていい。

――新風土 昭和十三年六月號――

童馬雜文

出羽ヶ嶽

出羽ヶ嶽文治郎が今場所久しぶりで相撲を取つたが、番附は幕下三段の十枚目まで下つてゐる。彼が昭和三年ごろ膝の關節といふよりも膝近くの腱の怪我をして、それから成績がおもふやうでなく、番附面も追々下落して行つたが、それでも暫くのあひだは幕内の一番しまひのところに置いてもらつてゐた。

何しろ關脇まで取つて、一場所に二人の横綱まで破つたこともある男だし、場所ではなかなかの人氣者なので、協會でも幾分の手加減をしたものと見える。そ

こで彼が相撲を取らなくとも兎に角幕内の一番しりのところに居据わつてゐた。

そのうち腰が利かない利かないと云ふから試に大學の整形外科に見てもらふと、レントゲンでは腰推骨のところに陰影のうすい部分が見えたので、種々手當をして、コルセットを嵌めたり何かしてゐたが、そのあひだ相撲が取れないし、第一歳月が無遠慮に經つた。それから番附も十兩に下り、十兩からはみ出して、幕下二段目の一番しまひのところに二場所ばかりかじりついてゐたのが、それも出來なくなつて三段目に陷落した。

そのあひだ彼は巡業にも行かず東京に居殘つてゐたが、彼自身は依然として生存してゐても、世間は依然としてはゐなかつた。第一部屋でも、毎日相撲も取らずに飯を食ひ、謂はば穀つぶしなのだから、人情も自然に運ばれないといふ點があつた。第二に嘗て彼が盛であつたころ贔屓にした好角家のあひだに、彼を引退させろといふ説が出た。何せ彼は一たびは關脇まで取つた相撲であるし、今の玉

錦關でも武藏山關でも男女川關でも、無論双葉山關でも彼から見れば後輩なのだから、縱ひ病氣のせゐにせよ、あの儘世間に晒すのは、むごい、殘酷だといふ意味であつて、これには贔屓客の言葉としては一應の理由があつた。第三には同じ部屋の相撲取からも同樣の說が出た。嘗て出羽ヶ嶽の下に若者として使はれ、風呂場で彼の背を流したり、番附くばりに步いたり、巡行先では荷をかついだりした者が、今では入幕したのみではない、三役になつたのさへゐる。さういふ次第であるから、嘗て先輩であつた出羽ヶ嶽が縱ひ陷落しても、あべこべに彼を使役するわけにも行かず、かたがた人情上具合の惡い點が多いのであつた。

さういふ狀勢だつたので、部屋からの使として、或は先輩といふ位置の年寄として、出羽ヶ嶽に引退するやうに談合してくれ、と云つて私に逼つたのは一度二度ならずあつた。私もその心持を諒とし、先代から出羽ヶ嶽を子のやうに可哀がつてくれる宮田博士の意見をも徵したのであつた。そして私も一家の中で相談の

うへ、兎も角何時引退してもよいといふ覺悟の出來るやうに、實際上の手續を取つてやつた。

亡くなつた私の父が、少年の彼を養つて、小學校から中學に入れ、その間、先代の出羽海が玩具などを買つて幾度でも自ら足を運んだことは、今の春日野取締なども好く知つてゐる。中學一年ごろの彼は、脊もずうんと伸びて、今のやうに猫背ではなかつた。それが小さい力士ばかりを相手にしてゐるうち適應と謂はうか天の配劑と謂はうか、あんな具合に猫背になつてしまつた。

去年といへば昭和十二年の秋ごろ、昭和十三年の春場所には相撲を取ると彼自身いひ出した。そんなら兎も角取つて見ろ、負けたところで番附で陷落するばかりだから何も氣にすることはない、といつて彼を勵ましてゐたが、いよいよ今年一月の春場所になると、彼は脊背の具合がまだ本當でないといつて相撲を取らない。その時も某年寄が私の處に來て引退の話を持込んだ。年寄の言分としては、

『夏場所になつても、文治はどうせ相撲は取れませんよ』といふのであつた。その言葉の背後には、『文治はもう見込がありませんよ』といふ結論が隱くされてゐることも明瞭であつた。彼等は專門家であるのだから、その鑑識に間違があるまいと考へることも出來る。併し私自身多忙なので、さういふ手續をてきぱきと遂行することが出來ず、日一日と延びてゐた。

然るに彼はこの夏場所から相撲を取りはじめた。そして兎も角勝星を殘した。彼の相撲を取るのは午前十時半からおそくも十一時頃で、水も出なければ鹽も出ない、また時間は五分間以内である。巨體で鈍重な彼は、幕內にゐた時にも立ちが穢いと云つて非難されたものだが、實際は機敏に行かず從つて時間も人一倍要求するのであつた。それでも彼はさういふ狀況の相撲を取る氣になつたのはおもしろい。

本場所が濟んで巡業に出かける、今度は滿洲まで行くかも知れない。さう云つ

て挨拶に來た。その時云ふに、今は立派な綺麗なまはしなどは土俵入をせずに濟むから不要になつた。そのかはり實際的なまはしが要る、十五圓ぐらゐなのを京都あたりで買ふつもりである、盛りなころはそんな物は部屋で幾らも手に入れることが出來たが、只今ではさうは行かない、云々。

その時またこんな話をした。この春あたりまで逢ふ年寄毎に『文治、もういい加減に相撲を罷めろよ』と云つた。それから今度相撲を取りはじめると、『文治お前の心臟が強いな』などといふ。また現在の同輩でも彼の顏をじろりと見て、『お前の心臟はトオチカ心臟か』などといふ。彼が三段目まで陷落しておめおめ相撲を取つてゐるのを冷笑するのだが、『トオチカ心臟』といふのが誠におもしろい。華奢な男女のあひだの語の交替ならもはや厭味だが、石のやうな巨體に投げかける彼等仲間の語として、いまだ特別なヒユモアが保たれてゐる。

斯くのごとくにして彼は巡業に出掛けて行つた。今の代に出羽ヶ嶽のやうな大

男の出たのは珍らしく、彼は藏王山の麓の村に生れた。ところが寛政ごろ、やはりその近くの村に大きな子どもの生れた記事が殘つて居る。それは翁草巻百六十、當時の世説の中に、『出羽國に大男生る』といふ題で次のやうに記されてゐる。『出羽國村山郡、最上成泥村、百姓文六倅文五郎と申者、天明八申二月出生す。落生常の如し。然るに日に増月に超え大に成候故、身の重目を試し見るに、七貫五百目在り。翌酉五月またまた試るに、十二貫目に成り、閏六月に掛て見れば十四貫目に及ぶ。脊長三尺六寸、手首廻り八寸二分、乳の間七寸六分、股の付根二尺一寸、肩の厚さ九寸有とかや。成人の後いか成物に成らんや、希有の事なり』といふのであるが、文五郎といふ名も出羽ヶ嶽の文治郎に似てゐて興味がある。『成泥』は、『成沢』の寫誤のやうにもおもふ。この巨童は相撲にならずにしまつたやうで、相撲の方の記錄には見當らない。

梧竹翁

今回この雑文を書かないかと薦められたのは小寺菊子夫人であるが、岩野泡鳴がまだ體にも威勢のあつたころに、毎月十日會を開いて、その會員に美しい女流を交へることを好んでゐたので、その席で小寺夫人に私も會ふことがあつた。併しこの雑文を書く聯想はそれだけの關係ではなかつた。

今は世田ヶ谷區に編入されたが、千歳烏山の、海老塚四郎兵衛的傳先生は、中林梧竹翁が八十六歳の時に書いた、「恬筆以前」の四大字一巻を藏してゐる。これは驚くべき出來映で、先づ翁一代の傑作と稱すべきものである。

翁は晩年、從來の長鋒をやめて短鋒を愛するやうになり、上海に鼠鬚筆大中小各二本宛を注文せられた。それが出來あがつて來た時に、その大筆を揮つて書いたのが「恬筆以前」である。

それからこの揮毫を願つたのが當時北海道に居られた小寺芳次郎翁で、小寺健吉畫伯の嚴君なのである。即ち梧竹翁の崇拜家であるから兼ねて大字の揮毫を依賴して置いたのが、この新筆によつて出來あがつたわけである。

この四大字に就き、當時小寺翁に送られた筆者の書牘に次の如く書いてある。

『恬筆以前と認め差上候。吳吟軒に申越し製し候筆毛、上海に無之よしに付、湖南へ申し遣し候由にて、漸く出來候筆毛、誠に無上に無之ものにて御座候。千年以上の製作を致させ候。短鋒にて大字は宜し。恬は奏人にて其の以前の製作の品の姿なり。御返事迄申上候。六月三日午前書す。紙も上海より取り寄せ候。』

『無上に無之ものにて』は、普通ならば、『無上のものにて』で足るところのやうである。また、梧竹翁は大正二年八十七歲で歿したから、八十六歲は明治四十五年（大正元年）に當る。

海老塚的傳先生は梧竹翁尊敬家としては天下第一等なので、この四大字も欲し

くて欲しくて溜まらず、遂に小寺翁に所望して文晁の繪軸と交替したといふことであつた。梧竹翁を尊敬するから自然梧竹翁のものが集まり、また丁寧に保護せられ居るから、書にとつても幸福と謂ふことになる。

的傳先生は右の如くであるが、小寺翁も今の言葉でいへば梧竹ファンの一人であり、私もまたその末座にゐる一人であつて見れば、おのづから其處に親しみもいでて來る道理である。さういふ意味で小寺夫人とも聯想のつながりがあるので、十日會のみの聯想でないと云つたのはさういふわけ合であつた。（昭和十三・六・十六）

――あらくれ　昭和十三年八月號――

小柳亭

三月十日の讀賣新聞に「歴史は惜しむ」と題して、築地活版製造所と神田小柳亭の廢業のことが報ぜられてゐた。

明治四十四年春のころであつた。自分が東京府巣鴨病院に入局してから、同僚の醫局員と共に、一週に三回程ヴントの生理的心理學の輪講を爲てゐた。午後四時までの勤務を了へ、大學教授の院長の歸つて行つたあとで、柳川鍋などを注文し、藥局から赤酒を少し貰つて食事を濟ませてから、受持の部分を飜譯しつつ讀むことになつてゐた。

その夜當番にあたつた同僚は、第三卷の「意志の概念」といふところを受持つ

てゐた。あそこには言葉の歴史的吟味などが色々論ぜられてゐて、タウトロギイといふ語が出て來る。言葉の上、用語の上でくどくど云つて見たところで、結局どうどうめぐりするといふやうな意味であつたらうか。

その時他の同僚が云つた。『少しくどいな、幾ら云つてもタウトロギイだ。どうだ今夜はタウトロギイを止めて心理の實習といふことにしては。』すると他の同僚が云つた。『それがいい。淺草にするか、それとももつと遠征するか。』前の同僚が答へた。『まだ寒いから小柳亭にしよう。』

そこで皆が巣鴨病院の前から、その頃人力車以外唯一の交通機關であつたガタ馬車といふのに乘つて、本郷三丁目から電車で須田町で降りた。今度新聞を見ると小柳亭は神田區須田町一丁目五番地にあつた。

忘れてゐたが、輪講の仲間は自分とも四人で、組織學・血清學等の方面よりも幾らか心理學的方面に傾いてゐる仲間である。そして今夜は輪講を始めてから一

時間も經たぬうちに中止して、此處の小柳亭に來たのであつた。亭內はのんびりしてゐて、面倒な獨逸語の理論などを云々するより第一氣が樂でいい。『どうも實習に限るねえ。』などと誰かが云つた。

眞打は圓喬で、多分江島屋怪談といふのであつたかあの怪談を續物として語つてゐた。花嫁が馬に乘せられて行く途中雨に逢つて、美しい衣裳が臺無しになつたところは前講で、その結末のところの大體が繰返された。

今夜は、それから時が經つて、江島屋の番頭が地方まはりをして、一夜宿つた一軒屋のくだりであつた。番頭が夜半に目を覺まして、圍爐裏ばたで一人の老媼が色の褪せた衣裳に呪のやうなことを唱へてゐるかとおもふと、懷劍で突きとほすところを見た場面であつた。圓喬の寂びた聲が一だんと低くなつて、眉間に云ふに云はれぬ皺を寄せた。

寄席がはねて四人は須田町で簡單に酒を飮んで別れた。自分はそれから電車で

青山に歸つた。電車に乘つて自分はおもつた。怪談の世界はまことに特殊なものだ、ヴントなどの冷徹な系統の世界とは似ても似つかぬものだ。然るにまたヴントに從學したクレペリーンは、怪談もののやうな精神病學に沒頭して生涯を終へんとしつつある。學問にもやはりさういふ境界があるのだ、自分がこれから入つて行く學問の境界もクレペリーンの末流であつて見れば、洵に以て妙な氣持がする。

今度の新聞に據ると、神田小柳亭は正德四年、德川五代將軍綱吉の時代に、神田小柳町角に出來た草わけの講釋場だといふことである。それが時勢のラヂオ、映畫に壓されて到頭廢業せねばならぬこととなつた。當主が『どうせ駄目なら下手な色物席などにせず講釋場として終りたいとさつぱり廢業ときめました。最後に一度客止めを見ないのが心殘りです。』と云つたさうである。圓喬もとうに亡

くなつたし、その江島屋怪談を聞いた晩から約三十年近く經つたことになる。（昭和十三年五月記）

――書物展望　昭和十三年七月號――

白梅亭

私の「小柳亭」といふ小文が雑誌書物展望に載ると間もなく、蒲田の町田義一郎氏から七月十八日附を以て左の書簡を貰つた。

前略、小生は平素新聞雑誌などに出る先生の文章を常に愛讀して居る者でありますが、今度の「小柳亭」の一文中、同亭で圓喬をお聞きになつたとありましたが、あれは何か御記憶違ひではないでせうか。あの文の終りにもあります通り、小柳は釋物に終始した席なので、講釋場へ落語家が出るといふ事は何か極々特別の場合ででもなければ、少くとも明治大正時代には殆んどなかつた事だと思つて居ります。但し色物席へは講釋師が混つて出ましたし、

又近年の淺草の金東亭あたりは色物席になつてしまひ、落語も浪花節さへもかけて居りましたが、そこで小生は普通でしたらばあの時先生が圓喬を御聞きになつたものとすれば、小柳の近所の白梅亭か立花亭ではなかつたらうかと思はれます。或は又その時の講談と後か先きかに御聞きになつた圓喬の話とを、ものが人情話なので記憶を混同されたのではなかつたらうかとも思はれますので、一寸氣付きましたままに失禮乍ら端書で申上げる次第でありま す。先づは右まで、草々。

かういふ文面であつた。私は町田氏に深く感謝し、まことにその方面に疎い私の記憶の間違に相違あるまいとおもつて、町田氏に返事を出すと共に、念のために、その圓喬の話を一しよに聞いた齋藤玉男博士に問合せて見たところが、七月二十日附で左の如き返事を貰つた。

貴簡拜誦、何分往事夢の如しですが、位置から申して白梅亭ではなかつたか

と考へます。立花亭は今でもありますが、あれは以前道西にあつたのでせう。併し御尋ねの寄席はそれより西寄だつたと思ひます。右貴答まで。

これでも分かるやうに、博士の方が私よりも記憶が確かであつた。さうしてかう二人の説が一致した以上、私等が圓喬を聞いた寄席は白梅亭で、小柳亭ではなかつたといふことが明かとなつた。そこで私は博士にむかつても深く感謝した。

私は、「萬葉秀歌」といふ小册の原稿を作るために、それから間もなく山中に出掛けて行つた。そして、あの「小柳亭」といふ文章は、誤であるから全部棄てようかと思つたけれども、折角そのつもりで書いたものであるから、誤なりにあれはあれとして置いて、この正誤を附載しようと思つたのである。

それから寒くなつたころの或日に、白梅亭をたづねた。廣瀬中佐の銅像のある場處を目當としてたづねたが見當らない。そこでいろいろ問うたところが、白梅亭は大震災後廢業して無くなつたといふことであつた。そして只今の羅紗問屋株

式會社田端商店のあるあたりが、白梅亭のあつたあたりだといふことであつた。震災後市區改正があつたからくはしいことが分からぬが大體はさうであらう。

それから立花亭は今でもあつて毎晩相當の客を吸收してゐる。昭和十五年の一月になつてから私は一夜の小閑を得て立花亭をたづねた。一番しまひを貞山の講釋物にして、あとは落語色物踊手品などで、立花演藝館などといふ看板も揭げてあつた。落語には、しん生、小さん、文樂、文治、小半治、圓藏などが出た。圓生は名は出てゐたが、圓生が亡くなつて圓藏が諧謔を交へて圓生を弔つた。三遊亭圓生は足袋やの小僧から出世した人で名人を以て擬せられてゐた。三軒長屋、文七元結、三十石などが得意で、最後に鈴本で語つたのは首提灯だつたさうである。

私等が圓喬を聽いたころは客は殆ど一ぱいであつたが、今はさうは行かぬ。白梅亭の廢めたのなどもやはり時勢の反映と看做すことが出來、こまかい味の江戸

辯の諧謔といふものも、益々洗煉せられ、專門化するに從つて、田舍出の住民の多くなる東京と必ずしも一致しないといふことになるであらう。どうもかう冬の旱魃では、風つぴきが多くて困つてしまひます。おほ方雨は朝鮮あたりまで行つちまつたでせう。朝鮮アメつて申しますからな、などといふ洒落も中學校の少年が既に興味を牽かぬやうになつてゐる。もつとも、この方面には全く素人の私が、彼此批評めいたことをいふのはをかしい事で、きまりの惡い氣持もして居る。（昭和十五年一月）

茶の左千夫先生

伊藤左千夫先生は三十歳のころ以來、伊藤並根といふ人から茶の湯と同時に和歌をも學ばれた。並根翁の短册も、たまに私なども見ることがあり、そのころの左千夫先生の短册もまた稀に見ることがある。和歌の方は、その後正岡子規の門に入つて、あのやうに獨特の境に進まれたのだが、茶の方も終生罷められなかつた。

先生は子規庵に出入するやうになつてからも、その和歌觀、藝術觀には常に茶の方のノンコ趣味、幽玄趣味がつきまとつてゐて、その方の悟入で能く議論もし意見も吐いたやうであつた。それが一面は同人をも敬服せしめたが、一面は時々

反對せられたこともある。

子規先生の墨汁一滴を見ると『左千夫來り秀眞來り麓來る。左千夫は大きなる古釜を携へ來りて茶をもてなさんといふ』とか『左千夫茶を立つ。余も菓子一つ薄茶一碗』とかいふのがその一例である。また、鳥羽僧正の繪に就いて不折・左千夫が意見を述べたとき、子規は左千夫（茅堂）の意見に反對して、『只〻其好きな茶道より得たる幽玄簡單の一趣味を標準として、寫生何かあらん、鳥羽僧正の畫毫も幽玄の處無し、餘り珍重すべきものに非ず、など容易に判斷し去りたる事ならん。茅堂若し畫の事を論ぜんとならば今少し畫の事を研究して而して後に論ぜられたき者なり。樂燒主義ノンコ趣味を以て鳥羽僧正の畫を律せんとするは瓢簞を以て鯰を押ふるの類か』（墨汁一滴）と云はれてゐる如きもその一例である。

私等が左千夫先生の無一塵庵に出入するやうになつたころは、よく茶をもてなされたが、若い連中は誰も茶の湯の樣式とか作法などといふものを辨へて居るも

のはなく、困つたものであつたが、先生はそんなことには一向おかまひなしであつた。ただ『菓子を食つてからやりたまへ』などと云つて、先づ謂はば自由律の茶の湯とでも謂つていいものであつた。今でも土屋文明君などが、『何しろ皐丸をのぞかせながら飲む茶の湯などは世の中にないでせう』などと話して笑ふのだが、先づそんな具合であつた。唯眞閣といふ小さい茶室では戀人から來た手紙を讀んで、それを無造作に破いて炭籠の中に放り込んでおくといふやうな茶の湯であつた。

さういふこだはらない茶道であつたが、この茶の道は先生五十年の實生活、生涯の藝術に纏つて、影響を與へて居る。先生の歌に高雅幽玄の味ひの滲み込んでゐるのはやはりこの茶道の趣味である。そして晩年の文中に、『精神の不安を不安ながらに一日の閑居を貪り、籠庵獨居、久振で茶に親しんだ。陶器や釜や、古畫一幅の靜けさ、釜の煮え香の燻り、茶事の面白味は益趣味の深さを覺ゆるも、

近く切實に感じた。人生是れ苦の思ひは、容易に消ゆべくもない。初冬の靜寂夜晩く、沈んだ釜の煮え音は何事かをささやく如くにも、又深く人生を悲しむ我が心に共鳴するかの様にも聞える。人生の悲しみを共に語り共に泣き得る人があつて、詩作に茶事に相慰め合ふことが出來るならばなどと、考は益我れを悲しみに誘ふのであつた。夢のやうに不思議な一夜であつた。』(唯眞鈔)とあるのを讀めば、その人生觀も藝術觀も茶道も一如に溶けこんでしまつて居ることをおもはしめる。

特に先生の晩年は年々の水害のために、牛舍が水に漬かつたり、牛が斃れたりいろいろの生活苦を嘗められたのであるが、さういふ實生活のなかに先生の茶道が溶け込んで行つてゐると解釋すべきもので、『深く人生を悲しむ我が心に共鳴するかの様にも聞える』といふのはつまりそれであつたのである。狹い四壁の茶室に釜の音を聞きながら、我々門人の眼からは下凡とも見える戀人に懸命になつ

て悲しい戀文を書いてゐた先生を顧れば、晩年の茶の湯のいかなるものであつたかが分かるのである。

　白玉のうれひをつつむ戀人がただうやうやし物も云はなく

　白玉は色は透かぬを透かずとも底にうたがひありと思へや

　玉をめで茶をめで一人冬ごもり空しきこころ二十日過ぎしも

是等の歌をよく味はふと、戀と閑雅と茶道とがどんな具合に調和してゐるかを知ることが出來るやうにおもふ。本來からいへば、官覺的な戀愛と閑寂な茶道とは別々なやうにも取れるし、寧ろ禪などの寂びを聯想するのだから、芭蕉俳諧と茶道ならば誰でも首肯し得る調和であり、また色氣の尠くなつた老翁の趣向をおもはしめるのであるが、先生のは、かくの如き甘美の境にも、亦茶の趣味を漂はしめてゐる。然かも『色は透かぬを透かずとも』いふ如き、微妙な境地は、萬葉歌人の感覺には無かつたもので、やはり茶の趣味からの悟入によつて得たものと解

釋することが出來るものである。

爐に近く梅の鉢置けば釜の煮ゆる煙がかかるその梅が枝に

これも、一讀すれば、ただ閑雅趣味のやうに見えるのだが、『煙がかかるその梅が枝に』の看方は、戀愛にかよふ抒情味の豐かな句で、いはゆる單純な茶趣味の歌ではない。然かも茶道とは離れることの出來ない關係にあることもまた明瞭である。先生の勾玉趣味もまた、元來は茶の趣味から出發してゐるのだが、枯渇してしまはずに、天平美人の肉體をおもはしめるやうなところのあるのも、やはり左千夫の本質を通過した茶道であつたからであらう。

そしてこの悟入は、實生活の到るところで反映した。先生は、茶人の著るやうなものを著て、被風といふか何といふか知らぬが、茶人がよく著てゐるあれである。それから信玄袋をさげたり、時には瓢箪なども、さげることがある。そして早足ですたすた行かれるが、直ぐ尻をはしよるといふ風であつた。淺草觀音の裏

手に何とかいふしるこ屋のあるのに連れて行かれたことがあつたが、ここのしるこは東京一だといつて、ただ一杯だけ食つて出て來た。書生の私等は少くとも三四杯は食ふところであるが、先生はさういふことはせなかつた。また先生は藝者が嫌ひで、その不自然に就いてしきりに罵倒しいしいしたものである。奴等で取柄のあるのはただ奴等の髮だけだ、髮だけは大切にするから奴等の唯一の取柄といふものだ、あとの一切は虛僞の修飾で駄目だといふ持論であつた。これなども茶の閑寂趣味と關係あり、それに、虛飾を排する茶道の簡素趣味ともおのづから相通ずるものがあつたやうである。

先生の茶もはじめからさういふ境界に至つたものではなからうが、年を經るに從つてこの妙境に至つた。そして、これには師の子規先生の、『茶の道には一定の方式あり、其方式をつくりたる精神を考ふれば皆相當の理ある事なれど只〻其方式に拘るために傳授とか許しとかいふ事迄出來て遂に茶の活趣味は人に知られ

ぬ事となりたり。茶道は成るべく自己の意匠によりて、新方式を作らざるべからず。其新方式といへども、一度用ゐれば陳腐に墮つる事あるべし』『茶の料理なども料理として非常に進歩せるものなれど、進歩の極、鰹魚節の二本と三本とによりて味噌汁の優劣を爭ふに至りては所謂半可通のひとりよがりに墮ちて餘り好ましき事にあらず』（墨汁一滴）といふやうな意見の影響もあるやうにおもへる。

左千夫先生には、あれだけの和歌の門人が居たが、茶の方の門人は一人も居なかつた。それは、若い者等は、茶の湯などは形式に墮してしまつた陳腐なこととして輕蔑して居たからで、そのころは萬事和歌の方でも新しい運動を興さうとしてゐたのだから、强ひてもさういふ方面のことをば排斥したからである。明治三十九年に書かれた、茶の湯の手帳といふ文章の最初に、『茶の湯の趣味を眞に共に樂しむべき友人が、只の一人でもよいから欲しい。繪を樂しむ人、歌を樂しむ人、俳句を樂しむ人、其他種々なことを樂しむ人、世間にいくらでもあるが、眞

に茶を樂しむ人は實に少い。繪や歌や俳句やで友を得るは何でもないが、茶の同趣味者に至つては遂に一人を得るにむつかしい。勿論世間に茶の湯の宗匠といふものはいくらもある。女子供や隱居老人などが、埒もなき手眞似をやつて居るものは、固より數限りなくある。乍併之らが到底、眞の茶趣味を談ずるに足らぬは云ふまでもない』云々と、歎聲を漏らしてゐるが、先生のやうな徹底した茶の湯の趣味でも若い者どもは輕蔑して就かうとしなかつた。そこで、先生が『只の一人でもよいから欲しい』と云はれても駄目であつた。斯くいふ私なども其の先生の茶の湯趣味、勾玉趣味を輕蔑した一人であつたが、その私も追々老に入つて閑寂の道理にもいくらか參入し得る境界に居るやうになつたころ、そろそろ先生の茶の趣味に關する文章などにも心を牽かれて居るのである。

先生が茶室の壁の趣味を愛して、四壁居道人などとも號したが、『壁に籠つた心地は一層籠居の感じを強くする許りでなく、其の籠る心地に一種云ひ難い趣味

がある。古人が洞穴に籠つて、聖書を寫したといふ詩趣も偲ばれるのである』（唯眞鈔）の一文のごときも、朝な夕なの私の心に沁みるものになつてゐる。ただ依然として茶道についてはロ出する資格なくして生を終ふる私ではあるが。（昭和十一年三月）

――茶道月報　昭和十一年六月號――

朝　影

山形縣上山町は私の生れた村から小一里南にある城下で、また古い溫泉場である。私は此處の小學校を卒業した。上山は溫泉町であるから、昔から相當に榮えたところで、出羽の最上では山形をのぞけば先づ上山といふのは相場であつた。碧梧桐も曾て俳諧行脚をしたとき『出羽で最上の上山の夜寒かな』といふ一句を殘してゐる。

上山では今ごろ朝の四時半といふとカナカナ蟬が一つの波動をなして鳴きはじめる。この聲は一種哀愁の情を誘ふもので特に生れ故鄕にあつてそれを聞くといふことは、老若によつてそんなに變りはない、沁々とした氣持になるものであ

る。つまりづうづうしく寢てなど居られぬといふ心の有樣である。
　そこで私も寢て居られずに宿を出て、溫泉街の裏手の山の方に歩いて行つた。まだ皆が眠つてゐて、たまに湯治客が共同湯に通るこゑなどがするばかりである。山の方の道になると全く人音が絶えてゐる。併し東方の藏王山を中心とした脊梁山脈の空には、もううす黃色に明るみがさしかかつてゐる。私が少年のころ、かういふ光景を『湊が白んだ』と云つて父などから教はつたものである。山國にあつて『湊が白む』もをかしい言ひまはしだが、これは恐らく仙臺あたりから輸入せられた言葉で、意味などの詮議を經ずに、そのまま代々使はれたものであつただらう。現在でも老農達はやはり『湊が白む』と云つて居る。
　私はカナカナを聞き、草の露を踏んで山の麓を歩いてゐると、曉は晚景とその趣が違つて、刻々に光明界にむかふといふやうなわけである。そのうち太陽が山の上からのぼつた。光はまだ弱くて柔い。然るにどうだ。その柔い光の中にうつ

る私の影といふものは、いかにもひよろひよろした長いもので、裾を端折つた二本の脚などは、まるで沙漠に居るジラフといふ獸の脚のやうに長い。つまり動物園にゐるあの麒麟である。或はもつと長いと謂つても決して僞ではない。これが萬葉集などに見える『朝影』といふ奴である。

萬葉集の歌人は、戀愛をして、戀のために惱んでひよろひよろになつたことを『朝影にわが身はなりぬ』と云つてゐる。これは全く寫生から來てゐるので、ただの觀念的な言ひまはしではない。これを非常におもしろくおもふのであつて、萬葉時代の誰も彼も、朝は早起で、役所に勤めるにも、野良に働きに出るのにも、一夜寢た女の處から歸るのにも、太陽の出ない時分に家を出るのだから、このひよろひよろして長い影を、天氣さへよければ毎日のやうに見てゐたものである。それを應用して『朝影にわが身はなりぬ』と使つた。このへんの關係は誠におもしろい。

私は少年のころは、曉の暗いうちに起き起きしたから、この『朝影』といふ奴を幾度見たか知らないが、そのころは萬葉の歌などは知らぬ時分だから、そのまゝに通過してしまつてゐた。然るにこの度それが極めて鮮明に且つ一種特別な色調を持つたものとして經驗することが出來たのを喜んだ。そして都會の神宮外苑あたりの影ではやはりこの言葉と調和しないところを見ると、このたびの經驗を自分で愛さなくてはならぬといふ氣持にもなつたわけである。

——讀賣新聞　昭和十一年八月十二日——

椋鳥通信

近頃ねむり藥のやうなつもりで拾讀してゐるものの中では、鷗外全集第十七卷に收められた「椋鳥通信」などはおもしろいものの隨一であつた。

このあひだ日本に來たシャリアピンのことが一九一一年三月四日發として、『ロシアの歌者シャリアピン四十回登場の報酬が五十萬ルウブルである』と出てゐるのなども興味あるし、一九〇九年三月十二日發には、『二月五日に Bruxelles で Anne Josephine Rubay といふお婆あさんが死んだ。此人は拿破崙一世が、これから Waterloo の會戰が始まるから、おかあさんと逃げろと云つて頰つぺたを叩いたといふので人に知られてゐた』といふのがあるし、同五月十五日發に、

『Detroit の病院で Sullivan といふ九十三歳の婆あさんが死んだ。これは英軍の兵卒の連れてゐた妻が Waterloo の戰場で生んだ娘である』といふやうなのもある。世界大戰前の出來事で、ワーテルローの戰爭といふのは歐羅巴人の頭にどのくらゐ染み込んでゐたかが分かるのであり、何しろ私等にもおもしろい。

一九一〇年の末から一九一一年にかけて、トルストイの晩年から死についての通信が引續き載つてゐる。トルストイがノベル賞金を辭退したこと。馬で散歩して歸つて人事不省になつたこと。毎日散歩は廢せないが肝臓部に痛みのあること。十一月十日の早朝家出をしたこと。オプチン僧院到著後の模樣。アスタポヲ驛に病臥してゐる容態。『アスタポヲ驛に病臥してゐるトルストイは體溫は降つたが、心臓が衰へた。併し新聞を讀ませて聞くので、本人の事に關する記事丈を除けて、讀んで聞かせる。譫語には妻を呼ぶことがあるが、醒めると、面會しないと云ふ。シャモルヂンスク尼院にゐた時、探偵が來たと云つて、伯は院から出

たのだが、それは伯の友人セルゲエンコの息子が廊下を往反してゐたのを見誤つたのである』『アスタポヲ驛に病臥してゐるトルストイは嗜眠、脈の結代、吃逆等の惡兆を呈して來た』云々と報じてゐる。然るにさういふトルストイの狀態についで世評をも報道してゐる。その一二を次に抄記するなら、

○カプリにゐるマキシム・ゴルキイは、トルストイ伯の訃音の虛傳せられたのを聞いて卒倒して、醒覺してからも、絕食して、家族を近づけなかつた。虛報と知れてから、やうやう常態に復した。(十一月十八日羅馬)。

○ミユンヘンにゐる、パウル・ハイゼは、「トルストイ伯衒氣と老耄との爲めに狂言を演ず」と云つた。(ピコロ記者の談)。

○伯林に滯在してゐる、グルハルト・ハウプトマンが云つた。トルストイは今のルーテルである。老後の擧動を廣告だなどと云ふのは誤である。(ルスコエ・スヲロ)。

〇一たびトルストイをルーテルに比したハウプトマンは、之を「第二のサヴオナロラ」と稱した。（ベルリネルターゲブラット）。

ざつとかういふものである。ゴルキイが卒倒したといふのも眞實で、さもあつたらうとおもはれる。パウル・ハイゼは八十歳の老翁になつて、『一代貴族の名譽の附いた勳章を貰つた。これからは、フォン・ハイゼである』といふ通信がやはりこの椋鳥通信に出てゐるほどで、然かもミュンヘンに住んでゐたのだから、トルストイと肌が合はぬのも無理がなく、また晩年のトルストイなどについて理解も出來なかつたと看て差支ないであらう。無遠慮な評語だが、ハイゼはさう信じてさう云つたものと見える。ハウプトマンの評語には、そのころ現代第一流の作家として、トルストイに對して別に嫉視する必要もなく、幾分の會釋が其處にあつたにしても、ハウプトマンはさう信じたことを正直に云つたものと解釋していいやうである。

さうして見ればトルストイのやうな大きい人物でも傍からは勝手氣儘な評語を冠せられてゐるといふことになる。『衒氣と老耄とのために狂言を演ず』といふ評語と、『現代のルーテル』といふ評語とではたいした相違で、それがいづれも第一流どころの文人の評語なのであるから、致し方が無いといふものである。

ここで私の興味を惹くのは、鷗外の椋鳥通信は、ただの文藝通信でなく、普通日刊新聞からその資料を得て居るために、全面が活々としてゐて、人間的、現世的なにほひが漲つてゐるといふことである。かかる批評などは、先づ普通のトルストイ傳に無いやうにおもふが、どういふものであらうか。

第二に、こんな事もおもへる。若し歐羅巴アメリカあたりに、鷗外のやうな人がゐて、どしどし日本の日刊新聞を讀みこなし、恰も鷗外の椋鳥通信のごとくに、日本の文學藝術のありさま、藝術家文人の消息が傳へられるならば、嘸愉快であらう。『ストリンドベルヒはもう絶食してゐる。ポートワインを少し飲むだ

けである。夜も眠らない。死期は近づいてゐる』といふやうな通信でも、『ザルツマンといふ翁が八十九歳で死んだ。ゲエテを目撃した最後の人である。ワイマルの庭でゲエテの孫と遊ぶ時、ゲエテがいつも出て見た』などといふのでも好い。モナ・リザを盜まれたルーブル館長が職を罷めてアテンの佛蘭西學院長として赴任したといふのでも好い。その盜まれたモナ・リザを發見した、ヱネチアのゲンは、ルーヴルの懸賞を貰ひ、勳賞を貰つたのに滿足せず、畫の見積價格の十分の一を要求する訴訟を起したといふのでも好い。日本の文藝が追々歐羅巴語に譯されて讀まれるやうになり、ついで日本語の原文で讀まれるやうにでもなれば、必ずさういふ通信も出來るとおもふが、先づ當分のあひだはむづかしいかも知れない。

——文藝懇話會 昭和十二年三月——

赤彦歌碑

明年は久保田俊彦（島木赤彦）十三回忌に當るが、信濃では久保田俊彦先生追悼謝恩會をば本年行ふこととし、その會の事業の一つとして、赤彦歌碑を信濃諏訪郡富士見村の公園に建てることになつた。なぜこの富士見公園を選んだかといふに、此處には伊藤左千夫の歌碑が建つてゐるからで、左千夫歌碑は、

寂しさの極みに堪へて天地に寄する命をつくづくとおもふ

といふ左千夫の歌を赤彦が書いて大正十一年に建てたものである。左千夫はこの富士見高原を愛し、

空近き富士見の里は霜早みいろづく草に花も匂へり

諏訪ぶりを鄙とはにかみ慶しくものする君にあやにあづめり
秋草のしげき思ひを言ひがてにまつはる露を手に振りおとす

などといふ歌をも作つてゐる。歌碑の歌は蓼科に近い高原の歌であるが、歌の内容が一般的で何處で作つたとしてもよいから、この歌を選んだのであつたらう。それを萬葉假名の謹嚴な楷書で書いた。

左千夫歌碑の建つた時には、私は墺太利のウインに留學中であつた。近時、歌人の歌碑建立は一つの流行となり、現代でも一かどの歌人と稱するものは競うて歌碑を建て、自作の歌碑を建てなければ萬葉の歌碑を建てたりするといふ具合になつてゐる。

そこで今回の赤彦歌碑建立のごときも一つの流行に動かされたやうに見えるけれども、實は大正十一年に既に先鞭をつけたもので、當今の歌碑建立流行は、恐らく左千夫歌碑建立に動かされたものだらうとも謂ふことが出來、この結論は、

歌壇の歴史とアララギとの關係に想到するものは、妄論とは誰もおもはぬであらう。その左千夫歌碑の續きとして赤彦の歌碑が建つたのであつた。赤彦歌碑の歌は、

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月のかげ波にうつろふ

といふので、この一首を選び、萬葉假名にして私が書いた。赤彦の歌には、歌碑の歌の候補となつた

高槻の木ずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも
いや日けに青むみ空やこの頃は時雨の雨の降ることもなし
師にしひそめるものを常知れり心かなしも空澄むこのごろ
天とほく下りゐ沈める雲のむれにまじはる山や雪降れるらし

などの歌は、皆佳作であつて、高原に建てる歌碑の歌としては却つてふさはしいとも思つたのであつたが、種々相談のすゑに『みづうみの』の歌に極めたのであ

つた。この歌も赤彦一代に於ける傑作の一つである。

私は十月二十三日午後零時三十五分發の汽車で新宿を發つたが、富士見を過ぎたころ車房で澤山の馬が諏訪からも出征したといふことを聞いた。そしていよいよ出發といふ時に、或村では擧つて白飯を焚いて食べさせたといふことも聞いたし、また或村では諏訪社の御守護を馬の頭に置いて、彼等の武運を祈つたといふことも聞いた。

上諏訪に一泊して、翌二十四日東京から來た友人と合して富士見村に行つた。歌碑除幕式は富士見公園で行はれ、次第は、一同著席、修祓、除幕（令孫によつて行はれた）、降神、獻饌、祝詞、玉串奉奠、撤饌、昇神であつた。次に追悼謝恩式は富士見小學校で、開式の辭、經過報告、式辭、祝辭及追悼謝恩談、謝辭、閉式の辭の順序で行はれ、ついで追悼法會が信用組合事務所で、一同著席、讀經、燒香、挨拶の順序で行はれ、午後五時に萬事終了した。

東京に歸る人々は五時四十分發でたつた。私はその夜懇親會に列して上諏訪に一泊し、翌二十五日の七時五十分發の汽車で東京に歸つた。
明年は赤彥歿後十三年になるといふから、月日の速く經つことを感ぜしめる。故人に對する追慕の情として何か具體的なものが欲しいといふので、歌碑の建立ともなるのであるが、このごろ左千夫碑があまり石摺を取つたので石が損じたらしく、また安つぽい石版摺が富士見の飲食店などの店頭で賣つてゐるのを見かけた。併し、左千夫の歌碑も赤彥の歌碑も此處の高原に建つてゐるのだから、その氣持は無くしたくないものである。（十月二十八日記）

――日本讀書新聞　昭和十二年十一月十五日――

銃砲聲

上

私が神田から青山に移つて來たのは日露戰役當時で、長兄と次兄の出征するのを新宿驛で送つたが、東北兵はいきなり黑溝臺戰のやうな劇しい戰に遭會し、實戰といふものは成程ひどいものだと兵が皆思つたし、機關銃の音もその時はじめて經驗したのであつた。そこではじめは何とも思はぬカタカタカタといふ音が、追々恐ろしく聞こえるやうになつたといふ話をよく聞いたものである。戰が濟んで、もう大正になつてから、私の書齋にたまたま機關銃の音が聞こえて來るの

が、感覺としては非常に新鮮で珍らしいものであつた。そこで私は一つ二つその機關銃聲の歌を作つたことがある。それが今ではもう陳腐になつてしまつたから、歌にももう作る氣にならない。

秀吉が伏見の城にゐたとき、城外で四五十ばかり鐵砲を放つ音がした。近侍の者が驚き怪み、寧ろ慌てる態であつたが、秀吉いふ、あれは大名共が鳥打に出て込めた玉藥を拔くのだ。そこでしらべたところが果してさうであつたといふ話が、老人雜話に出てゐて、『太閤伏見にて砲聲を聞されし事』と題されてゐる。原文には、銃聲の聞こえた時、『人皆怪む』とあり、秀吉の容子について、『笑ふて御座す』とか、『太閤笑ふて云』とか云つてゐるのは、秀吉の泰然自若としてゐるのに引きかへて、近侍の者の驚いたさまを想像することが出來る。ここの文章は秀吉と近侍の態度とを對照させてゐるので秀吉のみ偉く聞こえてゐるが、秀吉も内心驚いてゐたに相違ない。

併し銃聲に驚いても毫も秀吉の沽券にかかはることがないといふのは、秀吉と雖さういふ音響に馴れてゐないからで、戰爭の音響は時代と共に劇しくなり、ヴェルダン戰の砲撃の音などは隨分はげしいもので、砲兵が耳を保護しつつ打つてゐる寫眞を見たことがあるので分かる。私等は西部戰線で聞こえた音響まがひを映畫に仕組んだのを聞いても體がぞくぞくするやうであるが、死ぬ氣遣がないからといつて、あの音響をむさぼり聞くといふのは勿體ないやうな氣持のしたこともある。

下

今度の戰爭では日本の從軍記者は第一線に出て工兵の決死隊などと一しよに活躍してゐることは、映畫でも壁のところから駈け出して向うの壁のところに隱れるところなどが映つてゐるので、私等はらはらして見てゐるのだが、看客の方

では死ぬ氣遣はない。

今度の事變は世界で最も尖端的戰鬪だから、空陸海からの砲聲の轟きで、『朔來殷々たる砲聲』などといふ句は事實その儘をあらはしたものであるが、いよいよ突擊戰肉薄戰になつて來ると、近い音響の方が直接な感覺になるので、殷々たる砲聲といふのは、その形容が適切でなくなる。迫擊砲の音などはパシャ！　パシャ！　といふやうな音に聞こえて、寧ろそれが直接的にひびくといふことを聞いた。

從軍記者の走る場面でも、彈丸がヒューーヒューーと音して通るところを走つてゐる。あゝいふところを記者が通り越して辛うじて土饅頭の陰に隱れる。この土饅頭は支那に行つて見ると到るところにある。敵兵を背後にしてその土饅頭のかげに辿り著いて、兩の足を伸ばした。その時にも彈丸がひつきり無しに飛んで來、直ぐ前の水溜などに落ちて飛沫をあげたり、直ぐ前の柳の木に當つてぐらぐらと

搖がしたりする。さういふ時などは、ヒユー、ヒユーといふ音が最も直接的に聞こえる、記者諸君は兩足を伸ばして、

『落著け。落著け。』

と云ひ云ひ、ルックサックから林檎を取り出して、剝きはじめたが、皮を餘り厚く剝いたので、林檎が小さくなつてしまつた。かういふ實驗談を私はまた聞きに聞いて、實戰で生死の境界に立ちまじつてゐる時には、誠にこのとほりだとおもつた。

最近の事變ニユースを見ると、南京の城壁を直ぐ近くにして、決死兵の駈けてくる場面があつた。カメラはその決死兵の來る前側面に置かれてゐる筈だが、兵は走つてくる途中に鐵兜をかしげた。これは雨風などに向つて走るときにする人間の體勢だから、あの時にはどのくらゐ彈丸が飛んでゐたか分からないとおもふ。その音は重砲の音などとちがつて、ヒユー、ヒユーといふ微かな音に相違な

い。結論とか話の落とかいへば、その音を最も直接的だといふことにして、前の秀吉の話に結付けて小文を纏めるといふ手段になるのである。

――讀書新聞　昭和十三年一月一日及び五日――

海犬養岡麿應詔歌

御民われ生ける驗あり天地の榮ゆる時に會へらくおもへば

○

この歌は天平六年（甲戌）に、海犬養宿禰岡麿が、詔を應はりて作つた歌で、萬葉集卷六に載つてゐる。岡麿の傳記はよく分からぬが、海犬養氏については、書紀天武紀に、十三年十二月己卯、海犬養連賜ニ姓宿禰ニとあり、新撰姓氏錄卷十五に、右京神別、海犬養、海神綿積命之後也とあるものである。『海』をアマ

と云ふのは、『海部・山部・山守部』（古事記）などの『海部』をもアマと訓ませてゐる。このアマの部族に就き萬葉では、泉郎、磯人、海夫、海子等とも書いてゐるが、海犬養氏ともその根源を同じうするものと看ることが出來るであらう。

一首の意味は、天皇の御民の一人である私は、切實に生き甲斐のあることを感ずる。天地と共に興隆限りなきこの聖代に生れ合せたことを思へば、といふのである。

この歌の、『御民』といつて、『御』の字をつけるのは、天皇の臣民であるから、尊んで『御』の字をつけるので、萬葉で『百姓』をオホミタカラ（大御寶）と訓ませ、書紀で、百姓、民、萬民、人民、蒼生、公民、黎民、億兆等を盡くオホミタカラと訓ませてゐるのも同じ道理で、『大君の御楯』と云つて、軍人のことを自ら尊んで『御』の字をつけるのも、天皇の統べたまふ軍人だといふのに本づく表現で、日本國語特有のものである。和名鈔に、人民、和名比止久佐。一云、

於保太加良とある。大寶の義である。ミタミと使つた例は、萬葉巻一、藤原宮の役民の作つた歌に、『其を取ると、さわぐ御民も家忘れ、身もたな知らず』云々とあり、持統天皇時代に萬葉に既にこの用例があるのである。

『生ける驗あり』は、現代語に翻せば、誠に生甲斐のあることだと、强く詠じたのである。驗は靈驗、效驗の驗で、支那の注には、效也、功也とあり、我國でも、類聚名義抄、字鏡集等にも、シルシ、アキラカの訓がある。萬葉で、印の字を當てたごとく、結果として標（效果）の現出して來る場合に使ふ。萬葉巻三、大伴旅人が酒を讃美した歌に、『驗なき物をおもはずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし』といふのがある。この歌の、『驗なき物』は、效果の無いといふ意味だから、甲斐ない事、下らぬ事といふ意味に落著く。岡麿の、『驗あり』はその反對だから、效果の顯著な事、甲斐ある事といふ意味になるのである。なほ次の例を見よ。

草枕旅にしあれば獨して見る驗無み海神の手に卷かしたる珠襷

橘を屋前に植ゑ生し立ちて居て後に悔ゆとも驗あらめやも

降る雪を腰になづみて參り來し驗もあるか年のはじめに

天ざかる鄙の奴に天人し斯く戀ひすらば生ける驗あり

驗なき戀をもするか夕されば人の手まきて寐なむ兒ゆゑに

こほろぎの待ち歡べる秋の夜を寐る驗なし枕と吾は

高麗錦紐の結も解き放けず齋ひて待てど驗なきかも

ほととぎす此處に近くを來鳴きてよ過ぎなむ後に驗あらめやも

斯ういふ用例を參考して悟るべきで、萬葉集には、『生ける驗あり』といふ用例は二つある。それが新古今あたりになると、『春日野のおどろの道の埋れ水未だに神のしるしあらはせ』等となり、幾分色調が變つて、『甲斐ある』『甲斐なき』の方が多くなつて來たのではないかと思はれる。やはり新古今に『濱千鳥ふみ置

く跡の積りなばかひある浦にあはざらめやは』『中々に消えば消えなで埋火のいきて甲斐なき世にもあるかな』とあるたぐひである。

『天地の榮ゆる時』は天も地も共に榮える。天地の如く永遠に繁榮する、天地と共に永遠に興隆するといふ意味で、詞が簡淨で充滿して居り、極めて强いヤマトコトバである。若しこれが支那であつたら、かう簡淨には行かぬ。例へばその頃既に渡來してゐた、文選を一瞥しても、神雀五鳳甘露黃龍之瑞とか、聖皇宗祀穆穆煌煌上帝宴饗とか云つて、繁瑣(はんさ)巧麗に始終してゐるのに、日本の歌は、それをその儘模倣してゐない。由來我國では、『あきつ島日本(やまと)の國は神(かむ)がらと言擧(ことあげ)せぬ國』といふことがある。これは、無駄なことをべらべらと饒舌せぬ國、屁理窟を述べたてて日を暮らすことをせぬ國といふ意である。從つて言語も簡淨にして充足してゐる。これは賀茂眞淵なども力說したところで『上(かみ)なるは言(こと)少くして雅び、心ひたぶるにして愛(め)でたし』(萬葉考序)といひ、『日(ひ)放(さか)る國人は巧みなる事

を好む』（語意考）と云つてゐるのを見れば分かる。次に參考歌としてアメツチといふ語の入つてゐるのを示す。

　天地と相榮えむと大宮を仕へまつれば尊くうれしき

　天地に足らはし照りてわが天皇しきませばかも樂しき小里

　天地と久しきまでに萬代に奉へまつらむ黑酒白酒を

先師、伊藤左千夫先生は、明治四十年、雜誌アシビ第四卷第一號で『一國の元氣を顯現せる歌ありや』を公にした時、岡麿の此一首に言及し、『意は簡短なり。陛下のおん民たる吾は眞に長生したる甲斐ありし、此天地榮ゆる時に逢ひし事を思へば、眞に生きて居りし甲斐ありしよとなり。思想の簡明なるは作者の率直を偲ばしめ、依て以て作者の元氣を感ぜしむ。詞調勁健にして句法莊重、眞に堂々たる大丈夫の聲明たるに協はずや。作者自身を發揮すると同時に、能く時代の元氣を發揮せるを見る』『作者自己の發現は自然に國民の元氣を代表せり。眞に能

く聖代の壯觀をたたへ得て遺憾なしと云ふべし。聖武の盛代にあらざれば此の歌を詠むこと能はず。此の歌にあらざれば、聖武の盛世を盡すこと能はざるの感あらしむ』『嗚呼明治の盛世は實に天平に十倍す。然も此の盛世を歌うて、一國の元氣を顯現し得たる作歌如何と見れば、予は悵然として大息を漏らすの外なきを如何にせむ。嗟。丁未歳旦硯を洗うて無一塵庵に記す』から先師は云うて居る。

私の云はむとするところも、既に先師の言に盡きてゐる。此歌は萬葉集中にあつて、注意すべき歌の一つであることもまた同樣である。そして、かういふ思想的とも謂ふべき歌は、聲調によつてその效果を擧げ得るものであることをもまた先師の言のとほりである。賀茂眞淵が、『御民われ生ける甲斐ありてさすたけの君が御言（みこと）を今日開けるかも』といふ歌を作つた。これは眞淵がそのころの古調の歌としてはせいいつぱいのものであつただらう。また作る時に岡麿のこの歌を念中

に持つてゐて作つただらうと推察することも容易である。併し岡麿の歌に及ばないといふのは、岡麿の歌ほど、重厚にして且つ簡淨な聲調に行きつき得なかつたためである。眞淵の意力を以てしても斯様である。宣長以下のものに至つてはもはや到底不可能な境界にあつた。

岡麿の歌は、かくの如きものであるが、それでも、『たまきはる宇智の大野に馬竝めて朝踏ますらむその草深野』や、『わたつみの豐旗雲に入日さしこよひの月夜清明けくこそ』などといふ歌には及ばない。それはどういふわけであるかといふことを吾等は心を潛めて考へなければならぬのである。

茲に序を以て云。海犬養岡麿の歌は、萬葉集の歌四千幾百首の中にあつて、ただ一首この短歌があるだけである。これなども大におもしろいことであつて、先師伊藤左千夫先生が『斯の如きの詩作ありて、更に其の盛大を仰がしむ。此に於て一首の短歌も其の關係する所の至大なるを知るべし』と云はれたのは、やはり

實作者の言であることを思はしめて、感極めて深い。（昭和十三年二月二十日）

——紀元二千六百年　昭和十三年四月號——

友を語る

上

羽前上山町小學校の頃の友に、北大教授藤原正君がゐる。今は孔子の研究に専念してゐるが、六歳ぐらゐの時に私の村の施餓鬼會に來て説教をしたものである。また彼は藤村操が巖頭の感を書いて華嚴瀧に生命を沒入せしめた時、一高の校友會雜誌に悲痛な追悼文を書いた。それを醫科志望の私等はひどくむづかしいと思つて讀んだものである。いつか岩波茂雄さんの自動車に乘せて貰つて三人は雷門前を通つた。『齋藤、このごろ御詣りするか。』『うん時々する。此處の近所

に菩提寺があるからな、やはり時宗だ。』『さうか、觀音力は直接法でいいな。慈意妙大雲、澍甘露法雨なんてな。』藤原は西光寺といふ時宗の寺の出だが、普門品をもおもひ出してこんなことをいつた。

東京開成中學の同窓に宮內省圖書頭渡部信、陸軍省醫務局長小泉親彥、東京帝國大學工學部敎授內田祥三、東北帝國大學文學部敎授村岡典嗣等の諸君がゐる。この組の市來崎慶一、山川一郎、園部潜諸君の世話で時折會合をやつてゐる。去年は吹田順助、大屋敦、菅原敎造、今津榮二、渡邊幸造、杉浦翠、磯野新造、兒玉淸、牧野雅樂之丞、針生利喜多、岩波武信、橋本寛三、辻盛、井上信、比留間茂十郎、田口八郎、松宮三郎、和田信夫の諸君が見えた。懷しい會合で、小泉君の和服姿も菅原君の山羊鬚もこの會合では特別の色彩を持つわけである。この組の中に卒業せずにアメリカに行つた現在の書肆裳華房主人野口健吉君がゐる。先代の裳華房主人時代に、鈴木天眼の大日本歟小日本歟、新渡戸博士の英文武士道、

農業本論、松村博士の日本昆蟲學、偉人叢書等を出版した書肆である。私が明治二十九年東北から出京してズゥズゥ辯で東京の少年に嘲笑せられてゐる間にあつて唯一人野口君は仙臺辯丸出しで私のために氣勢をあげてくれたものである。

一高に入つた時、中寮七番といふ部屋にゐたのは、前田多門、前田英一、田邊隆二、熊谷敦、八代準、佐藤吉郎、和田閏三郎、伊藤輝藏、藤懸廣の諸君と僕との十人であつた。十人は機會に應じて會合してゐた。一高を出てしまつて大學の學生だつた頃の事である。牛肉店豐國で會をしたとき、法科組が飛行機なんていふものは空想で實現がむづかしいといふのに對して、工科組が、そんなことは無い、間もなく實現すると主張して相讓らなかつたことがある。日露戰後間もなくで、そんな時代をも私等は通過して來てゐる。

一高の第三部卽ちただ今の理科乙と醫科大學の卒業生とは必ずしも同一ではないが、今でも會合し交驩してゐる。先日厚生省の高野局長がこの欄で槍玉に擧げ

てゐた。あゝいふ連中がこの組の部類である。福岡志願の高橋、小池、進藤、佐藤、内田の諸博士が卽ちこの第三部組である。それから大學同級會を〇九會といふのは、一九〇九年卒業といふ意味で、すでに卒業滿二十五周年の謝恩會も濟んで、明年は滿三十年だといふことである。

この會は親睦の濃いもので木村、佐々、坂口、八田、柳川、山川、加藤の如き學者級から、瀨川、村上、村山、福岡、松山、神尾、飯島、田澤、吉田、小野のやうな實行級、出井、藤懸、上田、菊地のやうな軍醫の將軍級から、消化器病院長神保孝太郎のやうな超實行級もゐる會である。

私は一年後れて卒業試問を受けた時は、神保はすでに病理學教室の助手をしてゐた。私が最後に長與教授の病理解剖學の試驗を濟ませ、成蹊館といふ下宿に寢ころんでゐると、神保がやつて來ていふに、『齋藤、なんだそんな不景氣な顏しをつて、アルコホルを飮んで反吐でも突け、けふはお前に傳授することがある

ぞ。』私は素直に彼から傳授を受けたが、もはや三十年近い過去になつてしまつた。

下

その連中から一年後れて、私は宮川、增田、高木、田村(春)、片山諸教授の組と一緒に卒業した。そして吳秀三、三宅鑛一兩先生の指導せられる巢鴨病院には、下田光造、後藤城四郞、林道倫の諸君と共に入局した。醫局には齋藤(玉男)、中村(讓)、杉江、黑澤、氏家、池田、橋、大成、木村等の先輩がをり、私が足掛け七年勤務してゐるうちに、中村(隆治)、菊地、高瀨、樫田、杉田、谷口、植松、兒玉、金子、雨宮の諸君が入局して來た。この年間は特有の雰圍氣を形成してゐたもので、學位の事などは餘り念頭に置かない飄々乎とした勤務ぶりを示してゐた。

大正六年私は長崎醫專に赴任し、足掛け五年ゐる内、藥劑部長竹下澄人、皮膚科部長笹川正男、ついで廣田康(現京城大學教授)、事務長出口本吉、小兒科部長齋藤秀雄の諸君、それから長崎高等商業學校教授武藤長藏君と親しくした。皆忘れ難い人々である。大正十年に神尾友修君と同船して留學し、神尾はウュルッブルヒに、私は墺太利のウインに行つた。ウインの神經學教室マールブルク先生の下には、齋藤眞、西川義英、久保喜代治、內藤稻三郞の諸君と一緒に爲事をし、松本(容吉)、吉川、和田の諸博士とも親しく交つた。

女の友にミチイといふ娘がゐた。或時獨逸境に近いドナウ沿岸の古城を見に行つた。娘と一緒に汽車に乘ると對ひ合つて二人の猶太人が乘つてゐる。暫くして娘は、二人の男に聞えよがしに、『あ、いやらしい!』といつた。獨逸語ならAch ekelhaft! である。これは猶太人だからこんなことをいふので別に意味は無いが、二人は風馬牛で反應が毫しも無い。そんなこともあつた。

日本の大震災のあつた年私はミュンヘンに轉じシピールマイエル先生に從學した。そこに滿洲大學の大成潔君が來て一緒に勉强した。杉田直樹、内村祐之二敎授も同門である。そのころ魚學研究の中井信隆君、麥酒研究の西村資治君等がゐた。今のヒットラー總統がルゥデンドルフ元帥と共に革命を企圖して成就しなかつた、あの年であつた。ミュンヘンでは一人も女の友が無かつたが、ミュンヘン市立圖書館員レックスといふ男と交つた。レックス君は獨身者でネクタイなどもよごれたのを平氣でかけてゐる男であつたが、典籍趣味があつて、日本の書籍も種々持つてゐた。明治六年版の新約ヨハネ傳などもあり、『なざれの人ゑそ』『われいのちの餅なり』といつた調子のものであつた。伯林では前田茂三郎君と交つた。

アララギを中心とする諸友は、先輩のことは措いて、岩波茂雄、橋本福松、阿部次郎、小宮豐隆、安倍能成、池崎忠孝、和辻哲郎、木下杢太郎の諸氏は友とい

ふよりは、恩人とか師友とかいふべきであらうか。左千夫門下に、島木赤彥、古泉千樫、中村憲吉の諸君と平福百穗畫伯がゐたが、今は皆この世を去つて、正岡子規直門の岡麓翁と、私の同門では土屋文明君が殘つてゐるのみとなつた。税所敦子刀自の歌に『對月戀舊人。もろともに見ばやとおもふ人はみな苔の下なり秋の夜の月』といふのがあるが、誠にもつて同じ感慨となつた。

土屋君は、すでに老に入つた私を勞はり保護してくれる。二人はカバンに一ぱいアララギ會員の歌稿を詰めて選に出掛けることがある。宿に著くと無言で選歌を急ぎ、一段落濟むと外に出掛ける。先般土屋君は鎌をカバンの中に用意して行き、楤木の芽を採つて食はせたし、高原に擬寶珠の芽を採つて食はせた。また海濱に心太草を集めてハンケチに包み『上等の心太を作つて差上げます』といつた。かういふ事は、萬事土屋君は唯物的趣味に本づいてやつてゐるし、私もまたその唯物趣味だから都合がいい。なほ私は歌壇の中に生存するから、石原純、釋

迢空諸君の舊同人をはじめ、大日本歌人協會を中心とする澤山な歌人の友人がゐる。

新聞社からたづねられた時、諸友の俤が走馬燈の如くにして私の意識の面を通つて行つた。それを記すとかういふものになつたが、普段無沙汰して孤獨のやうな私でも、友人の多いこと上の如くである。以下は補記することにして略した。

（昭和十三・四・十三）

――東京日日新聞　昭和十三年五月五日、六日――

鷗外作「山椒大夫」

鷗外のものは通俗的に、めそめそと泣くやうなものが無いので、鷗外のものには、『情』が無い、また『ネルヴォジテ』が無いと評せられたものである。ネルヴォジテの無いといふことは、近代人に特有な『神經質』が無いといふ意味で、當時の若い批評家達には物足りなかつたものと見える。

このことは鷗外自身書いて居る。『己の書くものは隨分惡く言はれる。穴の半分あいてゐるのが人に見えるのかも知れない。書くものに情が無いさうだ。情が半分の穴から拔けて出たのかと思へば、さうではないさうだ。元から無いのださうだ』と書いてゐる。

これは過去の評であるが、岩波から鷗外全集が出てから鷗外のものが以前よりも餘計に人から讀まれるやうになり、從つて批評も餘計に出るやうになつた。また鷗外を褒める批評も以前に比して多くなつたが、論難の批評もまた決して尠くはない。

この『情』が無いといふ批評は、現在にもあり、いろいろな人によつて云はれてゐる。鷗外の作のほんの一部である歷史小說についてでも、やはり『情』が無いといふ結論を當嵌めてゐるのもあつた。その一例は、最近間宮氏が鷗外の歷史ものを論じ、鷗外の歷史物を讀んで、精密な考證の必要を敎へられた代りに、熱情なき表現といふものが、文學、特に歷史文學にとつて作品を不具にするものであることを學ばされた、と云つたたぐひである。

鷗外の歷史ものは、考證が精確だといふ評判であるが、その『精確』を飽くまで認容する間宮氏等は、その『精確』と、『不精確』とをどのくらゐの距離にし

て論じてゐるのであらうか。考證といふことは、典籍に據るのならば誰にも出來るとおもふであらうが、それをも怠つてせぬ人が多い。この場合典籍をしらべた方の側の人は、調べぬ側の人よりも考證が確かといふことになるとおもふが、典籍の無い場合にはその他の資料に據らねばならないが、それをも怠つてせぬ人が多い。この場合に資料に顧慮した方が、顧慮せぬ方よりも考證が確かといふことになるだらう。鷗外の歴史ものが考證が確かだ確かだと認容するのはさういふ意味の『確か』といふことであらうからそれには自分も異存は無い。菊池氏や芥川氏の歴史ものに比して鷗外の歴史ものが一段の高位にあるのは、その資料的に確實なためだといふなら自分も贊成する。

然るに、鷗外の歴史ものは、必ずしも資料どほりでは無い。試に、「山椒大夫」について少しく檢して見よう。

越後の春日を經て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を、『もうぢきにお宿にお著なさいます』と云つて勵まして歩かせようとする。二人の中で、姉娘は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも氣が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思ひ出したやうに彈力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にでも歩くのなら、ふさはしくも見えさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐々々しい出立をしてゐるのが、誰の目にも珍らしく、又氣の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の斷えたり續いたりする間を通つてゐる。砂や小石は多いが、秋日和に好く乾いて、しかも粘土が雜つてゐるために、好く固まつてゐて、海の傍のやうに踝を埋めて人を惱ますことはない。

藁葺の家が何軒も立ち並んだ一構が柞の林に圍まれて、それに夕日がかつと差してゐる處に通り掛かつた。
『まああの美しい紅葉を御覽』と、先に立つてゐた母が指さして子供に言つた。
子供は母の指さす方を見たが、なんとも云はぬので、女中が云つた。『木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね。』
姉娘が突然弟を顧みて云つた。『早くお父う樣の入らつしやる處へ往きたいわね。』
『姉えさん。まだなかなか往かれはしないよ。』弟は賢しげに答へた。
母が諭すやうに云つた。『さうですとも、今まで越して來たやうな山を澤山越して、河や海をお船で度々渡らなくては往かれないのだよ。毎日精出し

て大人しく歩かなくては。』

『でも早く往きたいのですもの』と、姉娘は云つた。

一群は暫く默つて歩いた。

これは、「山椒大夫」のはじめの處の文章である。この小說は、「說經さんせう大夫」に據つたことは明かであるが、說經の方では母子の旅立を三月十七日或は三月二十一日としてあるが、鷗外のは秋にした。そして安壽の入水を翌年の春のことにした。說經には、『去程に月日とまらぬならひとて、其年もやうやう暮れ』云々とあるのをば、鷗外は月日が稍長過ぎるとおもつたのであらう。また、實際物語の筋から行けば旅立を秋にした方が合理的のやうにおもへる。また母が佐渡の農家に賣られて雀を追うたのを秋の收穫時とする方が合理的だと私等もおもふのである。かういふ手加減をも廣い意味の考證といふのならば、鷗外の考證が精

確だと謂つても差支はないが、これなどは資料を尊重するといふ點から行けば、寧ろ我儘なわけだから、世の批評家達は原の資料を調べもせずに、ただ鷗外ものは考證が確かだ考證が確かだといつたところでをかしなこととなるのである。

それから安壽の額に燒火箸をあてるところは說經には事實として記載してゐるのに鷗外は夢にしてゐる。これは殘酷の感をうすくするためであつたらう。それから、厨子王の逃げたあとで安壽は殺されるのだが、鷗外は安壽が入水したことにしてゐる。說經に、『じやけんの大夫三郎が、すいくはをあてゝせめころす。さらばしがひも取置か。爰のかやはらに手が一つ。かしこのつゝじのかぶにあし一つ。いぬからすが引あらせしを』云々とあるが、鷗外はこの資料を除いてゐる。

それから厨子王が正道となつて世に出るやうになつてから、山椒大夫を殺すのである。『まづ大夫を此しらすに、こしよりしもをほりうづみ、兄弟五人のやつ

ばらに、竹のこぎりにてくびをひかせよ』『一ひきひいてはせんぞうくやう。二ひきひかばまんぞうくやう。百にあまりて六つのとし。くびはまへにぞ、おちにける』といふのが説經の方の文句であるが、鷗外の方は、『其年の秋の除目に正道は丹後の國守にせられた。これは遙授の官で、任國には自分で往かずに、掾を置いて治めさせるのである。併し國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のやうに思つたが、此時から農作も工匠の業も前に增して盛になつて、一族はいよ〳〵富み榮えた』となつてゐる。

　かういふ手加減については、「歷史其儘と歷史離れ」（全集第十八卷）といふ文章中にくはしく出て居り、讀者にとつて有益な文字であるが、その中に、『傳説が人買の事に關してゐるので、書いてゐるうちに奴隷解放問題なんぞに觸れたのは、已むことを得ない』といふのがある。即ち鷗外は山椒大夫を殺さぬばかりで

なく、奴隷を解放せしめて却つて家が榮えたといふ、社會學經濟學上の事實として描寫して行つた。文は簡潔でくだくだしくないけれども、讀者は實際の事實として受納れることの出來るやうに出來て居る。併し鷗外の考でかうなつたので、原の資料には無いのである。

そんなら、この事は單純に鷗外の頭でこね上げたのかといふに、これがまたさうばかりではない。說敎さんせう大夫の文句を吟味すると、山椒大夫が國分寺の庭で殺されるとき、子の三郞に對つて、『大夫は三郞を打ながめ、扨も／＼口をしや。あねのしのぶをせめころさで置ならば、都のこくしをむこに取、ゐいぐわにさかへんもの、三郞いかにとこうくはひす』といふところがある。これが鷗外に暗指として働きかけたものと考へることが出來る。鷗外の歷史ものとその資料になつたものとを較べると、資料を隨分大切にしてゐるのみでなく、その資料に變形を加へる場合でも、決して資料をおろそかにしないところがある。

次に、鷗外の「山椒大夫」には全體として『あはれ』が滲みこんでゐる。このことは岩波文庫の解説にも一語云つて置いたが、ここに小說のはじめのところを引用しただけの範圍でも既にその『あはれ』を感ずることが出來る。『越後の春日を經て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が步いてゐる。母は三十歲を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である』といふだけでも、既に何かあはれなところがあるのである。これはどうしてであるかといふに、資料が既にあはれな物語だからであるのみならず、說經は節づけがあつて物語るものだから、その節にあはれが附帶してゐるし、また文句の中にも『しやうじのあはれをとどめたり』とか、『をつる泪のひまよりも、くどき事こそあはれなれ』とか、『けさ、なをひがうらに立しらなみは、あふぜうのくもと也、我子みぬよ物うやと、ふしまろびてぞなき給ふ』とか、種々あはれぽいところがあるが、鷗外はそれをその儘取らずに、事實として描寫してゐるのである。語を

かへていへば、『情』が無いのではなく、『情』を事實の中に織込ませてゐるのである。この解釋は、「山椒大夫」のやうなものに比較的よく分かるので、私は一筆書く氣持になつたのである。

鷗外は、作品全體がディオニゾス的でなくてアポロン的だと告白してゐる。作品をディオニゾス的にしようと努力したことはない。若し多少でも努力した事があるとすれば、それは只觀照的ならしめようとした努力のみであると告白してゐる。それでも「山椒大夫」のやうな資料になると自然に『あはれ』が滲み出づるに至つた。『情』が無いのではなく、事實のうちに隱されてゐるのだが、讀者は我儘だから、資料まで溯るなどといふ面倒を好まずに、直ちに自分の不滿感を吐出してしまふのである。

盲目の母が粟の鳥を追ひながらうたふ歌に、『あんじゆこひしやほやれほう、づしわうこひしやほやれほう、鳥も生ある物ならば、おはずと立ちてゐさせよ』

といふのがあるが、鷗外は、結末を、『鳥も生あるものなれば、疾う〳〵逃げよ、逐はずとも』として居る。

傳說だけでは、磐城判官正氏といふ人の傳も明瞭でないが、永保元年の冬に筑紫安樂寺に流された。それだけを根據として、『永保元年に謫せられた正氏が、三歲のあんじゆ、當歲のづし王を殘して置いたとして、全篇の出來事を、あんじゆが十四、十五になり、づし王が十二、十三になる寬治六七年の間に經過させた』のであつた。

また京都の『むめづのゐん』といふのがあり、『七じゆんに及迄御子ひとりもあらざれば』云々とあるのみであるが、鷗外は、『さてつし王を拾ひ上げる梅津院と云ふ人の身分が、わたくしには想像が附かない。藤原基實が梅津大臣と云はれた外には、似寄の稱のある人を知らない。基實は永萬二年に二十四歲で薨じたのだから、時代も後になつてをり、年齡もふさはしくない。そこでわたくしは寬

治六七年の頃、二度目に關白になつてゐた藤原師實を出した』と云つてゐる。
此等は廣い意味の考證かも知れないが、嚴格な意味での考證ではない。けれども鷗外の歷史小說は、人間心の自然性を顧慮するから、その意味の合理に本づいて切盛をしたので、私には大に有益なのである。
「山椒大夫」だけを讀んで、おもしろいとか、物足りぬとか、つまらぬとか、種種の評もあるわけだが、私はこの小說の本になつた資料とこの小說とを比較して見て、大に爲めになつたことを告白する。『考證が精確だ』などとただ口の先で云つてしまはれないもののあることも分かつたし、『情』が無いなどと云つて輕蔑してしまふことの出來ないことも分かつたのである。けれども文藝の評價は主觀的に千差萬別であらうから、只今のところ私の結論を人に強ひることなどをしてはならない。（昭和十三年七月十日）

――新日本　昭和十三年八月號――

最近二件

獨的と墺的

今回の日獨文化協定によつて、日本帝國の隅々までドイツ文化といふことが念頭に置かれるやうになつたとおもふが、同系統の言葉でもドイツとオーストリーとでは文化の傾向が幾分づつ違つてゐた。例へば私の身に近い例でいふと、神經學・腦髓病理學の方面でも、ドイツ、ミュンヘンのニッスル學派と、オーストリー、ウインのオウベルシュタイネル學派とでは各その特色が瞭然としてゐた。ミュンヘン學派は問題が部分的でも、觀察も記載も細かく論文がくどくて長

い。ウインン學派は問題が大觀的でも、記載が簡潔で從つて論文が短い。これは載せる雜誌の經濟的關係にのみ依るといふわけではなかつた。さうして此二學派は一時世界の學的潮流を支配してゐた觀があつた。

フロイドの精神分析學は、パリのシャルコーに淵源するけれども、つまりはオーストリーのウインンに根を据ゑるべき運命の學説であつた。卽ちこの學説は、同じ言葉であるドイツの學界に迎へられずに、瑞西のユンク、ブロイレルあたりを經て、遠く米國へ飛んだものである。これは單にフロイドは猶太人だといふ關係のみによるのであらうか。なほ、デェメルとリルケ、ハウプトマンとシニッツレルといふやうな特色をも顧慮せらるべき問題である。

合併後のオーストリーはナチス的統制のもとに一變化を來すだらう。私は從來のオーストリー的なものをも、純粹にして公明な文化的諸要素は、尊敬して以て相交流せしむべきもののやうに思つてゐる。

戰線からの歌

日支事變のはじまつた昭和十二年の夏以來、應召した將兵が現地にあつて、實戰をしながら歌を作つて、それが歌壇に發表せられたのであつたが、空想ではどうしても出來ない歌が幾つもあつた。それが半年たち一年たつうちに、はじめのうちは材料本位、興味本位であつたやうなものが、いつのまにか戰鬪そのものを體内に沁み込ませてゐると謂つた歌が、ぽつぽつと見當るやうになり「生」を寫すといふことがいかに自然に眞劍に行はれてゐるかをおもはせ、自分などは心より驚歎して居る。

然るに歌壇の一部では、今次の事變は千載一遇の大聖戰だから歌もそれに應じて千載一遇的なものを作らねばならん、あゝいふ部分的な瑣末的な歌ではいかんといふやうな批評もあつたやうである。けれどもさういふ議論は、實戰といふこ

とを知らない空想的なもので、單に大づかみなファナチックなものに過ぎぬと自分などはおもふ。

現地にあつて詠む歌は、自ら經驗した實際を詠むより爲方はないのであつて、その態度は決して間違つてはゐない。また實際に戰鬪をしつつ作歌するといふことの如何にむづかしいものであるかは、自分などはニューース映畫を通じて辛うじて一首二首を纏めてゐるのによつても分かるのである。實戰の歌にむかつて彼此批評をいふことは容易だが、それよりも假令一首でも現地からのものは尊重してもらひたいものである。

――東京朝日新聞　昭和十三年十二月十一日、十七日――

大成潔君を憶ふ

只今、私は山中に暑を避けてゐるが、君急逝の電報を受取つたのは、此處に來て間もない時であるから、私は非常に驚いて暫く電報を措くことも出來ぬありさまであつた。どうして急に亡くなつたか、それも分からぬ。さうしてゐるうちに、君は腦溢血で亡くなられたのだといふことを知つて茫然時を久しうしたのであつた。なぜかといふに小柄で痩せてゐる君がかう忽然として腦溢血で逝くとはおもはれぬからであつた。君は甲賀病院長とは甚だ親しい仲なので、東京に來るたびに、甲賀君の處に立寄つてはよく共に興を盡してゐた。私をも呼んで無理に酒を飮ませたことも度々あるが、私は近來酒が飮めなくなつて往年のいきほひが

無いので、彼等の酒筵に行くのをことわつたこともある。やはりその筵で逢つたのがおしまひでそれ以來君の顏を見ぬ。併し君のおもかげはなほ容易に彷彿として私の眼前にあらはれて來る。

このたび解剖學教室の鈴木教授から來書があつて、君に對する追憶の一文を草せないかといふことであるが、それは大成君と私との緣故を少しくたどられたためであつただらう。私は大學では大成君と同級で、所謂、〇九會といふ同窓會の會員であるし、專門を同じくして、吳先生の門下として巢鴨病院時代に同じ屋根の下で飯を食つた間柄である。けれども一番印象の深いのはやはり君のミュンヘン滯在時代であらうか。

私は西暦一九二三年、即ち大正十二年の夏に墺太利ウインを引あげ、獨逸ミュンヘンのシュピールマイヤア教授のところに來た。それは前年の夏親しく教授を訪うて、さういふ約束を取極めて行つたからであつた。私は教授から小腦の材料

を幾つか貰つて、その爲事に著手してゐると間もなく、日本關東の大震災に逢つて、二三の日本人留學生と共に途方に暮れてゐたころである。そのうち東京の家族も無事だといふことが分かつたので、氣を立直して教室に通つてゐたが、何しろ教室には日本人は私一人なので、ウインでの經驗を經て來たと謂つても、時たま心細く感ずる事が無いではなかつた。それに大戰後さう年が經つてゐぬので、ミュンヘンの住民の日本人に對する敵意が失せ切らず、戰前に日本人に好意のあつた都市だけにその反動もまた却つてひどかつた。大戰中に吾々を呼ぶのにヤパーナなどとは決して云はず盡くヤップであつたといふから、私が食店に行くと、『彼奴はヤップだな』などといふ囁が聞こえる。時には聞こえよがしに言合ふ。時には、私がフェアッァイウングと云つて席につくと、傍のミュンヘン人はぷんとして私の處の席を立つたり、時にはその卓を叩いて私を睨めたり、さういふ厭な爲草をされたほど、敵意のほとぼりの冷め切らぬころであつた。私はそれでも

既に伊太利の旅も單身で濟ましたし、ひとり旅をよくやつた程なので、彼等に對しても、何の田舍者がといふ氣持があるので、恬然たる素振を以て彼等の態度に處してゐたのであつた。

そこへ大成君がひよつこりやつて來た。ある日教室に行くと、シュピールマイヤア先生が私の傍に來られて、『君のハイマートコレーゲが來ましたよ』といふ。一體誰かとおもつて先生の部屋に行つて見ると大成君であつた。

それからといふものは二人は常に一しよであつた。教授は私の傍に君の爲事場處を世話して呉れられたし、問もなく材料をも與へられた。その材料は老耄性癡呆の一例であつた。私の方は大體教授が指導し、大成君の方は大體シュパッツといふ講師が指導した。マルクの爲替相場がどんどん變化した時なので、二人は相談しながら、オブエクトグラスだのデックグラスだの、さういふ品物を買ひに出掛けたものである。それでも私等は無駄づかひはしなかつた。教室費として毎月

四ポンドづつ支拂つた。これも私が一ポンド値切つたのであつた。私が教室に入るとき教授がいはれるのに、米國の留學生等は毎月五ポンドづつ支拂ふから私もまた五ポンド支拂つて呉れ云々、そのとき私は、金持の米國の留學生と一しよにされては私は困るといふので四ポンドにしてもらつたのであつた。また二人は決して酒場で夜ふかすことなどはなかつた。

二人は朝はやく教室に行つて爲事をする。午になると近處に簡易な食店を見つけてそこで食事をする。それからカフエで午後一時まで油を賣つて、それから夕方まで教室で働き、夕食は稍中央街に近い食店で食事し、麥酒もシュパーテンブロイのもの半リートルぐらゐ飲む。爲事のはかどつた時には一リートルぐらゐにする事もある。それから歸つて寢るといふ調子で、實によく働いたものである。それは二人はこの教室で論文を作るつもりだからで、ほかの日本教授諸君のやうに、漫遊程度の教室まはりとは趣を異にしてゐたためである。そのほかに二人は

シュパッツの講習、ブムケの講義、ブラウトの講義にも出で、私はそのほかにイッセリンの講義とランゲの講義を聽いた。二人は精神病の方の學會には必ず出る。そんな具合にして時間を惜しんで勉强をした。それに大成君は女色を近づけないし、性欲方面の要求を一言もいはない。いはゆるフロインヂンといふものを持たない。私も致方がないからさういふ方面の經驗を皆無しない。それから大成君は臨濟錄か何かを自分で書いたものを持つて來て、カフェなどでもそれを讀んで居ることがある。大成君は禪の方では大成無著居士であるから、西洋に來たつてミュンヘンに居たつてそれにかはりがなかつた。

それから大成君は語學がよく出來た。會話なんかもずんずん旨くなる。そのうち食店で識合になつた人に圖書館に出てゐるレックスといふものがゐて、それは智識欲の强い男で、學問もなかなかあつた。大成君はその男からサンスクリットを習ひ、そのかはりその男に日本語を敎へることになつた。さういふ場合の時間

を利用して私は美術館を訪ひ、大學街の裏手の古本店をのぞいて歩く。大成君は奉天で支那語を勉強したので會話も自由であつた。あるときカフエで支那の留學生と談話を交したことがあるが、まことに旨いものであつた。どうか彼等にフロインヂンを得る方法でも訊かんかといふと、ハッハッといふ大成流の哄笑を以て相應ずるといふ具合であつた。

そのサンスクリットの先生が大成君が禪の悟に入つてゐることを知つて、ミュンヘン大學の教授で佛教を研究してゐる人と會見したことがあつた。その教授はなかなかの智識であり、分からぬところがあるとハンブルクの日本人に質問に行くといふ程の熱心家であつたが、大成君いふに、西洋人のは研究のための研究で信仰でないから面白くないし、駄目だといつてゐた。

さうしてゐるうち、その年も暮れて春になつた。そのあひだに呉先生のシーボルト傳の資料を得るために、二人で墓地に行つたり、元宮殿あとの五階に行つた

り、いろいろしたことなどもあつた。爲事が順調にはかどつて結果がおもしろくなつて來ると、シュパッツは急に熱心に世話をし出した。何月ごろであつたか、只今記憶が惡いが、いよいよ論文を纏めることとなり、大成君はシュタルンベルヒ湖畔に論文を書きに出掛けた。この湖はルードウィヒ一世と侍醫のグッデン博士とをめぐる悲劇で有名なところで、森鷗外の「うたかたの記」といふ小説はこの湖を織込ませてあるので、向うに行かない人でも知つてゐる人は知つてゐる湖である。そこの湖畔に大成君が數日間籠つて論文の稿を書き了へて、それをシュパッツに見せた。すると數日經て、この論文の發表は、シュパッツと共著にしろと云つたといふことであつた。その時の大成君の顏容を今でもおもひ浮べることが出來るが、餘程不愉快であつたやうである。そこで私はそれに抗議を申込み、單獨の名で發表することを強く言ひ切るやうにすべきだし、シュピールマイヤア教授にもさう話さうといつたが、大成君いふに、もう承知してしまつたから、今

更變更しない。また此處は餘り氣持が好くないから、ハンブルクのヤコブ敎授のところへ行く、さういふ話で、また一旦いひ出したら、決して變更をしない流儀であつた。さうして間もなく君はハンブルクに立つた。ハンブルクのワイガント敎授が日本に來られたときに、奉天に立寄つて、いろいろ大成君の世話になつた筈である。

私もまた昭和五年の暮に滿洲を旅したとき、奉天でいろいろ世話になつた。ジンギスカン料理といふのを大成君が私に馳走した。また同級生の森川千丈君がまだ丈夫の頃なので、三人で酒も飲んだ。今の宣撫班長八木沼丈夫氏が私の案内役だつたので『齋藤は偉いよ。滿鐵の高級社員をお伴にしよる』などといつて笑つたりした。また大成君の自宅で滿洲鍋をつついた時にも、支那語の話がいろいろ出たし、敎室の話などもいろいろ出た。大成君は歸つて來てからも、病理解剖學方面の爲事は餘りしなかつたやうであるが、やれば何でも出來た人である。その

方面のことは教室の人々によつて語られることと思ふから、私はここで筆を擱くことにする。

私は只今山中にゐて、計らずも君死去の報に接し、一頓にして身邊寂寞の感を切にして居る。忽忙亂筆意を盡すことを得ない。（昭和十四年八月八日箱根旅中）

――昭和十四年九月一日　滿洲醫科大學時報――

歌のこと二三

篤胤の歌論

平田篤胤が猛烈な日本主義者であつたことは普く人の知るところだが、彼の歌論もまた日本主義的で、漢詩つまり彼のいはゆる『戎國（からくに）の詩』、『赤縣州（からくに）の詩』といふものは、到底わが皇國の歌には及ばないと强調してゐる。その及ばない理由として、詩歌は人間の僞らざる眞心を吐露するものであるのに、戎國の詩は上べばかり上品ぶつて、實は虛僞だからである。その證據には戎國の詩には、眞の戀愛の詩が無いからだといふ論法である。彼の「詞道大意」は、今でいふ和歌入門

のたぐひであるが左のごとき文句がある。

イデヤソノ眞僞ノ證ヲ云ハヾ、歌ハ神代ノ昔カラ致シテ、男女ノ間ノ情ヲ主ト詠デ、戀ノ歌ガ殊ニ多イ。此ガ眞ノ儘ナル一ツノ證據デゴザル。後ノ世ト云ヘドモ、ナホ戀ノ歌ノ多イノハ、是マタ古ノ眞ヲマナブ證據デゴザル。然ルニ詩ハ上代ノ戀ノ詩モ、カノ詩經ナド云モノニ記シテアル中ニハ隨分アルケレドモ、中比カラハ閨怨ナド、云ハアルケレドモ、夫ハタヾ婦人ノ情ヲ設ケテ云ツタバカリノコトデ、男ノ戀ノ詩トテハハカ〴〵シイ書ニハ絶テ見エヌガ、ソモ〳〵赤縣國ハ殊ニ婬犯ノコト甚シイ國ナルガ、其ノ詩ヲ見レバ婦人ノミ戀ハシテ男ハ戀情ノナイコトカト見エルハ甚シキ僞デハナイカ。是ガ僞デナクテ何ダラウ。抑〻戀ハ愚ナルモ賢キモ遁レ難キ自カラノ人ノ情ダニ依テ、其歌ノ多イノガ實ノコトデ歌ハ則チ人ノ情ノ眞ノサマヲ云ヒ出ルモノナル證據デゴザル。コノ一ツノ差別ヲ以テ、萬ノ事、皇國ト諸越トノ眞ナ

ルト僞ナルトヲワカチ知ルガ宜イデゴザル。戎國ノ道ハ言ニコソ誠々ト云ヒタツルケレドモ、夫ハ口デ云フ斗リ、實ノ處ハ聖人賢人ト云ハレタル者共ノシワザト云ドモ、タヾ表方（ウハベ）ヲ作ルコトノミガ多クテ、其僞ヲ以テ人ヲモ教ヘタテント致スガ故ニ、自（オノ）ヅカラ世ノ人ノ爲業（シワザ）ガ彌々僞ノミガ多クナッテ、中々ニ身モ家モ國モ治マリ難ク亂ル、コトノミ多イデゴザル。然ルヲ皇國ノ道ハ上モ下モ直キ誠ノ心ヲ以テ和ギ合フ故ニ言痛（コチタ）ク教フルコトハ無レドモ自（オノ）ヅカラ感（メデ）タク治ツタモノデゴザル。

かういふ論法で、その皇國の道の眞實であつた證據はかうかうであつたといつて、萬葉集の、『われはもや安見子得たり』の歌や、舍人親王の、『ますら男や』の歌などを引用してゐるのである。

自分等は、猛烈な日本主義者の篤胤が、然かもこちこちに固まつてゐるやうに見える老翁がむきになつて、戀愛歌の有無を以て事の眞僞を證據だてようとして

ゐる點がおもしろいのである。鶯胤の如くに熱烈に皇國をおもふ情のあるものは、是が否でもここまで押切るのは自然の行きかたで、私等ももつともだと思つてゐる。

然らば、鶯胤をばもつと生かして置いて、これを西洋のものと皇國のものと比較せしめたらどうであつたらうか。彼にアナクレオンの詩を讀ませ、女の裸身像を澤山に見せ、くだつての裸體畫、それから映畫の接吻の場面等、尻ふりダンスのタンゴ、さういふものを鶯胤に見せたらどうであつたらうか。彼は西洋ものの露骨ではげしいのに辟易しつつ、彼等は獸類の域を脱しないとでも云つたであらう。街頭で接吻する奴等は、白晝交尾する犬猫よりも下等だとでも云つたであらう。實際またさういはうとするなら、證據は幾らでもあるからである。

併し鶯胤はそんなことは云はなかつたかも知れない。そして、飽くまで古事記萬葉集あたりの實例を以て、アナクレオンだつて誰だつて、彼等の戀愛といふも

のは、眞の戀愛ではない。あれはただれた虚僞の戀愛である。裸身像にしてもさうである。人間本來の面目は美體をかくすといふところにある。大切なものは皆かくさうとする本能を有つてゐる。それを態々露骨にしようといふのは、毛唐國の奴等の虚僞を敢てする證據である。然るに皇國の戀愛歌はそんな虚僞なものではない。實例は、かくかく斯樣である。かくのごとくに篤胤は論じたかも知れない。ものは相對的であるから、どつちにでもなるが、篤胤の從來のやり口から推せば、彼は第二の論法のやうにやはり積極的に出て、つまりは皇國の和歌が一番上等だといつて、彼の得意な、『演說』をしたかも知れない。

和泉式部の歌

和泉式部の歌は、あまり私には緣が無く、『いづれともわかれざりけり春の夜は月こそ花の匂ひなりけれ』なども、いはゆる才女の云ひ振りでつまらぬものだ

とおもつてゐたが、ある時式部の歌をのぞいて見たことがある。

よも山の茂きを見れば悲しくて鹿鳴きぬべき秋のゆふぐれ

この歌は、あまり心をひねくつてゐないだけ感じが好く、それに女性らしい聲調の細みが一首を貫いてゐる。然るにこの歌は、和泉式部續集の方には、『よも山もけしきの見るに悲しきは鹿鳴きぬべし秋の夕は』となつてゐる。本集の方は原作で、續集の方は訂正したものであらうか。さうして、原作の儘では餘り單純幼稚だと思つて續集の方でかく訂正したものだとも推測することが出來る。併し續集の方は、澁くなつたけれども、感味は却つて減じた。

悲しきは同じ身ながらはるかにも佛(ほとけ)によるの聲をきくかな

この歌には、『遠くておこなひするおとを聞き』といふ詞書がある。夜になつて遠くに讀經のこゑのするのを聞いて咏んだものであらう。『佛によるの』は佛に寄る、賴る、歸依する意と、夜とに言掛けたもので、そこが現在の私等には邪

魔になるのだが、先づ我慢して居れば、一首に悲しい響があつて、味ふことの出來る歌である。第三句の『はるかにも』といふ副詞はなかなか利いて居る。この初句を、續集の方で、『かひなきは』と訂正してゐるのは、前の歌の訂正同様まづいのである。理窟のうへでは腑に落ちるかも知れないが、それが却つて悪いのである。

暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山のはの月

この歌には、『播磨の聖のおもとに結縁のためにきこえし』とある。播磨の聖は卽ち性空上人であり、上の句は法華經の、從レ冥入レ於レ冥、永不レ聞二佛名一に本づいてゐる。この歌は拾遺集哀傷部はじめ、いろいろの書物に入つて有名な歌であるが、なるほど相當の歌である。意味も明快であるし、聲調にも沈潜したものがあつて巫山戯てゐないのが好いやうである。この歌は式部の初期の歌だといふことであるから、なかなかの才女であつたことが分かる。

いかばかり心深くもあらぬ身もうければ谷のそこへこそゆけ

この歌には、『物の哀れに覺ゆれば、物へなむ詣づると聞きて、いづくへぞ、そこへなむとだにいへと、人のいひたるに』といふ詞書がある。これは問答の體であるから、機智が働いてゐるけれども、全體がさびしい氣持で統一せられてゐるので、結句の、『谷のそこへこそゆけ』の言掛や、問の言葉をその儘用ゐたのなども、受納れることの出來るやうに表現せられて居る。併し何としても女性の語調である。

おほかたの哀れをしるに落つれども涙は君に懸けてこそ思へ

この歌には、『世のはかなき事などいひて泣くに、近く臥したる人の袖のぬるるを、あいなのわざやといふに』といふ詞書がある。平安朝の才女等の生活が眼に見えるやうでおもしろいといふよりも、『君に懸けてこそ思へ』と云ふその語氣に心が牽かれてゐる。

おちつもる木の葉の上に降る雪の我も獨りは詠めざらまし

暗き夜はみれども見えず郭公いづくばかりに鳴きて來ぬらむ

かういふ歌を私は注意してしるしを付けたが、それでも、何處かに足りないものがあることを否定し得ない。式部には、『りんだうの花とも人を見てしがな枯れやは果つる霜隱れつつ』といふ歌もあるし、『あらざらむ此の世の外の思出に今一たびの逢ふこともがな』といふのは小倉百人一首に入つてゐるほどであるが、まづ大體この程度のものと看做していいのであらうから、萬葉集上期の歌などに較べて、まことに幼稚なものと謂はねばなるまい。いろいろと細かしい事を、ひねりひねりいふのを歌のうへの進歩と考へるのは、大體に於て間違だからである。併し、この結論は近代の短歌の考察をも參攷しつつ、なほもつと論ぜねばならぬところである。

長塚節の歌

長塚節の長篇小説「土」が近來頓に世の評判になり、春陽堂の新版が百版以上を重ね、劇場で上演せられ、映畫にまで仕組まれるやうになつた。長塚節が今ごろ黄泉か何處かにゐるとしたら、歿後の名聲云々といつて威張るところであらうし、また實際「土」の場合などは恰もそれに當嵌まるので、あの方言でねちねちと書いた特殊な小説がこんなに有名になつてしまはうとは思ひまうけぬところであつた。吾等は現在の評判を心から喜ぶと共に、氣味の惡いやうな心持もしてゐるのである。

これに反して彼の歌は、それほど世間的に騷がれずに、專門家のあひだにしつとりと染込んでゐるのは、却つていい氣持でもあるが、これが小説と歌との根本的差別であつて、歌はどんなに偉いものでも、小説のやうに世間的にひろがるな

どといふことの出來ない性質のものである。

群山の尾ぬれに秀でし相馬嶺ゆいづ湧きいでし天つ霧かも

ゆゆしくも見ゆる霧かも倒に相馬が嶽ゆ搖りおろし來ぬ

はろばろに匂へる秋の草原を浪の偃ふごと霧せまり來も

ひさかたの天つ狹霧を吐き落す相馬が嶽は恐ろしく見ゆ

おもしろき天つ霧かも東の間に山の尾ぬれを大和田にせり

秋草のにほへる野べをみなそこと天つさ霧はおり沈めたり

榛原は天つ狹霧の奧を深み和田つみそこに我はかづけり

うべしこそ海とも海と湛へ來る天つ霧には今日逢ひにけり

うつそみを掩ひしづもる霧の中に何の鳥ぞも聲立てて鳴く

しましくも狹霧なる間は遠長き世にある如く思ほゆるかも

ひさかたの天の沈霧おりしかばこころも疎し遠ぞける如

常に見る草といへども霧ながら目に入るものは皆珍しき

はり原の狹霧は雨にあらなくに衣はいたく濡れにけるかも

おぼほしく掩へる霧の怪しかも我があたり邊は明かに見ゆ

相馬嶺は己吐きしかば天つ霧おり居へだたりふたたびも見ず

この十五首の連作は、明治四十一年九月の作であるから、長塚節三十歳の時の作といふことになる。相馬嶽は即ち伊香保溫泉のところの山で、あの邊の濃霧を詠じて、一首一首に生を打こんだ丹念にして高級な連作である。併しかういふ種類の歌になれば、「土」が映畫化するといふのとはわけが違つてゐるので、その一般化さへどの程度まで出來るのか、見當のつかぬものであるが、自分等は遠のむかしにそれを諦めてゐるのである。例へば、しまひから二番目に、『おぼほしく掩へる霧の怪しかも我があたり邊は明かに見ゆ』といふのがある。この『我があたり邊は明かに見ゆ』の寫生は、三十歳ぐらゐの靑年にどうして出來たかとお

もふほどであるが、かういふ觀察は、節が子規の敎をまもつて寫生といふことに精進したためで、節にとつては既に卒業してゐるのであつた。節の書いた寫生文的紀行文に、「佐渡島」といふのがある。小木の港にあがつて濱邊を歩き、玫瑰の花を摘むところが書いてある。『腰を屈めて落ちた花をとらうとすると何だか世間が急に靜かになつた樣な氣がした。不審に思うて立つて見ると世間が復た素の如くざあざあと騷がしい。』云々と書いてある。これは明治四十年即ち節二十九歳の時に書いたものである。歌の方の、『我があたりべは明かに見ゆ』といふ悟りはもう出來てゐるのであつた。

併し、この『明かに見ゆ』について、明かに見えようが見えまいが、大局にどう影響するかといふやうな勇猛な批評家もゐる。けれども、「土」に於ける彼のねちねちした敍寫といふものは、この『明かに見ゆ』的な手法をば、散文學の方に適應するやうに徹底せしめたものに過ぎない。よつてやはりこの、『明かに見

ゆ』が私等にとつては大切なものになるのであるが、ただ世間が氣附かずにゐるだけのことである。（昭和十四年七月一日）

――中央公論　昭和十四年八月號――

九月二十九日

改造社の「新萬葉集」は骨の折れた爲事であつたが、その記念に選者十人の歌の朗吟レコードを作るから承知して呉れないかといふ交渉を受けたのは、だいぶ前のことであつた。私は第一朗吟は出來ぬし、さういふことをするのがいやでいやで溜まらぬのである。そのいやだといふ感情は、普通一般の男女がいやだいやだなどといふわけ合のものではなく、切られるやうな實感で、あるひは肉體感と謂ふ方がいいかも知れない。

その以前にも、ある雜誌社で歌人のレコードを作るといふ話があつたが、その時は私は一言の下に拒絶してそれはそれなりになり私も氣が樂であつた。然るに

今度のは、十人の選者が居るのに私一人缺けるとレコードが出來あがらない、折角の計畫が駄目になつてしまふといふ說得を私の目前にされて見ると、私一人意地惡をするわけには行かない。そこで私も引受けた。よくよくのことで引受けては見たものの、一たび實行のことに聯想が及ぶと實にいやでいやで溜まらない。何とも彼とも爲樣のないほどいやである。それのみではなく今度は引受けた自分の腑甲斐無さがいまいましくなつて來る。

そのうち、もう數人の選者の吹込が濟んだといふ噂も聞いたし、なかにはレコードの出來上つた人もゐた。私がぐづぐづしてゐるうちに夏が過ぎた。東京に歸つて來ると、選者九人の分は全部濟んで、私がただ一人殘つてゐるといふことであつた。

九月二十五日に、改造社が「新萬葉集」完成記念大會を催すこととなり、選者と評議員とが、芝の紅葉館に招かれて午飯をたべたが、その時話合つて見ると、

私の分がただ一つ殘つてゐるといふのは、世話人の懸引で、私のほかに尾上柴舟博士の分がまだ殘つてゐた。私一人ばかり殘つてゐるとおもつてゐたのに、尾上博士がまだ殘つてゐると聞いたとき私は强い味方を得たやうにおもつた。

その日の午後、上野精養軒で新萬葉集完成記念の全國大會が催され、夕飯のとき既に出來あがつた八人の選者のレコードを聽くことが出來た。どれもどれも各選者の特色を發揮して實に手に入つたものである。けれども、私もつひに吹込實行をせなければならぬとおもふと自然憂鬱にならざることを得なかつた。

その晩、世話人の松下大作君にせき立てられて、九月二十九日に吹込することを約束して歸宅した。それから、「新萬葉集」に載つた私の歌十五ばかりを選ぶこととし、毎晩寢てから、どういふ具合に吹込んだら好からうか、節つけてやる朗吟は到底見込が無いとすると、朗讀といふことになるだらうが、それもどういふ按配にやつて好いのか見當がつかない。そこでいろいろ考へた揚句に、私の師

匠の伊藤左千夫翁が口ずさんでゐた口調をおもひ出してそれを眞似て見ることにした。そのころ、若い歌の友人が來て『兎に角先生はお馴れにならないのですから、練習する必要があります』と云つて、明治神宮内苑の林間に於て歌の朗讀の練習をすることをすゝめてくれたので私は直ちにそれに賛成した。

なぜ二十九日に極めたかといふに、その日は診療日でないといふ訣合のためであつたが、午前中は娘の轉校のことで手間取り、丁度その時分、野上豐一郎氏がロンドン大學で講演をするため、靖國丸で出帆されるので、一路平安の文句を書いて家人に打電を命じ、午飯を濟ませて明治神宮に出掛けた。さうすると參道でひよつこりと野上氏に逢つた。もう神戸あたりに居るとおもつてゐた野上氏に參道で逢つたのであるから、奇遇とも奇縁とも何としても嬉しい氣持で立話をしはじめたが、朗讀練習が氣にかかり出して一しよに珈琲も飲まずにわかれた。

それから林間の道を歩きながら朗讀の練習をしたが、第三句がいかにも旨く行

かない。これは矢張り息を切るのがよいか、或はさうでなくて續ける場合もあつてよいか、見當が好くつかない。途中で參拜の人々に逢ふ度每に練習を中絕したりして、決して旨くは行かない。それからおしまひの結句のところもどう讀んでよいか分からない。しかし一とほり讀んで內苑を一めぐりして、あとは行きあたりばつたりと覺悟して、代々木原でやつて居る大學生等の敎練を暫らく見て、それから家に歸つて午睡をして元氣づいたところに、丁度松下大作君が迎に來られる都合になつてゐたので、午睡をするつもりで歸宅して見ると、もう松下君は來られて待つてゐた。

それから二人は、丸の內のコロムビヤ會社に出掛けた。私は室內に入つてからも外貌平靜を裝つてゐたが內心びくびくであつたのに、私の吹込のまへに少女の一團があつて、童謠をうたふのを見れば實に熟し馴れ切つたもので、私は全く膽を奪はれてしまつた。それから私の吹込であるが、はじめから臆病的な動悸がし

息切れがして旨く歌が讀めない。歌の一句と次の一句のあひだの休止も調和がとれない。これは醫語で呼吸促迫といふのに似た狀態だからであつた。第一回の豫備朗讀十二首ばかりの歌を讀んだらもうへとへとである。また、明治神宮內苑で慌てて練習した具合がいざとなればこはれてしまつて應用が出來ない。

それに驚いた、私の東北辯が淨玻璃に映つた亡者のごとくに客觀化せられてゐた。第二回目の吹込は本式に盤に載るといふので、のぼせあがつてゐたし、第三回目の吹込はへとへとでもはや息が續かなかつた。

二人は會社を辭し、私の希望で東劇地下の戰爭ニュース映畫を見た。皇軍の勇士が奮戰して勝つ有樣を目のあたり見て、それから銀座の三河家といふところで松下君から夕餐の御馳走になつた。歸りがけに若い歌の友人のところに寄つて、今日の『動悸』のことを報告しつつ苦笑をした。

ああいやだいやだ。けれども皇軍の勇士が猛然として敵前渡河をすることをお

もふなら、何でもない。その時はこんなことも私が云つたので、その後私の身にとつて無理な事でも引受けたりすると、『先生の敵前渡河ですか』などと冷かされ冷かされしてゐるのは、かういふわけに本づいてゐる。（昭和十四年三月二十六日）

――新日本　昭和十四年四月號――

家康と秀吉

家康が駿府にゐたとき、館の夜勤をしてゐる者どもが四方山（よもやま）の話をして、天變地怪にはそれぞれ用心をする方法もあるが、雷ばかりは爲樣（しやう）が無いといふやうなことを云つた、それを家康が聞いて、近侍の者に云ふに、世間では雷鳴の時に、家族が皆一しよに寄合ふ癖があるが、あれは甚だ不覺悟である。さういふ處へ若しも雷が遠慮すれば好いが、なかなか遠慮せないものである。この前も親兄弟子供ども寄合つてゐるところに落雷して親族根絶（ねだや）しになつたことがある。雷の用心には、家內の親族が一人一人に別れてゐることが肝腎である、さすれば若し落雷して一人過（あやま）つても、殘る者恙なければ如何樣にもなる。所詮雷に擊たれて死する

程の運命の者は是非ないと思はねばならぬ、とかう云つた。
この話は、「家康公雷の話」として翁草巻百四十五に載つてゐる。私はこの夏、新聞の随筆欄に頼まれて雷の事を書いた時、家康のこの話を入れようとしたが、紙面の都合で止めた。この話は短いものだが、用意周到な家康の面目が躍如としてゐる。家康は、避雷など訣は無いとは云はない。また家康は自分の威光で雷は落ちないなどとも云はない。雷は落ちる時には落ちる。『所詮雷に打たれて死する程の運命の者は是非なし』と云つてゐる。死ぬ運命のものは致し方ないが、被害の者は出來るだけ少い方が好いといふ論法なのである。
秀吉の小姓に羽柴長吉といふ者がゐて、無類の美少年であつた。秀吉或る時、誰も居ない處にその少年を呼んだ。秀吉は日頃男色を好まないから、どうも變だと近侍の者ども怪んだが、さてよく様子を調べて見ると、秀吉はその少年にむかつて、『おまへに姉か妹か居るか』と訊いたのであつた。

この話も翁草卷六十一（老人雜話拔萃）に、「美少年羽柴長吉の事」として載つてゐる。この話は佳話であり、私は原文に愛惜するので次にその儘を書いて置く。『羽柴長吉は、太閤の小姓無類の美少年なり。太閤或時人なき所にて、近く召す。日頃男色を好み給はぬ故、人皆奇特の思ひをなす。太閤とふて云、汝が姉か妹か有やと。長吉顏色よきゆゑなり。』この原文を私は愛讀して措かない。

かういふ簡單な話を、誰いふとなく語り傳へて後世の私如きものの耳にも入つたが、これは秀吉が英雄だからして、かういふ些末な話柄にも人々が興ずるといふかも知れないが、必ずしもさうではあるまい。萬事手堅い家康には、『汝が姉か妹か有やと。長吉顏色よきゆゑなり』の境界には生涯入りがたかつたものと看做していい。（昭和十二年十月）

一　瞬

九月二十九日は丁度水曜日に當つてゐた。私の病院の本院の方に總廻診に行つたとき、事務から、昨日或る西洋人の入院希望があつて病室を見に來たが、言葉の關係で萬事都合の惡いことをおもひ、K大學病院の方を御すすめしてやつたといふ報告であつた。私はそれを聞いて、適當の所置を取つたといつて頷いた。ところが翌三十日に私の病院の分院の方にその西洋人が入院して居た。そのことを私は三十一日に知つたのであるが、通辯の云ふのを聞くと、その病人は市内のQといふ病院に入つてゐたのを、病室の設備が惡いといふ口實で退院して來たのであつた。そこで折角K大學病院をすすめて、私もそのつもりでゐたところが、そ

れが無駄になつたのみでなく、突如として私の分院の方に入院してゐたのに私は驚いたが、私は別して小言をいふほどのことはしなかつた。

病人はR・Mといふ女で獨逸人と英國人との間に出來た混血兒であるが、その主人といふのはニュルチンゲンの公爵（Fürst von Nürtingen）で、ウィルテンベルヒの伯爵（Graf von Würtemberg）でもある。ニュルチンゲンといふのは西南獨逸の黑林地方にある小さい町で、私もドナウ河の源をさぐつたとき一二度その邊を歩いたことがあつた。其處の豪族の裔ででもあるだらう。從つてウィルテンベルヒの治下にあつて伯爵を貰つたのであらうが、現在は日本に來て新聞通信員をしてゐる。純粹の獨逸人らしい重々しくて柔和な品格の人である。

病人は平素から神經過敏で主人を困らせてばかりゐたが、約二ヶ月程前、主人が日支事變を通信するため上海に行かねばならなかつた等の事があつたのが、病氣の誘因となつたのかも知れないといふことであつた。その頃から特に氣が大き

くなり、東京市ぢゆうを自動車で走り歩き濫りに高價なものを買つて、寶石とか化粧品とかいふ種類のものは、身分不相應な金額にのぼりのぼりしたといふことであつた。また羽田飛行場に行つて無目的に飛行機に乘らうとしたり、氣に喰はぬと側の者を誰かまはず毆打する。放歌放言する。時には素足の儘、寢卷の儘、外に飛出したりするので、滯在の洋式ホテルにもゐることが困難になつたので、先程もいつたＱ病院に入院したのであつた。そして、なぜその病院にも居られなくなつたかは後に分かる筈である。

さてその女の病人が私の病院に入院すると、出來るかぎりの優遇をした。それに病人もはじめのうちは生活が珍らしかつたらしく、日本的床間のある、其處に日本的掛物の掛けてある十疊間にベットを据ゑ、天井からは造花の藤の花や櫻の花が垂らされてゐるし、時にはエキゾチックな象徴的な提灯が吊られてゐるし、病院專屬の看護婦のほかに、看護婦會からの派出婦二名が附いてゐるといふ具合

であるから、本人も珍らしがつて過ごしてゐた。

併しその女は病人である。料理は帝國ホテルか銀座のローマイヤの物でなければいけない、菓子も銀座のジャマンベーカリーのでなければいけないといふやうなことを言ひ出して、青山邊の西洋料理店のものでは心がをさまらない。或る時には大使館に出かけるといつたり、羽田に出かけるといつたり、それを止めるので看護婦は二度も顔面を打たれた。また天井から吊つてあつた提灯を引ずり下して靴でめちやめちやに踏んだことなどもあつた。

十月五日は火曜で私の診察日なので、豫め樣子をききただし、附いてゐる女の通譯を呼んで前日來の事柄もただし、醫員と看護婦長、看護婦を隨へて廻診に行つた。女通譯のいふに、『どうも我儘がおありのやうですから、今日は院長さんから少しきつくお仰つて戴きたいのです。』病室に入ると、本人はベットの上に靴を穿いた儘むかう向きになつて寢てゐる。トランク等はもうきちんと積み重ね

てある。これは今日院長の廻診があつたら早速退院するつもりで、その支度が出來あがつてゐるところであつた。きのふまでやかましく退院を迫つてゐたのを、今日は院長の診察日であるから、それまで待つやうになだめてゐたところに私が入つて行つたのである。併しこの院長に退院處置の責任を持たせるといふ遣り方は、醫員等が廻診の際に取る常套手段であつて、いづれの病院でもあへて珍らしいことではない。

女の通辯は英語で私の廻診に來たことを告げたが、病人の彼女は私を見向もしない。そこで私は、『今日はいかがですか』と云つた。私は、彼女が幾らかづつ日本語の出來ることを知つてゐた。それでも彼女は見向もしない。そこで私は獨逸語で、『一寸御診察しませう』といひつつ、彼女をベットの上に起すやうにした。すると彼女は起きあがつて兩足をベットから垂れて私と向き合つた。さうして見ると瞳が碧くて鼻が細く直感が猿のやうに見えた。その時彼女はべらべらべ

らと早口で獨逸語をいつた。憤怒の色相らしいが、餘り早口なので私には斷れ斷れにしか意味が分からない。併し型の如くに聽診器を耳に插んで胸のあたりを見ようとした刹那に、その一瞬に彼女の手掌が私の左頰に飛んで來た。

そのとき私の左頰が疼痛を感じたといふよりも、私はくらくらと眩暈して倒れさうになつたのを、滿身に力を入れて辛うじて堪へた。どのくらゐ勢づいて彼女の手が飛んで來たかといふことは、洋服の胸の上隱にもう一つの眼鏡がサックに入つて用意してあつた、その眼鏡がこはされてゐたのを見ても分かる。

私は近眼であるが、四十四五歲の頃から老眼と一しよになり、讀書したり物を書いたりする時には近視の度のもつと弱いものでなければ駄目になつてゐる。それが年齡と共に著しくなり、普段の眼鏡では聽診器を當ててゐて相手の顏がはつきり見えないぐらゐになつてゐる。そのとき私は聽診器をば一旦離し、稍距離を大きくして彼女を見るにやはり直覿が猿猴である。私は心頭むらむらとして來て

彼女の左頬をおもひきりなぐり返さうと思つた。ところがそれを我慢した。彼女のひひひひと冷笑するのもかまはず、私は彼女の兩手を看護婦につかまへさせて置いて、型のごとく診察を了へた。そしてアウフ・ヴィダー・ゼイエンと云つて踵を返す時に、彼女はヘア・プロヘッサアなどと猫撫聲になつて何か言ひかけて來たが私は顧みなかつた。そしてほかの病室を廻つた。彼女は私に追かけて來て何や彼や言ふけれども私は一語も應へなかつた。そして私は極めて平靜を粧つてゐたが、顏面の筋中に潜めた細かい憤怒の波を看取したものは看取したであつただらう。私は醫員や看護婦を隨へて廊下を静かに歩きつつ、二十年も前、私が未だ東京府巣鴨病院の醫員をしてゐたころ、院長の呉先生が早發性癡呆患者から頭部を打たれたことを思出した。その時は醫員の助手や副手・介輔やが十餘名も先生に隨ひ、看護長が先導で廻診して廊下を通つて行つたときのことであつた。その患者は極めて平靜な顏をし腕組などをして廊下に立つてゐたのだから、何一つ

怪しむべき點がなかつたが、先生が靜かに彼のまへを通過せられるやいなや、手拳を以て先生の後頭を毆つたのであつた。私の場合は西洋の女だからして、彼女等は稚い時からさういふ修練を積んでゐるからして、あのやうに電光のやうに手拳が飛んで來たのである。吳先生の場合は日本人だから拳を以て頭を打つたに過ぎぬので、そこに遲速强弱の差別があるなどといふことを私は思ひつつ、ひとり部屋に落著いた。それから暫くたつて私は女通辯を呼んだ。

そして、此處の病院ではこの病人はあつかひにくい、本院の方ならばどうにでもなるが、それにしても一度斷つたのだし、いかにしても困るから、何處かほかの病院がよからう、M病院が一番よからうといふことを話した。その時、女通辯は、『實はQ病院でも院長を打ちましたのです』といふことをはじめて云つた。

調べて見るとQ病院には三日しかゐなかつた。そして私の病院の本院に交涉に來、またK大學病院に行き、また私の分院に來たのだから、それに二日を費した

とすると、Q病院で本當の入院らしい入院は一日といふことになる。カバンなど三十個も買ひ込み、七百圓の寫眞機を買つてそれを銀座通で見知らぬ日本人に奨れたり、宮中に參內しようとしたり、公爵の生活をするにはもつと金が無ければならぬ、それには今の主人の收入ではやりきれぬと云つたりしたので、Q病院に入院したが、その日に病院の醫員と院長とを毆打してゐる。それでQ病院退院の理由もはじめて私に分かつたのであつた。

私の診察日には病人のほかに、ほかの用で來る客が多く、その日も既に五六名待つてゐた。中には歌の添削を乞ふものもあつた。併し應接間に落著くと、私の心は急に殘念になつて溜まらない。いまいましくて溜まらない。そこでほかの來客に對しても快くもの柔かに應對することが出來ず、さうして心中甚だしく苦しんだけれども、どうにかしてその日の午前を過ごすことが出來た。

私の心が、なぜいまいましくて溜まらぬかといふ訣のうちには、かういふ要素

も混じてゐた。私は獨逸墺太利に留學して彼地の精神病院を幾つも見てまはつてゐるが、醫員卽ち Herr Doktor といへば患者等は非常に尊敬する。況んや院長たる Herr Direktor 或は Herr Professor に於てをやである。これは縱しんば誇大妄想を有つてゐる患者に於て卽ち同斷である。そんならなぜ彼女はQ博士に對し、私に對し、そんな眞似をするのか、これは人種的に看て吾等を一段下等なものと看てゐるからである。彼等は何や彼や世辭を弄するけれども、それは表面の辭令で、內心に立至るとまさにさうなのである。それゆゑ、兒童や狂者には表面的辭令抑制の除かれた掛値のない地金を暴露して、この黃色の人類を侮蔑するのである。私はそれを好く知つてゐる。そこで左頰の疼痛はさし置いても、この人格的の侮蔑がいまいましくて溜まらぬのである。それを私が我慢し了せたといふのは、いつたい何のためだとおもふのであるか。さう私はひとりで思つた。

それから彼女にはもうひとり男の通辯が附いてゐた。この通辯は無遠慮で平然として傍若無人の言を弄する。病院の事務員や看護婦に對しては、頭からおつかぶせるやうなことを言ふ。また直接命令的な口調を使ふ。これは外國人のみを相手の業をしてゐるために、いつの間にか日本的な遠慮勝な行動が失せたものとも解釋することも出來るが、何れにしてもひどく無禮な男である。

六日の夕方、今日ぢゆうに轉院させて貰ふやうに堅く約束して、本院の總廻診に出掛け、夕景になり歸つて來て見ると、ホテルにゐる彼男と私の分院の看護婦長とがしきりに談合してゐる。婦長は寧ろ哀願的な口調を交へて轉院せんことをせまつてゐるが、男の方でどういつてゐるのか、何時までたつても話の埒が明かぬので、私が電話口に出てやはり彼女の轉院のことを話すと、驚くではないか、彼男は私にむかつて、『何ですか、それは』とか、『そんなこと何時約束しました』とかいふ口吻の言ひ分である。私は焰のやうに憤怒して、もう容赦はせない。直

ちに彼の言ひ分を征伐し、M病院に轉院せしめることを院長に談じた。M病院から二名の醫員が來て忽ち注射して彼女を連れて行つた。

M病院には私の弟が醫員になつてゐる。ところが計らずも、私の憤怒の原因となつた彼女なることを知らずに弟が彼女の受持になつた。そして約二十日間も治療してゐるうちに、症狀がいつしか輕減して、相模湘南の地にしばらくの間轉地加養し、獨逸船に乘つて郷國へ向つて出帆したといふことである。或はもうハムブルクに著いたころかも知れない。

彼女がM病院に行つてからのことである。私は、夜半などに目が醒めると、彼女から毆打せられた私の左頰の脹れが、齒齦の邊まで及んで、澤庵のやうな固いものの嚙めないことがはつきりと意識の上に浮んで來る。さうすると忽ちにして彼女のことがいまいましくなつて來て、ぢつとして寢て居られぬほどである。心臟の鼓動が劇しくなつて來る。一層のこと、明日にもM病院に押掛けて行つて彼

女に復讐をしてやらうか。夜半におこる如是の聯想は段々放恣になつて來てとどまるところを知らない。それならどうして復讐するか、夜分に私はM病院を訪ね、當直の醫員に附いて夜の廻診を見てまはる。彼女の室の廻診が濟んで醫員等が去つたあとに、私は廊下のすみに身を潜めて、時を窺つて彼女に近づき、何も言はずいきなり彼女の左頰に手拳で一擊を加へ、咄嗟に近くの便所の中に隱れるといふ段取である。私は彼女の病室とその周圍の有樣をいまだ知らないが、兎も角そんな具合にして復讐をしてやる。それが今からでも直ちに出來さうに思へる。彼女が悲鳴を揚げるか揚げないうちに、もう一つ思切つて彼女の頰をなぐりつける。儘よもう一つなぐりつけろ。もう一つ毆れ。さういふ小氣味好い場面が夜半の私の眼前に現出する。が、これは何處まで行つても所詮あはれな空想的場面に過ぎなかつた。然るに斯の如きあはれな空想的復讐が夜な夜な幾回となく繰返されてゐるうちに、もうそんなに私の心が悔しくなくなつて來た、殘念で溜ま

らぬとおもふ强烈な感情もいつの間にか薄らいで來たのは、この空想的復讐の蓄積のためであらうか、或は怱忙たる『時』の運りのうちに何時ともなしに洗はれ去られたものであらうか、私自身にもよく分かつてゐない。もう空想的復讐もせなくなつて、談たまたま彼女の事に及ぶことがあつても、私はただ微笑し乍ら簡單にそれに應ずることが出來るまでになつた。

私はこのごろ、九月にあつたこの出來事を追懷して思ふことがある。私がかういふ種類の病者に親しむやうになつたのは、父がこの專門になつてから勘定すると三十五年程、私が大學を出てから勘定しても二十七年になる。實地醫としても既に大家の部類になつた。この『感謝せられざる醫』としての悟に入つてゐる筈も、とほに過ぎた頃と、人も許し自分も許して居たことであつただらう。然るにその結論は全く駄目な結論であつた。（昭和十二年十二月）

卷末記

此の大切な重々しき時世に、私の書いたもののごとき、片々たる淺近雜語を一冊に纏めるなどといふことは、實は氣が引けて溜まらぬのであつたが、少雨莊主人齋藤昌三氏との關係はかういふ訣合である。

昭和三年から四年にかけてであるから、もはや十年を經過した。改造社の現代日本文學全集第三十八篇現代短歌集のために、私は明治大正短歌史概觀といふものを作つた。此は能ふかぎり文を簡潔にしたが、資料を豐富にしてそれを壓搾して收めたものであつた。明治大正の短歌史として兎も角も全般的に纏めたのは、私のあの文章を以て嚆矢とする。そんな具合であるから、資料を得るのに難澁をし、また資料を蒐めるのに勉强もした。

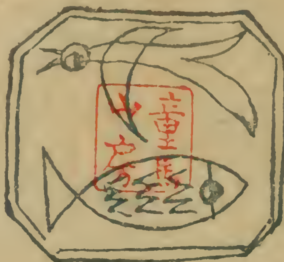
或日私は改造社の社員と共に茅ケ崎の少雨荘主人を訪うて、古雜誌の數々を見せて貰つた。その時私は少雨莊は階下も階上も物置も便所の隅も古書物古雜誌を以て充滿してゐるのに驚入つたのであるが、私は古い雜誌から短歌史に關係ある部分を寫し取り、それでも日暮に近づいて間にあはず、若干の書物と雜誌とを拜借して持歸つたのであつた。大正三四年の交、木下杢太郎氏と相語らひ、明治の詩史を作らうとし、木下氏は新體詩史、私は短歌史といふ風に分擔して、餘程の資料を蒐集したのであつたが、二人の境遇がさういふ爲事に專らなることを許さず、徒らに時が過ぎてゐると、大正十三年の暮の火事で私はさういふ資料を全部燒いてしまつた。併し嘗て一たび蒐めたことがあるので、書物の名は知つてゐた。少雨莊から拜借した、文壇照魔鏡、文壇笑魔經などといふのも、嘗て私も所持して居たものであつた。只今では、明治大正の短歌史を研究する諸家が輩出して、精到な書物も發行せられたが、私の書いたころには、なかなか斯うは行かなかつた。齋藤氏の古雜誌蒐集の如何に貴重なものであつたかは、深く私の身に染みて忘却し得ざるものである。

さういふ訣合である。齋藤氏が書物展望社を創め、雜誌書物展望と共に、世に有名な展望社

ものと謂はれる圖書の出版を續行せられて、その中に私の雜文集が加はるといふことは名譽であるから、さうして貰つたので、その約束も六年ぐらゐ前のことであつただらうか。治亂興亡に關係ない、學問技術に關係ない、諷諭一つない、教訓一つない私の雜文集のごときは、もうどうなつたところでかまはぬが、若しこんなものでも一讀していただければまことに忝いことである。昭和十五年春、齋藤茂吉。

不斷經終

昭和十五年四月二十一日　印刷
昭和十五年四月二十五日　發行
昭和十五年五月十五日　再版



隨筆 不斷經
定價（仙花紙版）金參圓

著者　齋藤茂吉

發行者　齋藤昌三
東京市京橋區新富町三ノ七

印刷者　田中末吉
東京市牛込區改代町二四

發行所　東京市京橋區新富町三ノ七
振替東京六〇八〇八
電話京橋〇八九七
書物展望社

理想社印刷

古谷夏子
Natsuko Y. Furuya

随筆 不斷經 正誤表

頁	行	誤	正
一一	八	不(フ)空(ク)	不(フ)空(コ)
一一	八	三摩耶經(キヤウ)	三摩耶經(ケイ)
一一	一一	善(ゼン)哉(ザイ)	善(セン)哉(ザイ)
一八	二	鳳來山	鳳來寺山
二九	九	鳳來山	鳳來寺山
三〇	一	鳳來山	鳳來寺山
六五	一二	一月十一△日	一月十○日
一二九	二	悲痛な△跡を	悲痛は○跡を
一三一	一	ユーモアをは△漂せ	ユーモアを漂は○せ
二三二	一	金東△亭	金車○亭
二四七	一	あ△づめり	な○づめり
二五六	三	讀書△新聞	讀賣○新聞

昭和十五年五月

書物展望社

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03186 4853